

# テスト生と女神達の物語

アニメ好きの福袋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公の煌斗は、廃校阻止の案として出されたテスト生として音ノ木坂学院にやってくる。そこから始まるテスト生と女神達の物語。

## 目次

### 番外編

「番外編」 絵里の誕生日 | 1

「番外編」 花陽の誕生日 | 10

「番外編」 女神とテスト生のバレンタインパーティー | 18

### 設定

始まる前のキャラ設定（オリキャラとメインキャラの親の名前等）

32

### プロローグ

女子校入学の機会は突然に！ | 34

1章スクールアイドルを始めよう！

スクールアイドルを始めよう！1 | 39

スクールアイドルを始めよう！2 | 48

練習開始っ！ | 56

私たちの曲 | 66

ファーストライブ前日 | 81

女神と+αだけのファーストライブ | 92

1・5章 休息と小さな事件

まさかの展開？ | 105

嫌な再開 | 114

思わぬ出会い（前編） | 123

思わぬ出会い（後編） | 130

2章新メンバー加入

出会いを先取り | 135

新たな情報と少しの弱音 | 142

三人の女神

悩める女神

## 番外編

### 「番外編」絵里の誕生日

煌斗side

今日10月21日は僕の彼女の絵里ちゃんの誕生日だ。

去年？の卒業式の後に絵里ちゃんから告白された。正直びっくりした、好きだったけど（今も好きだけど）絵里ちゃんはそうじゃないと思っていた。

去年は色々なことがあったなあ、廃校の危機から始まって、観客がないファーストライブ、今考えると初めからμ'sあそこにいたんだな。そして、一年生、にこ、絵里ちゃんと希が入って、廃校を延期にしたり、それから、ことちゃんが伝説のメイドだったり、合宿したり、ことちゃんの留学やら色々あって解散の危機だったり、A—R I Sとのライブだったり、A—R I Sにかけて、ラブライブ優勝したり、アメリカライブ、道路をかききつてのスクールアイドル全員でライブしたりとものごく濃い一年だったな。

今は、三年生組が大学生になって中々全員集まれないけど、たまには集まっている。

唐突だが今日の予定は

午前が絵里ちゃんとデートをして、午後にμ'sメンバーと家でパーティーをするであっているはず、後で絵里ちゃんに聞いてもらう。輝夜は雪穂と亜里沙と遊びに行っているからいない。

そろそろ時間だ。もうすぐ来るかな？

『ピーンポーン』

噂をすればなんとやらだ。

絵里side

今日は私の誕生日、今年もμ'sのみんなと煌斗が祝ってくれるから嬉しいわ。実は、私と煌斗は付き合っているの、卒業式の後に私から告白したんだけどね、まさかOKがもらえるとは思ってなかったからものすごく嬉しかったわね。たぶん、好きだって気づいたのは、あ

のμsに加入したときだろうけど、初めてあったその日から心のどこかでは好きだったんじゃないかしら？後から聞いた話だけど、元々煌斗も私のことが好きだったみたいなの。

・自分で言っておいてあれだけど恥ずかしいわね／／。  
・もうそろそろ時間ね。じゃあいきましようか。

♪♪

煌斗の家の前

『ピーンポーン』

煌斗side

『ピーンポーン』

煌「はーい」ガシヤ

絵「おはよう、煌斗」

インターホンがなったから出てみると、やはり絵里ちゃんだった。

煌「誕生日おめでとう、絵里ちゃん」

絵「あ、ありがとう煌斗／／」

何故か絵里ちゃんは照れていた。これまで、デートを何回もしたし、何なら初デートはアメリカだったし。あれ？もしかして、高校生の初デートがアメリカって凄い？

煌「まあ、上がって。あ！朝食まだだけど、もう食べた？よかったらつくるよ」

絵「まだ食べてないわねお願いしていい？」

煌「全然、大丈夫だよ。適当にくつろいで待ってて」

絵「ええ、わかったわ」

その後、僕は素早く、そして美味しく朝食を作った。その時は絵里ちゃんがソファアーに座ってテレビを見ていた。

煌「絵里ちゃんーんご飯出来たよ！」

絵「今いくわね」

僕がご飯が出来たから呼ぶとすぐに来てくれた。

煌「それじゃあ」

煌絵「いただきますー！」

絵里ちゃんがパクつと口に入れて食べているのを僕は見ていた。

つくった側としては感想が気になるのである。

煌「どう？」

絵「ハラショー、とつても美味しいわ」

美味しくできていたようだ。まあ、何回か作っているんだけどね。

煌「そう言えばさ、絵里ちゃん」

絵「ん？どうしたの？」

煌「今日つて午前がデート午後がμ sのみんなとパーティーでいいよね？」

絵「それであっているけど、変わったの？」

どうやら、勘違いしたようだ。

煌「違うよ、もし間違っていたら、嫌だなんて」

絵「煌斗が間違うはずがないじゃない」

どうやら僕は絵里ちゃんに物凄く信頼されているようだ。信頼されているなら嬉しいからいいんだけどね。

それから、食べ終わり皿を洗って、少し談笑してからショッピングモールに向かった。

♪♪♪

煌「ついたけど、まずどこに向かう？」

絵「そうねえ、まず服を見に行きたいわね」

煌「なら、あそこかな、行こう」

そう言いながら僕は手を繋いだ。

絵「え！」

急につかんだので絵里ちゃんはびっくりしていた。

煌「ごめんね、ないと思うけどはぐれたらと思って繋いだんだけど嫌だった？」

絵「そういう訳じゃないのよ、ちよつと急だったから」

良かった、嫌だったら結構へこむから。

♪♪♪

あれから、色んな所を寄り道しながら、服屋に来て買い物をしていく。

絵「煌斗、この二つだったらどっちがいい？」

絵里ちゃんが二種類の服を持ってきていた。

あんまり僕センスないと思うけど大丈夫かな？

煌「それだったら、右側が似合うけど」

絵「けど？」

煌「本当にいいの？僕あんまりセンスないと思うけど」

絵「なんだそんなことね。それなら心配ないわよ、μ、sの皆は煌斗がセンスあると思ってるし、ことりもあるっていったし」

それは初耳だった。案外僕ってセンスあるんだな。それにμ、s皆つてことは絵里ちゃんもだよな。

そう思つて少し顔がにやけてしまう。

絵「そんなにことりにセンスあるって言われたのが嬉しかったの？」

頬を膨らませて嫉妬している風に聞いてきた。てかつ可愛すぎやバイかも

煌「そうじゃなくて、僕にセンスがあつたのと、絵里ちゃんもそう思つてくれたのが嬉しくて」

絵「そ、そう／＼／＼」

あれ？また照れた今日はやけに照れてるな。

その後は聞いておこう昼食を食べて帰宅した。

♪♪♪

絵「そう言えば煌斗ってどこの大学にいくつもりなの？」

ソファアでくつろいでいるときに突然聞いてきた。

煌「僕は絵里ちゃんたちが通っている大学にいくつもりだよ。あそこつて共学てまあつてたよね？」

いつてなかったが、絵里ちゃんたち元三年生組は同じ大学に行つた。あそこつてそこそこ難しかったと思うけどにこ凄く頑張つたんだな。

絵「そうなのね。そうしたらまた一緒に学校に通えるわね」

煌「そうだね。まずは受からないといけないけど」

ちなみに初めはμ、s 人気が物凄くあり、毎日大変だったそうだな。まあまだμ、s 人気あるんだけどね。



『ピーンポーン』

そんな感じの話をしているとインターホンがなった。皆が来たのであろう。

煌「どーぞ開いているから入ってきてもいいよ」

「わかったよ」

「「「「「お邪魔しまーす」」」」」

煌「邪魔するならかえっていいよ」

に「お邪魔しますってそう言う意味じゃないわよ！」

煌「あれ？にこしばらくあつてない間に身長縮んだ？」

に「はあ！縮む分けないでしょこれでも延びたよのて言うかあんたが伸びすぎなのよ煌斗！」

煌「そうかなあ今確か178位だからもう少しで180いくんだよね」

そんな風に僕とにこはコント？をし、周りの皆は苦笑いをしていた。

煌「でもほんとに久しぶりだね、にこ、希とはたまにあつていたけどにこは全然だからね」

に「まあそうねそれよりもはやく準備をするわよ」

煌「そうだねじゃあ皆プレゼントは取り敢えず僕の部屋に置いておいてそれと、料理するからことちゃんとにこはついてきて。あ！他の皆は置いたらリビングでくつろいでいいからね」

穂「了解したよ！」

♪♪♪

料理は順調に進んでいった。

そう言えばことちゃん去年は速すぎてついていけてなかったけど今年はついてきてるな。

こ「そう言えば煌君って何か夢とかあるの？」

突然そんなことを聞いてきた。

夢かああれかな？

煌「夢？教師になって見たいとは思うよっ。」  
に「なんかはまるわね」

煌「そうかなあ、それよりも二人は何かあるの?」

僕が聞かれたので他の二人にも聞いてみた。何となくわかるけど。ここ「ことり?」ことりはねえやっぱり服飾関係の仕事かな?衣装とかつくって楽しかったし。留学の機会もあったけど」

ことちゃん予想通り服飾関係の仕事がやってみたいようだ。まあずつとやってたしね。

煌「まあ去年はね」

こ「でも後悔はしてないよ?だって皆と頑張れたんだし」

煌「僕も壮思うよ、それでにこは?」

に「にこはやっぱアイドルよ!」

にこも予想通りアイドルだ。そのために今、養成所みたいなのに通っているらしい。

煌「そう言えばにこってA—R I Sと一緒にプロのアイドルにならないか?って話し来てたんじゃないの?」

確かににこにそのような話しが来ていた気がする。

に「その事ね。それなら断ったわよ。私の中ではA—R I Sはライバルだったし

そんなことより」

いや、そんなことではない?結構重要な話し?だよ。

に「今更だけど、あんたと絵里が付き合ったのは意外よね」

煌「そうかな?」

に「そうよ。あんた気付いてなかったと思うけど、sの中でもあんたのことが好きだって人何人かいたわよ」

煌「え!そうなの」

初耳だ。元々絵里ちゃんに告白される前は誰も僕のことを好きな人いないと思っていたし。

に「えつと確か、真姫ちゃん、花陽、穂乃果、後ことりね」

へえ、真姫ちゃんに花陽ちゃん、穂乃果ちゃん、ことちゃんね。以外と多いな。ん?ちよつと待って

煌「ことちゃん!」

こ「ピヤア!」

煌「ことちゃんそうだったの！」

こ「う、うんそうだけど／＼／＼／＼、それよりも料理完成したから  
食べよう／＼／＼」

あつ逃げた。

♪♪♪

ご飯を食べ終えてやっとプレゼント渡した。え？食事の時間はど  
うしたかって文字数多くなりそうだから飛ばしたよ。(メタイ)

穂「それじゃあプレゼント渡しだね！」

こ「まずは私と花陽ちゃんだね。」

花「はい、どうぞ」

こ「私達でくれてたのが作っての」

花「チョコケーキと服だよ」

ことちゃんと花ちゃんからのプレゼントはチョコケーキと服だっ  
た。

服とかさすがだなあ。もう売り物レベルだよ。

絵「ありがとうケーキは後で皆で食べましょう」

穂「本当！」

海「穂乃果はしやぎすぎです」

絵「いいのよ」

穂「それじゃあ次は私達だね」

海「はいこれを」

そう言っ箱を渡した。箱の中身はブレスレットだった。

穂「海未ちゃんと一緒に作ってみたの」

海「初めてだったのですがどうですか？」

なんと二人の手作りのようだ。

何で、みんな手作りなの？しかもクオリティー高いし

絵「ハラショー嬉しいわありがとう」

そう言いながら絵里ちゃんはつけた。

真「次は私達ね。これどうぞ」

凜「凜達も一緒につくったんだよ」

やっぱり手作りでした。中身はネックレスだったよ。

しかも見た目完璧！

絵「二人ともありがとう」

真「べっ、別に／＼」

凜「またまた／＼照れちゃって／＼」

真「／＼／＼凜／＼」

絵里ちゃんにお礼を言われて、照れた真姫ちゃんを凜ちゃんが煽つて、真姫ちゃんが凜ちゃんを追っかける。

やっぱ真姫ちゃんと凜ちゃんなかいね。

に「あんたらちよつとは静かにできないの！」

希「まあまあいいやん、それよりもうちらの番やろ？」

に「ああそうだった、絵里誕生日おめでとう」

に「にこたちも手作りだから」

にこたちのプレゼントはヘアゴムでした。ちなみに手作りでした。はい、わかってましたよ。この流れだもん。

絵「ありがとう、それと何気に初めて言われたかも誕生日おめでとうって」

あれ？僕も言っただはずなのになあっそうだ！

煌「僕も言っただはずなのにな」

少し拗ねてみた。すると

絵「ち、違うのよ、μ、sの皆からってことで」

煌「そうだよねわかってたよ。でもμ、sの皆ってことは僕もじゃないの僕も10にん目って言われたこと嬉しかったのに」

絵「煌斗もμ、sのメンバーよ。ね、皆」

そう言うのと希以外皆が首をたてにふった。希は僕の企みがわかっているようだ。もういいかな？絵里ちゃん段々涙目になってきているし。

希「煌斗君もういいんやない？」

煌「そうだね、僕もそう思った」

『えっ？』

その会話に皆はついてこれてなく綺麗に被った

煌「絵里ちゃんが言っていたのは八人のなかでってことでしょ？」

絵「ええそう言うことよ・あつ！」

絵里ちゃんは気づいたようだ。

希「それにしても煌斗君悪やねえ」

煌「そうかな？僕の考えがわかってスマホで撮っていた希の方が悪だと思うよ後で送って」

希「ええよ、でも考えたのは煌斗君やん」

煌「何いつてるの？僕はただ涙目で狼狽える絵里ちゃんかわいいなって思っただけだよ」

そこまで言っていると絵里ちゃんが顔を紅くしていた。

絵「煌斗！／／／」

煌「まあまあ落ち着いて」

絵「誰のせいだと思ってるの！」

煌「えつと希？」

絵「確かにそうだけどお」

その後はケーキを食べて皆は帰った。

煌「絵里ちゃん、誕生日おめでとう今までもこれからも大好きだよこれからもよろしくね」

絵「え！」

僕のプレゼントは絵里ちゃんの誕生日石の『シトリン』を使った指輪だ。

さすがに手作りじゃないけどね。

絵「煌斗！」

絵里ちゃんが抱きついてきた。

煌「え、絵里ちゃん？」

絵「私も大好きよ、よろしくね！」

## 「番外編」花陽の誕生日

とある、グループの会話

煌「皆、明日は大丈夫？」

凜「皆でかよちんの誕生日を祝うんだにや！」

絵「明日はいけないけど、プレゼント送っておいたから」

穂「ええー絵里ちゃん明日はこれないの」

煌「まあまあ、皆忙しいのに集まれる方が奇跡に近いんだから」

こ「うん、確かに最近集まれてないもんね」

絵「そういえば、にこと希も来れないって」

煌「ああ確か、今日本にいないんだっけ？」

こ「そうなの？」

絵「ええ、仕事で行っているんだって」

穂「仕事だったら仕方がないね」

煌「そういえば、海未とマツキーどうしたんだろう？」

こ「この時間だから、寝てるんじゃないかな？」

煌「そういえば、海未って寝るの早かったんだよな」

絵「もうこんなに時間が経っていたのね」

穂「やっぱり皆と話しているといつの間にか時間が経ってるね」

絵「それにしても、本当に好きよね」

煌「好きなのは当たり前だよ」

絵「アツアツね」

凜「もしかして、顔紅くなってる？」

煌「み、皆」

凜「あ〜ごまかしたにや〜」

煌「明日はよろしくね」

凜「もちろんにや」

煌「また明日、お休み」

花陽 side

次の日

今日は、私の誕生日なんです。そして、今日煌斗君が祝ってくれるんです！

私と煌斗君は、μsが解散しそうになり再結成した後には煌斗君と遊びに行く機会があったんです。

その時に告白しようと思っていたらなんと、煌斗君の方から告白してくれたんです。

嬉しすぎて泣いてしまっただけです。泣きすぎてしまっただけ煌斗君を心配させてしまったんですけどね

そして今日は煌斗君とデートです！楽しみなんですけど、昨日の夜に煌斗君が誰かと電話していたんです。

煌斗君に限ってそんなことはないと思うけど気になっちゃうんです。わたしって思いのかな……

あつ！煌斗君が起きてきました。本人に直接聞きます！

煌「おはよう、花ちゃん」

花「おはよう、煌斗君」

煌「花ちゃん誕生日おめでとう」

花「あつありがとう煌斗君」

ううう気になるけど本当に聞いても良いのかな

煌「花ちゃん、どうしたの？何か悩んでる？」

花「っ！」

煌斗君は悩んでるのを知っていました。もうこの際聞いちゃいます。

花「あ、あのね、煌斗君。昨日のね、電話の相手って誰なのかなって？好きとか言ってたし」

煌「その事か、その電話の相手は、皆だよ」

花「皆ってμ，sの？で、でも好きっていついたのは？」

煌「そ、それはね」

煌斗君が何故かいづらそうにしていた、もしかして……でも誰と？μ，sの誰か？

花「み、μ，sの誰かと……」

煌「何か、勘違いしてない？」

花「か、勘違い？」

煌「うん、その、好きっていつたのは花ちゃんことだよ」

花「わ、私のことお！」

煌「うん、まあそれよりも、今日は花ちゃんの行きたいところについていくとにするから早くご飯を食べて行こう」

花「そうだね！」

よかった、煌斗君が浮気とかしてなくて。

---

煌斗side

今日は花ちゃんの誕生日と言うことで、花ちゃんの行きたいところについていくことにしている、その間に皆に家を飾り付けや、料金等してもらっている。まあ今日はその事はほどほどに覚えておいて楽しむとしよう。

煌「まずは服屋からか」

花「うん！、見たい服があるんだ」

花ちゃんの行きたいところの一つめはショッピングモールの服屋だった。

ふと、花ちゃんの様子を見ると悩んでいた。

花「ねえ煌斗君、これに合うのどれだと思う？」

煌「僕に聞いても大丈夫なの？」

花「もちろん、それに煌斗がセンスがいいって皆もいつてたんだよ」  
煌「へえ、何か嬉しいな、じゃあ少し待ってて」



少しみてわまり花ちゃんが選んでいた服に合いそうなものを選んだ。

煌「こんな感じでどうかな？」

花「うん、やっぱりセンス良いよ煌斗君は」

煌「そ、そうかな？／＼／＼」

花「じゃあ、少し待ってて試着してくるね」

煌「うん、いってらっしゃい」

試着室に入ってから少しすると花ちゃんが出てきた。

花「ど、どうかな」

か、可愛すぎるヤバイにやけてしまいそう。

花「き、煌斗君？」

煌「え、あ、どうしたの？」

花「どうしたの？じゃないよ、服似合ってる？」

煌「うん、似合ってるよ、もう抱き締めたいくらい」

花「そ、そうかな？でもありがとう！」

煌「買ってくるよ」

花「え、それは悪いよ」

煌「大丈夫だよ。それに、花ちゃんは誕生日なんだから」

花「なら今日は存分に甘えちやおうかな」

煌「そうしてもらっていいよ」

---

次に来たのは、秋葉原にある、スクールアイドルショップだった。そこには驚くことに、sとA—R I Sの売り場があったのだ、それを見るとやっぱりあの二グループは凄かったことが分かる

煌「ねえ、花ちゃん、スクールアイドルって今もすごいなの？」

花「当たり前ですっ！もちろん、私達の頃もすごかったですが、今はその比になりません！」

あ、これは長くなりそう……ってことで省略

花「つて事です!..... あ!私やつちやつた?」

煌「大丈夫だよ、そんな花ちゃんも好きだから。じゃあ見てまわろうか」

見て回っているなかふと花ちゃんと方を見ると伝伝伝2なるものを見ていただが、値段を見て泣く泣くという感じで戻っていた。もしかして高かったのかな?

~~~~~

花「煌斗君行こう」

煌「あれ?もういいの」

花「うん」

手に何も持っていない所を見るとさっきのを買っていないのだろう。

煌「ちよつと気になる物あったから買ってきていい?」

花「うん、いいよ」

煌「ごめん、ちよつとだけ待ってて」

~~~~~

花「何か買って来たの?」

煌「これだよ」

花「そ、それは伝伝伝!」

そう、僕が買って来たのはさっき花ちゃんが見ていた伝伝伝2だった。つてかいつの間に出てたの?

煌「はい、花ちゃん」

花「ええ!そんな悪いよ」

煌「なら二人の物つてことにしたらどうかな」

花「本当にいいの?」

煌「僕がそうしたいから良いじゃないかな」

花「なら..... うう〜楽しみだな／／／／」

花ちゃんが喜んでるから良かった

煌「次の場所に行こうか」

ゲームセンター、カラオケ等花ちゃんのおきたい場所に行った。  
さつきメールで、準備ができたと来た

煌「そろそろ帰ろう?」

花「そうだね、もうこんな時間に時間がたってたんだね」

煌「このあとも楽しみにしててね」

花「なにがあるんだろう、楽しみにしててね」

家についた

花「ただいま」パンツパンツ

花「え?え?」

皆「花陽ちゃん(かよちん)(花陽)誕生日おめでとう」

花「え、皆!どうして」

真「煌斗に呼ばれたのよ」

花「え!煌斗君が!」

凜「1ヶ月も前から頼まれてたにや」

煌「まあまあ、ここにいてもあれだから、リビングに入ろう」

~~~~~

リビングに入ると周りには色々な飾りつけや料理等すごく準備されているのがわかった

花「皆、私のためにありがとう」

こ「花陽ちゃんまだ泣くのははやいよお」

穂「そうだよっ花陽ちゃん」

花「で、でもっ」

その時、全員からグーという音が流れた

煌「ほら、話なら食事しながらでもできるから、ご飯食べない？」  
海「そ、そうですね、早く食べましょう」

~~~~~

花「美味しい〜」

煌「皆、準備ありがとう」

こ「そのくらい大丈夫だよ、それに、全員じゃないけど、皆で集ま  
れたから」

海「そうですね」

凜「ねえ、かちゃんこのケーキライスは凜が作ったんだよ〜」

ケーキライスとはその名の通り米でできたケーキである

花「うん、これもすつごく美味しそうだよ、ありがとう凜ちゃん」

真「それにしてもこんなに集まれるの久しぶりよね」

穂「そうだねえ」

二人、三人くらい集まっているが各々仕事が忙しく中々予定が合わ  
ず、集まることが少ない

こんなに集まれるのはある意味奇跡に近いだろう

煌「何かと皆忙しいからね」

花「そういえば、絵里ちゃんたち三人は？」

穂「三人は皆仕事で来れないって」

こ「仕事だとわかってっっているけどやっぱり……………」

海「集まらないのは、寂しいですね」

花「そうなんだ、残念だな」

~~~~~

プレゼントを皆が渡し、そのあと少してからから帰っていった。

因みに、マツキーと凜ちゃんから毛編みのセーターと手袋、海未と  
穂乃果ちゃんからペンダント、こちゃんは緑のワンピースだった。  
相変わらずこちゃんの裁縫スキルはエグかった。

煌「僕からのプレゼント持つてくるからちよつと待ってて」

花「え？煌斗君さつきくれたのは？」

煌「さっきのはいつものお礼だよ」  
そう言い、僕は取りに行った。

---

花陽 side

煌斗君はプレゼントを取りに行くって行ってたけどなんだろう？  
それに、いつも色々としてくれてるのに  
花陽には考え付きませんなので煌斗君を待ちます…… あ、来ま  
した

煌「花ちゃんこれ」

花「これは指輪？」

すると、突然煌斗君がひざまずいた

煌「これまで一緒にいて楽しかった、これからも楽しい生活を送り  
たいと思ってる……… 僕と結婚してくれませんか」

花「え？」

突然でビックリしています、でも嬉しすぎて

煌「は、花ちゃん!? どうしたの嫌だった？」

花「違うよ、そうじゃないよ嬉しすぎて」

泣けちゃうよお

煌「じゃ、じゃあ」

花「こちらこそよろしくお願いいたします」

今日この日がとても忘れられない思いでの一日になりました

## 「番外編」女神とテスト生のバレンタインパーティー

生徒1「煌斗君これ」

煌「あ、ありがとう」

生徒2「これもらってくれるかな？」

煌「え？あ、ありがとう」

どういうことなんだ？学校につくと何人かからチョコと思われるを渡される、今日は何かあったっけ？後でことちゃんとかにでも聞いてみるか。

教室に入ると三人がもう来ていた

こ「あ、煌君おはよう」

穂「煌斗君おはよう」

煌「ことちゃん、穂乃果ちゃんおはよう、海未もおはよう」

海「おはようございます、煌斗」

煌「そう言えば、今日って何かあるの？」

ことほのうみ『え!?!』

気になっていた事を聞くと三人は信じられないというか、何いつてるの？というか何かそんな感じになっていた。

穂「煌斗君それ本当にいつてるの」

海「今日は何日か分かりますか」

煌「今日？今日は確か2月14日だよ」

こ「ならその日はなんの日？」

2月14日？なんだっけ…………… あっ！

煌「バレンタインか」

穂「そうだよ、それに今日は煌斗君の家に皆で行くんだから」

煌「え！僕の家には？」

どういうこと、そんな話聞いてないけど皆でつて、sのつて事だよね？玲夢も来るって言っていたような気のせいかな？

海「え、聞いてないのですか？ことりっ！伝えておくようにつて言っただじゃないですか」

こ「わ、私伝えたよ、輝夜ちゃんに」

海「え？」

煌「か、輝夜に？」

こ「だ、だって煌君に電話しても出なくて」

ええ何か申し訳ない、つて言うか朝起きたら来ていたことちゃんの電話つてその事を伝えようとしたのか

煌「ことちゃん、何かごめんね」

こ「大丈夫だよ」

穂「煌斗君家に言っても大丈夫なの？」

煌「え、何で？」

穂「だって煌斗君知らなかったんだよね？」

へえ結構穂乃果ちゃんも考えてるんだな、さすがμ sのリー

ダーだな

穂「今失礼なこと考えたでしょ」

煌「か、考えてないよ？さすがリーダーっておもっただけだから」

穂「うっそだ」

先生「おいお前ら席に座れ」

煌「先生来たから話は後でね」

~~~~~

放課後

煌「本当に来るんだね」

花「だ、ダメかな？」

何これ、いつの間にこの世に天使が降り立っていたのか

花「どうかしたの？」

煌「何でもないよ。そう言えば、皆何か食べたいものある？」

真「どうしてよ」

煌「夕食食べていけないの？」

穂「煌斗君作ってくれるの!？」

海「穂乃果迷惑ですよ」

煌「まあまあ、海未僕から言い出したんだし、それに今日は親が帰っ

てこなくて二人だけだったから」

希「こう言うときは甘えた方がええんやで海未ちゃん、うちはおう  
どんさんが食べたいな煌斗君」

凜「それなら凜はラーメンが食べたいにや」

こ「ことりはチーズケーキがいいなあ」

花「わ、私は煌斗君のオムライスが食べたいな」

花ちゃんのオムライスはおいといて、麺類が二種類か…… こと  
ちゃんのチーズケーキはデザートにすればいいよな

絵「大丈夫なの煌斗？」

煌「大丈夫だよ、時間はかかるけど今からすれば、それとにこちや  
んは手伝ってもらってもいいかな？」

に「しよ、しようがないわね」

希「あれ？にこつちどおしたん」ニヤニヤ

に「何でもないわよ」

絵「まあまあ希あんまりからかわないの」

さ

凄く賑やかだな、まあ去年だがA—R I Sに勝ったり、もう少しで  
ラブライブの決勝だ、僕も頑張るか

穂「じゃあ早速行こう！」

~~~~~

皆が直接来るのかと思っていたが、それぞれ準備やら何やらとある  
らしく一度家に帰ってから来るらしい、僕は料理をするが、その前に  
やらないといけないことがある

煌「輝夜くちよつと来て」

輝「何？お兄ちゃん」

煌「僕の言おうとしていることわかる？」

輝「うぐつあ、あく用事あるんだった」

煌「騙せると思う？」

輝「だって眠たかったんだもん」

煌「だもんって、はあ次はないようにね」



輝「わ、分かったよ」

すぐに許しちゃう僕は輝夜に甘いのかな

ピンポン

あれ、もう来たのかな？思っていたよりも早いなまだ何も作れてないよまあ取り敢えず出るか

出ると思わぬ人が来た

煌「はーい、あれ、玲夢？」

玲「あ、煌斗くんには」

煌「玲夢くんには…じゃなくて何で玲夢が？」

玲「聞いてないの？おかしいな伝えておいてって言ったのにな」  
伝えておいてってもしかしてまた？

煌「もしかして、輝夜に言った？」

玲「そうだよ、それがどうしたの？」

はあまたか

ちなみにひーちゃんとは玲夢が付けた輝夜のあだ名である、かぐや姫の姫からひーちゃんらしい

煌「取り敢えず入りなよ」

玲「？うん、そうするね」

玲夢が入り、僕も入ろうとするとある人が来た

雄「お、煌斗買ってきたぞ」

煌「雄大ありがとう」

ちなみに、忘れてる人がいるかもしれないから説明すると（メタイ）雄大とは古羽雄大（ふるばゆうた）僕が音乃木坂に来る前に通っていた学校に通っている親友で、*μ's*の楽曲の編曲もしている。今は帰り道にたまたまあつて買い物頼んでいた。

~~~~~

煌「雄大は適当にくつろいでいて、玲夢はちよっと手伝って」

玲「分かったよ」

雄「いやいやいや、ちよっと待って」

煌「何？」

雄大も家に入り、料理を進めようとする雄大が止めてきた

雄「何でA―RISのマネージャーが煌斗の家にいるの!？」

煌「何でって幼馴染みだし？」

煌玲『ね』

雄「嘘だよな、俺がA―RIS勧めてたときも興味なかったじゃん」

煌「それは、特に興味なかったし」

雄「幼馴染みなら応援ぐらいするよな、証拠出してみろよ幼馴染みって証拠を」

証拠ってなんだよこいびとの証明見たいにキスとか二つついてるストローでひとつの飲み物を飲めば良いのかな

煌「証拠出せって言われても」

煌玲『ね』

雄「ねってなんだよねって」

煌「まあまあそんなに声を出すなよ、ちよつとからかっただけじゃんか」

雄「じゃあ、幼馴染みってのは？」

煌「あ、それは本当」

玲「どうも、煌斗の幼馴染みの夜月玲夢です。よろしくね」

雄「古羽雄大です。煌斗の親友やってます」

親友やってますってなんだよ

煌「今から皆が来るから急いでるから少しだけ静かにしててね」

~~~~~

雄大に買ってきて貰った材料で玲夢と料理を進めていった

玲「何作ってるの煌斗？」

煌「ん？ああこれはチョコクッキーだよ」

玲「チョコクッキー？」

煌「うん、今日ってバレンタインなんでしょ？だから作ってたんだバレンタインということに気づいてなかったがいつも頑張っていた皆にあげようかと思ってる

玲「でも、バレンタインって女の子の人が男の人にあげるんじゃないの？」

煌「外国の方では男の人が渡すところもあるらしいよ」

玲「へえ、そうなんだ、知らなかったな」

煌「日本にはあまりその文化はないからね、これ食べる？」

玲「良いの？頂戴」

煌「はい、あーん」

玲「あーん……うん美味しいよ」

煌「それなら良かった」

玲「何してるのよ」

気がつかなかったが、にこちゃんがいた、そして何故かにこちゃんはジト目で見ている

煌「にこちゃんいたの、てかどうやって入ったの？まさか、ピッキ」

玲「してないわよ、てか出来ないわよ。普通に輝夜が入れてくれた

のよ、煌斗あんたが料理を手伝って言ったんでしょが」

煌「そう言えばそうだったね、それで他の皆は？」

玲「まだ来てないわよ」

煌「そうなんだ」

玲「じゃあにこちゃんも一緒にやるよ」

そのあとは三人で料理を進めていった、三人入ると流石に少し狭く感じた

そう言えばにこちゃんが輝夜が入れてくれたって言ってたけど雄大何処にいるんだろう？

~~~~~

煌「よしっ完成した」

玲「意外と早かったわね」

煌「久しぶりに煌斗と料理を作ったな」

玲「そうだっけ？まあ取り敢えず運ぶか」

に「そうね」

ピンポン

お、皆が来たのかな？

煌「輝夜でも雄大でもいいから出てくれない？」

手が話せなかったため、二人のどちらかに頼んだ、さつき戸を開いた音がしたから多分出てくれたんだろう

に「ねえ煌斗、雄大って誰なのよ？」

煌「雄大ってμ sにも話してなかったかな？雄大は」

？「うわあっ！」「きゃあー！」「真姫ちゃんっ！」

にこちゃんに雄大について話そうとすると二つの悲鳴が聞こえてきた

あの真姫ちゃんって声は多分凜ちゃんと花ちゃんだろうとしてひとつの悲鳴は真姫ちゃんのものだろう取り敢えず行くか

急いで駆けつけてみると

に「どうしたの！」

煌「何かあつ… 何してるの二人とも？」

何故か玄関で真姫ちゃんと雄大が倒れていた

絵「真姫が戸を開けようとしたタイミングで彼も開けたみたいで」

煌「そんなことが、取り敢えず中に入りなよ、ご飯も出てくるから」

凜「え！もう出てくるの」

凜ちゃんさつきまで真姫ちゃんの心配してたよね

花「凜ちゃん…」ハハハ

ほら花ちゃんですら苦笑いだよ

~~~~~

家にもどると、輝夜と玲夢で並べていてくれた

煌「あ、並べていてくれたんだありがとう」

輝「私全然しなかったし少しは手伝わないと」

玲「誰が来てたの？何か悲鳴が聞こえてきたけど」

煌「μ sの皆が来たんだよ」

μ s「失礼します」

タイミングよく皆が入ってきた

絵「あ、玲夢も来てたのね」

玲「μ、sの皆久しぶりだねご飯は出来てるよ」

穂「おく美味しそう、これ全部二人で作ったの」

玲「うん、そうだね」

に「何だよ、にこもしたでしょ」

玲「えーでもほとんどしてなかったじゃん」

真「にこちゃん何してたのよ」

に「しようがないでしょ、にこが来たときにはもうほとんど終わってたんだから」

凜「あく開き直ったにや〜」

に「うるさいわね」

今更だけどにこちゃんずっといじられてない？それと何か忘れてるような

煌「冷めちゃうから食べるよ」

こ「そうだね」

皆『いただきます』

花「ん〜美味しい〜」

海「そうですね、美味しいです」

煌「そういつてくれると、僕達も嬉しいよ」

玲「そうだね」

に「誰も聞かないからにこが聞くけどあんたが雄大なのよね？」

あ、そうだ雄大のこと話すと言うか紹介しようとしてたんだった

雄「お、そうだぞ」

雄大お、そうだぞって……はあ

煌「えつと真姫ちゃん以外には紹介するね」

に「どうして、真姫以外なのよ」

煌「まあまあ、取り敢えず古羽雄大、僕が前に通っていた学校に通っているよ」

絵「それでなんで真姫以外なの？」

煌「それは、真姫ちゃんは会ってるからね」

真姫以外のμ、s『え！』

花「そうなの真姫ちゃん！」

真「ヴェそ、そうだけど」

ひさしぶり聞いたな真姫ちゃんのヴェ

凜「そうなの!？」

に「も、もしかして」

煌「もしかして？」

花「そ、そんなのダメです」

真「は、花陽？」

どうしたんだ？にこちゃんと花ちゃんを何を理解しあつたんだ？

花に「もしかして」

真「な、何よ」

花ちゃんにこちゃんが真姫ちゃんに迫っていた

花に「もしかして付き合ってるの!？」

真煌雄「「……へ?」」

皆『ええー!』

真「な、何でそうなるのよイミワカンナイ」

煌「へえwwwそうだったんだ僕に教えて欲しかったなwww」

真「何笑って見てるのよ」

希「真姫ちゃんファンにはばれないようにな」

真「希もわかってるんでしょ」

希「さあなんのことやろな？」

穂「真姫ちゃん本当に付き合ってるの!」

真「だから違うって言ってるでしょああもう煌斗っ!」

本当はもう少し見ていたかったけど真姫ちゃんがかわいそうだし  
助けるか

煌「まあまあ皆落ち着いて、真姫ちゃんと雄大は付き合っていないよ」  
に「何でそんなこと言えるのよ」

花「そうです、にこちゃんの言うとうりです」

煌「まあ本人に聞けばわかるだろ、な雄大付き合っていないだろう?」

雄「んあなんだ?」

こいつご飯食べて聞いてなかったのかよ



皆が最初に入ってきたときから気になっていたことがあったが雄大の事やご飯があったので気にしてなかったが

煌「皆荷物大きくない？」

そう、日帰りには荷物が大きいのだ

こ「そうかなあ？」

希「うちは普通やと思うけどなエリチ」

絵「ええそうよね」

煌「もしかしてなんだけどさ泊まるの？」

穂「そうだよ」

花「ダメだった？」

煌「いや、そんなことはないよ、玲夢はどうするの、家直ぐそこだけど」

玲「なら私も泊まろうかな」

煌「そこでひとつ報告なんだけど」

輝「どうかしたのお兄ちゃん？」

煌「玲夢も誘つついてあれだけど部屋足りないんだよね」

今日は両親が帰ってこないがそれでも一部屋に四人ほど入らないといけないんだ

煌「今日は両親が帰ってこないけど、ベッドに二人布団で二人の三部屋で寝ないといけないんだよねどうする？」

穂「じゃあジャンケンでもする？」

煌「そうだねそれがいいと思うよ僕はソファで寝るよ」

こ「それはダメだよ」

絵「そうよそれじゃあ風邪を引いてしまうわ」

大丈夫なのにな、心配してくれてるんだろう、それに風邪を引いて皆にうつしたら悪いからねそれから少しして寝る場所が決まった

寝る部屋メンバー

輝夜、海未、希、凜

穂乃果、絵里、真姫、にこ

煌斗、ことり、花陽、玲夢



穂「そう言えば、煌斗君これ」

煌「これは？」

穂「チョコ饅頭だよ、いつもありがとう」

煌「ありがとう、嬉しいよ」

このあと皆からチョコ（チョコを使った料理）を一言と貰ったどれ  
も美味しそうだった明日にでも食べたいな

~~~~~

どうしてこうなった

凜ちゃん穂乃果ちゃんにこちゃん海未が寝ていて、絵里ちゃん、花ちゃん、ことちゃんが顔が紅くなつていて玲夢と輝夜はわからない希と真姫ちゃんは素面だ、こんな混沌カオスな状況なっているのかと言うと、皆からチョコを貰ったあとに僕が作っていたチョコクッキーを出した、食べたりテレビを見たりしているときに輝夜が持ってきたチョコを希と真姫ちゃんと僕以外が食べたらくこうなった

煌「まさかあれがお母さんのお酒が入ってたんなんて」

真「だからやめろって言ったのよ」

希「あはは、煌斗君の周りがすごいなあ、まるでハーレムやな」

花「きらくくん／＼／＼」

こ「煌君つこつちだよ／＼えへ／＼／＼」

絵「ダメだよ／＼煌斗は私のっ！」

普段なら嬉しいけどいや、今も嬉しいけどすごいのは何がとは言わないけど三人ともくつついてくるの、それもものすごくって言うかあれだけで皆よったの？そんなにアルコール強かったの？

希「本当すごいなあ、特にエリチ何か」

煌「本当だよ、何でキヤラ崩壊してるの、もう真姫ちゃんでもいいから助けてよ」

真「いやよ、さつき助けてくれなかったじゃない」

煌「助けたじゃん」

直ぐに助けおけば良かったよ

こ「煌君こつち向いて」

煌「どうしたの、ことちやッツ！」

真「な、何してるのよ」

希「こ、ことりちゃんっ！」

花「ああ、ずるいよことりちゃん」

絵「次は私の番」

こ「つぶはっ」

煌「な、何で急に」

ことちやんに呼ばれ振り向いたら突然ことちゃんがキスをしてき

た

絵「次は私」

煌「ああもう、希ちよっところち来て」

希「な、なんや」

絵「いくよ」

煌「ごめんっ」

絵里ちゃんが来たときに希の顔に目標をずらして希とキスをさせ

た

煌「花ちゃんも？」

花「うん」

煌「そっかごめんね、真姫ちゃん！」

真「な、何ッツ！」

花「ま、真姫！でもいいかも」

真「ちよ、ちよっとなんや」

煌「今のうち」

~~~~~

僕はベランダに逃げていた

煌「あ、玲夢どこにいつてたの？」

玲「ちよっとなんや荷物を取りに行つてたの」

煌「そうだったんだ」

玲「そう言えばモテモテだったね煌斗」

煌「み、見てたの」

助けてくれよ玲夢よ、誰も味方はいないのか

玲「ごめんごめん面白かったからさ」

煌「はあ、誰か助けて」

玲「まあまあ、私ともキスをしちゃう？」

煌「しないよ！」

玲「まあまあ、今日は何か張り切ってたね」

煌「もうすぐ決勝だし玲夢達に勝ったからね」

玲「そうか、そうだね最後まで支えてあげなよ」

煌「言われなくてもだよ」

最後まで支えるって決めたんだから

リビングにもどると皆が倒れていたヤバイよこれ

皆に布団をかけてあげた

## 設定

始まる前のキャラ設定（オリキャラとメインキャラの親の名前等）

始まる前のキャラ設定（オリキャラ）

・南本煌斗（みなみもときらと）

二年生 16歳 誕生日9月6日

今作品の主人公。普通の男子高校生だった煌斗はある日、親の知り合いの音ノ木坂学院の理事長からテスト生として音ノ木坂学院に来てみないかという話を受ける。そしてテスト生として音ノ木坂学院にやってくる。

見た目は上の中位で雰囲気は優しく接しやすく成績優秀。小さい頃に格闘技とダンスをしていて、ダンスはそこそこうまい。格闘技は止めたが、何かとトラブルに巻き込まれる体質＋トラブルが見逃せない性格で相手を押さえるために使っている（使い方絶対間違ってる）。両親共に教員で帰ってくるのが夜遅く自然と料理の腕が身に付いた。

そして、少しブラコン気味の妹がいる。親同士が仲良くことりとは知り合いだが中学頃から疎遠になった。

・古羽雄大（ふるばゆうた）

二年生 16歳 誕生日6月14日

煌斗の親友。煌斗とは中学からの付き合い。元々煌斗が通っていた学校に通っている。煌斗に頼まれて、sの楽曲の編曲をするこ  
とになった。

見た目は上の中位で雰囲気は明るくでもバカ。バンド系楽器（ギター、ベース、ドラム）が演奏できる。理由は「出来たらかつこよくね？」らしい。

・夜月玲夢（よづきれむ）

二年生 16歳 誕生日12月24日

煌斗の家の隣さんで煌斗の幼馴染み。UTX学園でA―RIS Eのマネージャーをしている。煌斗とは長い付き合いで、基本的にお互いが何を考えているかお互いに分かる

輝夜とも仲良し。

・南本輝夜（みなみもとかぐや）

中学三年生 14歳 誕生日5月15日

煌斗の妹。雪穂と亜里沙の親友。基本的に雪穂と共に亜里沙の抑えやくだが煌斗の前だと、ブラコン気味でダメダメになる。勉強はできる方。でも料理等家事全般は全然出来ない。本人は出来なくてもお兄ちゃんがやってくれるから大丈夫らしい  
メインキャラの親

・高坂穂実（こうさかひなみ）

原作ラブライブの主人公穂乃果の母。家族で営む和菓子屋穂むらの名物、穂むら饅頭通称ほむまんは美味しく煌斗もよく買っている。

・南雛（みなみひな）

ことりの母。音ノ木坂学院の理事長をしている。煌斗をテスト生として呼んだのも雛だ。煌斗の両親とも仲良く、煌斗が小さい頃に煌斗の両親に頼まれ半日面倒を見ていたりもしていた、そのためことりも煌斗とは面識があったりする。

・西木野真菜（にしきのまな）

真姫のお母さん、夫と共に西木野総合病院を営んでいる。何度か煌斗もお世話になっている。

## プロローグ

### 女子校入学の機会は突然に！

今年から高校二年生になった南本煌斗は理事長室前に立っていた。

コンコン

煌「失礼します。」

理「ああよく来てくれたね。」

煌「まああんなことがあったら来ないわけにはいきませんから。」  
それは、数十分前に遡る。

放課後

それは親友の古羽雄大と話している時だった

キーンコーンコーンコーン

『2年2組の南本煌斗君至急理事長室に来てください。

繰り返します、2年2組の南本煌斗君至急理事長室に来てくださ  
い。』

キーンコーンコーンコーン

煌「えっ！」

雄「煌斗、お前なんかしたのか。」

煌「いや、特になにもしてないんだけど」

雄「まあ、とりあえず速く行った方がいいぞ」

煌「ああ、そうだね」

僕は急いで理事長室へむかった

そして現在に戻る

煌「それで、なにかあったんですか？」

理「君に話があったんだよ」

煌「話？」

煌「どんな話なんですか？」

理「それはだな、君、音ノ木坂学院って知ってるかい？」

煌「知ってますよ、母さんの母校でもありますし。」

煌「それで、音ノ木がどうしたんですか？」

理「実は、廃校になるかも知れなくて廃校阻止の案として共学が出されてそのために、テスト生を呼ぶというのが出て、あちらの理事長がそのテスト生に君を選んだんだ」

音乃木坂が廃校……それに廃校阻止の案でテスト生として僕を彩さんが

煌「理事長そのテスト生って今すぐ答えを出さないといけないんですか？」

理「いや、今週中に出してくれればいいよ。」

煌「そうですか」

煌「ありがとうございます、それでは失礼します。」

♪♪♪

雄大と一緒に帰っていた。

音ノ木がそんなことになってるなんて知らなかったな

雄「で、なんの話だったんだ？」

煌「音ノ木坂学院にテスト生としてこないかって言う話があったんだ」

雄「えっ、なにそれ羨ましい」

煌「そんなにいいもんでもないよ女子の中に男子一人とか」

雄「そんなもんか。って言うか、お前学校変わるのか？」

そうだよね。テスト生としていくと、この学校変わらないといけな  
いんだよ

結構好きなんだけどな

煌「今考えている」

雄「ここでさよならだな。」

煌「じゃあバイバイ」

雄「おうバイバイ」

家に帰っている途中に冷蔵庫に食材がないことに気づいた。

両親は帰りが夜遅く料理は煌斗がやっている。

食材を買いに行こうとしたときにある光景が目に入った。

？「ねえ、俺達と一緒にお茶でもしない？」

？「だっ大丈夫です。友達と予定があるので」

そうナンパだったのだ男二、三人で一人の少女を囲んでいたのだ  
男「絶対その友達よりも俺らという方が楽しいよ。それとも、友達も女の子？そしたら一緒に遊ぼうよ」

少女「大丈夫です。えっ？きやつ！」

するとナンパをしていた男が無理やりてを引つ張っていつて路地裏につれてかれたので危険だと思い止めることにした

路地裏に行くとやはり男たちが少女を襲おうとしていて少女は怯えていた。

一人目の男が二人、三人目の男に指示をして、二人目の男が少女が動け無いように押さえていた三人目：ああもうめんどくさい男たちはABCと呼ぶことにしよう。

兎に角いくか

煌「お兄さん達こんなところで何してるの？」

男A「ああん誰だてめえヒーロー気取りか」

煌「今は僕のことはどうでもよくない？僕は何してるの？つてきいてるんだけど」

男B「何様のつもりだてめえ、いいのか今からここでやってもいいんだぜ？」

煌「いいよ別に」

男Aは「なら遠慮なく」といいながら殴りかかってきた。

しかし、殴るスピードが遅かったため、その攻撃を避けながら腕を掴みあしをかけたおした

すると、男Bも殴りに来たが近くにあつたボールを男Bの足元に転がしそれを踏んで男Bが転んだその時来ていた男Cが男Bに足を引っかけ転んだ

そして、ABC全員が立ち上がりまた、来るかと思つたが「お、覚えてろよー」と、三下全開の台詞でにげていった

逃げたのを確認してから僕はは少女に話かけた

煌「君大丈夫？怪我とかはない？」

少女「お兄ちゃん！」

そう言いながら抱きついてきて泣き出した。



煌「お、お兄ちゃん？」

戸惑ったが、この少女が泣き止むまで頭を撫でていた。

少女「あつあのごめんなさい！」

煌「大丈夫だよ。それよりも君大丈夫？」

少女「はい、助けて頂いたので」

煌「そうか、あ、自己紹介まだだったね。僕は南本煌斗、君は？」

花「小泉花陽です」

煌「それで何でお兄ちゃん？」

花「それは」

僕が気になつて聞くと顔を暗くした。

煌「ごめんね、何かいいはずらかった？」

花「いえ、大丈夫です。実は私が小さい頃に兄が病気で亡くなつていて、それで南本さんが亡くなった兄に似ていて」

煌「そうだったんだ。ごめんね辛いことを思い出させちゃって」

花「大丈夫です。実はあまり兄のことを覚えてませんし」

花「それと、助けて頂いて本当にありがとうございます。何かお礼をしたいのですが」

煌「お礼なんてしなくてもいいよ。僕はお礼をしてほしくて助けた訳じゃないしそれよりも友達と待ち合わせしていたんじゃないの」

花「そうでした、でも本当にありがとうございます。それでは失礼します。」

♪♪♪

夜

今日は珍しくリビングに母さんがいた。「母さん!」「母さん?」呼び掛けても反応しないので気になって覗いてみると高校の卒業アルバムを見ていた。

母「えっ煌斗いつからいたの?」

煌「ずっといたよ」

母「そうなの、それよりなんかあるの?」

煌「ああ先にお風呂入っていいか聞こうと思ったんだ」

母「良いわよ入っちゃいなさい」

そう言うとお母さんはリビングを出ていった。

煌斗は母さんの卒業アルバムを見る姿を見て気が付いた。廃校になるのが悲しいのは在学生だけじゃなく、卒業生もということに。廃校を何とかしたいから煌斗はテスト生を受けることにした。

♪♪♪

次の日雄大と話していた

雄「それで決めたか？」

煌「決めたよ」

煌「それじゃあいつてくるね」

コンコン

理「どうぞ」

煌「失礼します」

理「取り敢えず座ってくれたまえ」

煌「はい」

理「それで、返事は決まったのかね」

煌「はい、僕受けることにしました。」

理「そうか、なら今週の土曜日に音ノ木坂学院の理事長に一度あつて欲しい」

煌「分かりました」

こうして夢を女神たちとの物語の幕が開けたのだった

1章スクールアイドルを始めよう！  
スクールアイドルを始めよう！1

前回のテスト神

テスト生として音ノ木坂学院に来ないかと言う話を受けた煌斗は悩んでいた！

そんなとき母が悲しそうな顔をして卒業アルバムを見ていたのを見て廃校を何とかしたいと思いつける決意をした。

そして、女子校入学から始まる今回の話さて、どうなる二話！

僕は今とても困っている。いや、まじで大変なんだ。

そう、ここは「音ノ木坂学院」女子校なのだ！

と言うおふざけをやめにして、真面目に考える。

煌「受けたはいいけどどうしよう。」

いや入っても大丈夫なはずだ、よし、つと覚悟をきめて行こうとしたとき

？「ねえ、ちよつとあなたが南本煌斗君？」

ヤバい絶対不審者に間違われている。慌てずに答えないと。

煌「は、はいそうですすが何故僕の名前を？」

絵「私は絢瀬絵里、この音ノ木坂学院で生徒会長をやってるわ、それで理事長からあなたを案内してと、頼まれて」

煌「そうだったんですか、ありがとうございます。」

理事長室に向かって歩いていった

廊下を歩いている時に絢瀬先輩が突然

絵「ねえ何で煌斗君はテスト生を受けようと思ったの？」

煌「えっ、何でって？」

絵「だって、友達とは離れてしまうし、同性がいないのよ？」

煌「そう言うことですか、僕だって初めは悩んでいたんです。でも、

母は音ノ木坂学院出身だったんですが、話を受けた日に、アルバムを見てその姿を見て思ったんです在校生以外にも悲しんでいる人がいるんだって気付いて、僕も何か出来ないかな？つと思っただんです。」

絵「そう言うことだったの、ならこれからよろしくね！後、絵里で良いわよ。」

煌「え？でもいきなり「絵里で良いわよ？」えっでも「絵里で良いわよ？なんだかんだ言っただけで私も煌斗君って言ってるし」はい・じゃあこれからよろしくお願いします、絵里先輩」

その後話ながら進んでいると

絵「ついたわよ」

煌「ここまで案内ありがとうございます。」

絵「いいえ大丈夫よ。それじゃあまたね」

ん？またね？ここでまた会えるからかな？取り敢えず入ろう。

コンコン

雛「入って良いわよ」

煌「失礼します」

煌「こんにちは、テスト生として来ました、南本煌斗です。久しぶりですね雛さん」

雛「ええ久しぶり煌斗君。で、早速ですがこの書類書いてくれる？」

煌「はい分かりました」

そしてどんどん書類を書いていった

煌「それで僕は、テスト生として何をすればいいんですか？」

雛「それは、月に一度レポートを書いて出してくれば良いわよ、それ以外は、普通の生徒と同じ生活をしてくれると良いわよ。あつても、体育は参加出来ないわ。あと、あなたには生徒会に入っただけの」

煌「何故ですか？」

雛「それは男子生徒としてどんなのがいいのかなどの意見を出して欲しいのよ」

煌「そう言うことでしたら分かりました。」

雛「明後日の水曜日に全校集会を開いて、廃校の話と、テスト生の話をします。だから、明後日は全員が登校し終わるくらい、そうねえ八時半位に来てちょうだい。」

煌「分かりました、八時半ですね」

雛「そう言えば、ことりが貴女に会いたがっていたわよ？」

煌「えっことちゃんか？そう言えば中1の時にあって以来かな？」

雛「もう5年もあってなかったのね。まあそれはおいといて、これからよろしくね。」

煌「はい、それじゃあ失礼します。」

♪♪

全校集会当日

理事長室に向かった

コンコン

雛「入って良いわよ」

煌「失礼します」

雛「おはよう煌斗君。早速で悪いのだけどこれから全校集会が始まるから付いてきてちょうだい」

煌「分かりました。」

♪♪

雛「さて、全校集会の理事長の話の時に廃校の連絡をします。そのときに、貴女を紹介するから軽く挨拶をして欲しいの、お願いね？」  
そうやって雛さんは壇上に上がっていった

煌（ちよつと待つて、そんなの聞いてないんですけど！急いで考えないと・・・）

そう思っているうちに雛さんが話出していた。

雛『もう掲示板でご覧になった人もいるかもしれませんが、この音乃来坂学院は年々生徒が減少しています。今年の新入生である一年生が一クラスしかない状況です』

壇上では雛さんが話をしている。声色は真面目だが、どこか暗さも

混じっている感じがした。

雛『理事会でもこのことが指摘され、今後生徒が増えないと判断された場合——』

沈痛な表情で雛さんは決定的なひとことを言い放った。

雛『この、音ノ木坂学院を廃校とします!』

この言葉に周りには動揺が走った

雛『でも、私達もそう簡単に廃校にするつもりはありません。廃校阻止の案として共学化と言うものが出されました。今日は、そのテスト生に来てもらってます。さあ、来てちょうだい』

煌(えっもう!でも行かないと)

壇上が上がっていった

雛「挨拶をしてちょうだい」

煌「はい、分かりました」

煌『えつと皆さんこんにちは、テスト生としてこの音ノ木坂学院に来ました、南本煌斗と申します。お互い不慣れなところもあると思いますが、楽しく過ごしたいと思ってますので、よろしくお願いします。』

よしっ!よくやったぞ僕っと思っていたがシーンとなつているのに気付いて不安になってきた

煌(あれ?どこか変なところがあつたかな?)

するとパチパチと大きな拍手が聞こえてきて安心した

雛『煌斗君には二年生のクラスに入ってもらいます。ではこれで全校集会を終わります。』

集会が終わって壇上そでで待っていると絵里先輩が来た

絵「随分と話すの上手かったわね、煌斗君こうゆうの慣れてるの?」

煌「全然慣れてませんよ、話す時凄く緊張しましたしそれに、シーンつとなつたとき凄く不安になりましたし」

絵「そうなの、でも私は上手かったと思うわ」

煌「そうですが、ありがとうございます」

絵「そうそう、生徒会の話は聞いてるわそれで仕事なのだけど、明日からで良いから来てちょうだいね」

煌「はい、分かりました」

その後少し話てるど雛さんが来た

雛「煌斗君、貴女自分のクラス知らないでしょう？だから職員室に行って担任の先生と一緒に行って」

煌「分かりました」

雛「それと、綾瀬さん、もうすぐ授業が始まるからすぐ行った方がいいわよ」

絵「あっ！失礼します」

そう言つて絵里先輩は出ていった

煌「じゃあ雛さん、僕ももういきますね」

雛「ええまた今度」

煌「はい」

♪♪♪

職員室前についた

コンコン

煌「失礼します、えつとテスト生の南本煌斗です。担任の先生がいるときいたので」

先生「私が君の担任の山田博子だ、よろしくな。」

煌「はい、よろしく願います」

山田先生が準備するからちよつと待ってるど、言ったので職員室前で待っていた

山「よし教室にいくか」

♪♪♪

教室の前についた

山「私が教室に入って来ていいと言ったらこい分かったな」

そう言つて山田先生は教室に入って行った

山「静にしろく皆いいお知らせがあるぞ」

生「なんですか」 「なんですか」

山「それはだな、テスト生がこのクラスに入ることになったぞ」  
生「え〜」「マジですか〜」

山「よし入って良いぞ〜」

煌「失礼します」

山「まずは自己紹介しろ」

煌「さつきも紹介されましたが、南本煌斗です。一年間同じクラスの仲間として頑張りたいと思います。よろしくお願いします」

パチパチパチ

山「次はうーんそうだな質問タイムにするかじゃあ初めて良いぞ」

生「はいっ彼女はいるんですか？」

煌「えっ！えっ！と居ないよ」

おお〜じゃあ狙えるかな？

生「はいっ兄弟は居ますか？」

煌「兄や弟は居ないけど妹なら居るよ」

へえ〜

生「趣味は何ですか？」

煌「ダンスとピアノかな？ダンスは小さい頃からやっていてピアノは中学の時にやり始めてはまったんだ」

すごーい

生「じゃあ次は」

そういったところでチャイムがなった

山「これで終わりだな、席はそうだな高坂てをあげろ」

はーい（ー〇ー）／

山「あいつの後ろに座ってくれ」

煌「分かりました」

そう言って高坂さんの後ろの席に座った

穂「私は、高坂穂乃果だよよろしくね」

煌「うんよろしく」

その後は普通に授業があった

それよりも大変だったのが休憩中の質問タイムだった、その時質問タイムってこんなに大変だったんだと思った。



♪♪♪

放課後

高坂さんの隣に座っていた人が話しかけてきた

？「ねえ間違っていたらごめんね？もしかして煌君？」

そういわれたときに気が付いた

煌「煌君？その呼び方・あつ！もしかしてことちゃん？」

こ「うん！やっぱり煌君だったんだ久しぶりだね」

煌「うん久しぶり」

穂「えっ？なににことりちゃんと南本君知り合いだったの？」

こ「うん！あつ紹介するね？こつちが穂乃果ちゃんでこつちが海未ちゃん」

海「ことりそれじゃあわかりませんよ！えつと園田海未です。よろしく願います」

煌「うんよろしく園田さん」

穂「で、私が高坂穂乃果だよ！あと、穂乃果でいいよ」

煌「うんわかったよ穂乃果ちゃん」

海「ああの私も海未と読んでください」

煌「わかったよ海未ちゃん」

穂「あつそうだ！あの事一緒に考えて貰おうよ！」

海「穂乃果つききなり失礼ですよ」

煌「ねえあの事って何？」

穂「なんとか廃校を阻止なと思って」

煌「そうなんだ、いいよ一緒に考えても」

穂「本当につ！」

海「本当にいいんですか？」

煌「うん、僕もなんとかしたいと思っていたから」

こ「そうだったの？」

煌「うん、でも考えはあるの？」

穂「全然、だから一緒に考えて欲しいなって」

煌「そうか、ならまずこの学校の良いところを探そうか？」

煌「それで何かいいのある？」

穂「はいつ歴史がある」(へーへー)

海「他には？」

穂「他っ！えつと伝統がある！」

海「同じ意味です。」

煌「ことちゃんは何かあった？」

こ「強いて言うなら古くからあるってことかな？」

海「ことり話を聞いてました？」

煌「図書室でも行って何か探そうか」

海「はい。そうですね」

♪♪♪

図書室に移動した

煌「何かいいのあった？」

こ「部活動でならそこそこいいところ見つけたよ？」

穂「おお！何々!？」

よつぽど聞きたいのか体を乗り出して聞いていた

こ「まずは剣道部関東大会6位」

煌「微妙だね」

こ「合唱部地区大会奨励賞」

海「もう一声欲しいですね」

こ「最後はロボット研究部書類審査で失格」

えつロボット研究部にしたの!？」

穂「ダメダメだ」

海「考えてみれば目立つところがあればもう少し人が来てましたね」

」

煌「僕は来て良いところって思ったけどなく」

こ「へえ〜どこが？」

煌「まず見た目きれいだし、生徒も優しいし、まあ来てみないと分

からないところだけだね」

こ「へえ〜そうなんだ」

♪♪♪

一緒に帰っていて分かれ道についたときに海未ちゃんが言った

海「それじゃあ各自家で考えてきて明日また話ましようか」

穂「分かったよ、じゃあ煌斗君連絡先交換しようよ」

煌「分かったよ、はい」

皆と交換したあとそれぞれ自分の家に帰った

## スクールアイドルを始めよう！2

前回のテスト神

音ノ木坂学院にテスト生として音ノ木坂学院にテスト生としてやって来た僕、南本煌斗は約5年間会っていなかったことちゃんと再会した。それでことちゃんの幼なじみの穂乃果ちゃんと海未ちゃんと友達になった。と、僕は思っている。穂乃果ちゃん達も廃校をどうにかできないかと思っていたらしく一緒に考えることになったでも結局決まらず家で考えることになった。そして、神社から始まる今回の話、さて、どうなる3話！

家に帰る前にいろんなところを観光していた

煌「へえ〜こんなところに神社があるんだ行って見ようかな？」

階段を上り終えた

煌「ハアハア結構大変だな」

煌「おお綺麗だなせつかくだしお参りでもしていこうかな」

パンパン

煌（廃校を阻止出来るような案がでますように）

真剣に頼んでいると神子さんが話掛けてきた

神子「君そんなに真剣にお参りをしていてなんかあるん？」

煌「えっ！誰ですか？」

希「あっ急に話かけてもうてごめんなあ、うちは東條希よろしくな」

煌「僕は、南本煌斗です。よろしくお願いします。」

希「そう言えばあんなに真剣に何を頼んでたん？」

言いづらそうにしていたのを見て言えないのかと思ったみたいで

希「ごめんなあ言いづらかった？」

煌「い、いえ大丈夫です。」

そして、今の状況を話した。その時東條さんが小さい声で「やっぱ

り」つと言った

煌「やっぱり？」

気になって聞き返してみた

希「いや、思った通りやなと思うて、うちも音ノ木に通ってんねん」  
煌「えっ！そうだったんですか？」

希「うん、三年生」

煌「先輩だったんですか、でもならまたすぐに会えますね、東條先輩」

希「希ってよんでもいいんよ？」

煌「分かりました、希先輩」

そう答えると残念そうな顔をしていた

希「おもっておつたんと違うなあもつと戸惑うと思つてたんやけどなあ」

煌「そうですか？最近女性に名前読んでくれて何回か言われましたから」

希「おおモテモテやなあ」

煌「そんなんじゃないですよ」

煌「じゃあそろそろ帰りますね」

希「うんじゃあほなあ」

♪♪♪

家に帰って色んなものを調べていた中でスクールアイドルと言うものがあつたこれを見た瞬間これだ！と思つた

♪♪♪

次の日教室に行くことちゃんと海未ちゃんがもう来ていた

煌「おはよう二人とも早いね。あれ？穂乃果ちゃんは？」

こ「おはよう煌君穂乃果ちゃんはなんか先いつててつて」

海「どうせまた寝坊です。」

煌「そうなんだ、そう言えば何か思い付いた？」

海「いえ、全然思い付きませんでした」

こ「ことりも全然思い付かなかつたな」

煌「じゃあ穂乃果ちゃんが来てからもう一度話し合おうか」

海「そうですね、それが良さそうです」

山「皆ホームルームはじめるぞー」

と、言うの度同時に穂乃果ちゃんが来た

そして、昼休みになった

穂「ねえねえ、これ見て」

そう言って穂乃果ちゃんは大量のスクールアイドルの雑誌を持ってきた

スクールアイドルについて穂乃果ちゃんが話している時にこっそりと海未ちゃんが出ていった

煌「穂乃果ちゃん、海未ちゃん出ていったよ?」

穂「えっ!ほんとだ!」

穂乃果ちゃんは海未ちゃんちよつと待つてよくといいながら廊下に出ていった

穂「聞いてよ!すごいいいアイデアが…」

海「はあ… どうせ私たち3人でスクールアイドルを結成しよう、とでも言うのでしょうか?」

穂「すごい!海未ちゃん!エスパ!」

海「誰だつて分かります!」

海「いいですか!?この雑誌に載つてるスクールアイドルの方々は血のにじむような努力をして本気でやっているんです!穂乃果みたい  
に好奇心と思い付きだけで始めて上手くいくものではありません!」  
穂「うっ・確かに人気も出ないと廃校を阻止出来ないけど…」

海「はつきり言います・アイドルは無しです!」

煌「僕はいいと思うけどな、スクールアイドルそれに三人とも可愛いと思うよ」

海「き、煌斗っ!／／それよりも授業が始まります」

海未ちゃんが顔を紅くして言ってきた

周りを見渡すと顔が紅くなつていて俯いてることちゃんと穂乃果ちゃんがいた

僕にはどうなっているのか分からないが話をそらされたのは分かった

♪♪♪

放課後

海未ちゃんは弓道部ことちゃんは保険委員の仕事で、僕は生徒会が

あつて皆バラバラになつていた

生徒会室前

コンコン

煌「失礼します」

生徒会室に入るとそこには絵里先輩と、この前会った希先輩がいた

希「煌斗君久しぶり」

煌「えっ！何でここに希先輩が居るんですか？」

希「何で？つてうち生徒会副会長やし」

煌「そうだつんですか」

絵「あれ？希と煌斗君知り合いだったの？」

希「そうなんよ昨日たまたま会つて」

絵「それならお互い自己紹介はいらぬわね」

仕事のやり方を教えてもらつてたまに話ながらもどんどん進めて  
いった

煌「終わりましたよ」

絵「そう、ならさきにかえつてもいいわよ」

煌「えっ?!いいんですか？それじゃあお先に失礼します」

生徒会室を出て玄関に向かつている途中綺麗な歌声とピアノの音  
が聞こえてきた

気になつて音をたどつてみると音楽室に着いた。そこには穂乃果  
ちゃんもいた

煌「あれ穂乃果ちゃん？ここでなにしてるの？」

穂「あつ！煌斗君音が聞こえてきてたどつてみるとここについて」

煌「そうなんだ僕と一緒にだね」

中を見てみると赤髪の綺麗な女子生徒がいた

煌（リボンの色からして一年生か）

歌声とピアノの音が止まると同時に穂乃果ちゃんが拍手をしながら  
入つていった

女子生徒「ヴえ！」

穂「すごい！すごい！すごい！感動しちゃったよ！」

女子生徒「べ、別に。」

穂「歌上手だね！ピアノも上手だね！それに、アイドルみたいに可愛い！」

穂「あ！あなた・・・アイドルやってみたいと思わない!？」

女子生徒「え？」

女子生徒「ナニソレ、イミワカンナイ」

しかし、女子生徒は出ていこうとする

煌「ちよつと待つて僕は南本煌斗君は？」

女子生徒「ヴえ！なによりいきなり」

煌「ごめんね、でも君のピアノの音に感動してこれでもピアノをやってるからさ、また聞きたいなって」

女子生徒「そうなんですか、良いですよ聞きに来てもそれと私の名前は西木野真姫」

真（あの人どこかで）

そう言つて出て行った

煌（西木野つて病院の）

穂「煌斗君？どうかしたの」

煌「えっ！何でもないよ。それより穂乃果ちゃんスクールアイドルやろうて言うのは本気？」

穂「うん、本気だよ」

煌「なら僕も手伝うよ」

穂「本当！」

煌「うん、まずはダンスの練習かな？どこかできる場所ある？」

穂「うーん、あっ！それなら校舎裏とかどうかな？」

煌「いいと思うよじゃあ行こうか」

♪♪♪

校舎裏

煌「じゃあだったのまずは僕がやってみるから見ててね」

穂「分かったよ」

ダンスを見せてみた



穂「おおく凄い凄いすごい」

煌「そ、そうかな？じゃあやってみて」

穂「分かったよ！えつとこうかな？」

煌「おおくいいいいよ」

穂「本当！」

その後練習して行って段々上達していった

煌「一回ここで休憩にしよう」

穂「うんわかったよ」

煌「はいっ穂乃果ちゃん」

僕は穂乃果ちゃんにあらかじめ買って合った水を渡した

穂「あつ！ありがとう煌斗君！」

とそこら辺の男ならすぐに落ちてしまいそうな笑顔で言ってきた

煌（えっ!?何これ惚れそうなんだけど）

煌「う、うんどういたしまして／＼／＼」

穂「あああ〜海未ちゃんもことりちゃんもスクールアイドル一緒にやってくれないかな〜」

煌「そうだね〜一緒にやってくれたら嬉しいけど無理強いはできないからね」

穂「そうだよね」

煌「さっそろそろ練習始めようか」

練習の途中で穂乃果ちゃんが転んだその時海未ちゃんのことちやんがやつと来た

海「穂乃果っ」

穂「海未ちゃん？」

海「穂乃果二人でやっても意味がありませんよやるなら四人じゃないと」

穂「海未ちゃんっ！」

穂「じゃあ早速部活動の申請をしに行こう」

♪♪♪

コンコン

煌こ穂海「」「失礼します」」

絵「これは？」

穂「アイドル部設立の申請書です！」

僕達は現在アイドル部を設立する為に絵里先輩がいる生徒会室に来ていた。

絵「それは見れば分かるわ」

穂「だったら認めてくれますか？」

穂乃花は綾瀬会長に返答を求める。

絵「駄目よ、校則では部の設立には最低5人必要と決められているわ」

海「ですが！校内の部活には5人以下の部も存在しているではないですか！」

絵「部を設立した時はみんな5人以上いたはずよ」

希「あと1人やね」

穂「あと1人・分かりました！」

生徒会室をあとにしようとする

絵「待ちなさい！」

僕達は絵里先輩に呼び止められ立ち止まる。

絵「どうしてこの時期にアイドル部を始めるの？あなたたち2年生でしょ？」

穂「廃校を何とか阻止したくて… スクールアイドルって今すごい人気なんですよ！だから！」

絵「だったら例え5人集めて来ても認めるわけにはいかないわね」

穂「ええ!?! どうして!?!」

絵「部活は人を集める為にするものじゃない、思い付きで行動したところで状況は変えられないわ」

こ「でも！」  
絵「変なこと考えてないで、残りの2年をどう過ごすか考えることね」

僕は違和感がした。何か他の理由で拒否をしているような

煌「三人とも聞きたいことあるから先にいってて」

こ「えっ？うんわかったよ」

三人は出ていった

絵「で、煌斗君聞きたいことって何？」

煌「絵里先輩何か私情で拒否してませんか？」

絵「っ!?!どうしてそう思うのよ」

煌「苦しそうな顔をしていましたよ？何かあるんですしたら言ってください解決できるっとは言いませんが一緒に背負うぐらいはできませんから。じゃあ失礼します」

僕は絵里先輩をなにがなんでも助けると心の中で誓った

## 練習開始っ！

前回のテスト神

穂乃果ちゃんが廃校阻止の案としてスクールアイドルを出してきた。

はじめは反対していた海未ちゃんだったが一緒にやることを決意早速部活設立しようと生徒会室にいくが断られてしまう。

でも僕には私情で断っていると見えて少し話をした。

心の中でなにがなんでも助けると誓った

そして、生徒会室で始まる今回の話、さて、どうなる4話

僕は今生徒会室にいるなんでいるかって？ただ単に仕事があったのさ

って何してるんだろ僕は？

心の中で一人コント？をしている。コントにもならないようなコントをしている原因は数十分前の出来事だ

♪♪♪

普通に生徒会で仕事をしているときにことちゃん達が来た

穂「あれ、何で煌斗君がここにいるの？」

煌「何で？って僕生徒会役員だよ」

穂「えっ！そうだったの」

煌「それで何か合ったんじゃないの」

絵「朝から何？」

穂「講堂の使用許可をいただきましたと思います」

海「部活動に関係なく、生徒は自由に講堂を使用できると生徒手帳にも書いてありましたので」

煌（おっ！今回はちゃんと対策をたててる。デモなんで講堂を？）

希「新入生歓迎会の放課後やなあ」

絵「何をするつもり？」

海「それは」

煌（んっ？）

穂「ライブです！」

穂「三人と一人でスクールアイドルを結成したので、その初ライブを講堂でやることにしたんです！」

海「穂乃果っ」

こ「まだできるかどうか分からないよ」

穂「ええーやるよー」

海「待ってください、まだステージに立つとは」

煌（雲行きが怪しくなってきたぞ、ほら絵里先輩も何か、むすつとしてるし）

絵「出来るの？そんな状態で」

穂「だ、大丈夫です」

絵「新入生歓迎会は遊びではないのよ？」

煌（そろそろ手助けした方がいいかな？んっ？）

希「三人は講堂の許可を取りに来たんやろ？部活でもないのに内容まで生徒会がとやかく言う権利はないはずや」

煌（おおくさすが希先輩。僕ができないことを平然とやってのける。そこにしびれる憧れるくっつてなにしてんだらう僕は？）

煌「そうですよ、絵里先輩」

絵「うっそ、それは」

こ穂海『失礼しました』

煌「絵里先輩また怒ったような苦しいようなむすつとした顔してましたよ？そんな顔ばかりしてちゃあせつかく綺麗な顔が勿体無いですよ」

絵「えっ！／／／」

あれどうしたんだらう？絵里先輩顔が紅くなっているし、希先輩はニヤニヤしてるし

前もこんなかと合ったような

煌「大丈夫ですか？顔紅いですよ？」

絵「だっ大丈夫よ／／／」

あれ？起こらせてしまったかな？

♪♪♪

ってことがあったんだ。それで昨日あんなこといったのに今日こんなことがあって気まづくなってしまったのだ。えっ？もう一つが分からない？簡単だよ、僕はライブのことを知らなかったんだ。えっ？最後の是自業自得？さあ僕なんのこともかわかんない

そんなことをしているとき絵里先輩が希先輩に聞いていた

絵「なぜあの子達の味方をするの？」

希「何度やってもそうしろってゆうんや」

そう言いながら窓を開けている

絵「ん？」

希「カードが」

そのことばで僕は気づいた

煌（へえ〜希先輩ってタロットカードできるんだ）

ここで突風が吹いた

絵「えっ？きやつ！」

風が吹いたことによつて資料とタロットカードが飛んだ

希「カードがうちにそう告げるんや！」

壁にTHE SUNのカードが張り付いた

煌（サンって確か成功とか幸運とかだったような、それよりも）

煌「希先輩占い出来るのは凄いなと思いますが、まずバラバラになつた資料をかたづけましょう？」

希「ん？あつ！ごめんなあ」

煌「いえいえ、大丈夫ですよ」

♪♪♪

中庭

椅子に座つて話をしていた

海「ライブのことは伏せておいて講堂を借りるだけ借りておこうと話し合つたでしょう」

穂「ふあんで〜（何で〜）」

海「またパンですか」

穂「うち和菓子屋だから話せるパンが珍しいの知ってるでしょー」  
海「太りますよ」

穂「そうだよね〜」パクツ

煌「話戻すようで悪いんだけどライブの話僕聞いてなかったよ？」

海「えっ！穂乃果に伝えといてと、言ったはずですが」

穂「あっ！忘れてた」

海「穂乃果〜」

穂「ごめんって〜」

煌「まあまあ」

そんな感じの話をしているとき向こうから声が聞こえてきた

？「おい三人とも〜」

彼女達は僕が勝手に一二三トリオと読んでいる何でかと言うと名前が

一条ヒデコ 二塚フミコ 三上ミカだったから名字を合わせると

一二三名前を合わせるとヒフミとなるからだ

ヒ「掲示板見たよスクールアイドルやるんだって」

フ「正直海未ちゃんがやるなんて意外だったな」

今度は海未ちゃんが知らなかったんだ

煌「ポスター僕は見たから二人で行ってきてよ」

そう言って教室に向かった

♪♪♪

教室

僕はどこちやんと一緒に衣装を考えていた

こ煌「うーん、こんなもんかなあ」

海「ことり？煌斗？」

こ煌「よしできた」

こ「見て、考えてみたのステージ衣装」

穂「おおく可愛いよ二人とも」

こ「ここのカーブのところが難しいんだけど頑張ってみるね」

穂「うんうん・って煌斗君も作るの？」

煌「うん、難しいところは無理だけど簡単のは出来るから作るの手

伝おっかなって」

こ「海未ちゃんはどうか？」

海「ことりこのスーっと伸びているものは？」

こ「足よ」

煌「足だよね」

海「それじゃあ、素足に短いスカートということでしょうか？」

煌「アイドルだからね」

すると海未ちゃんは足をモジモジさせ始めた

それを見た穂乃果ちゃんが

穂「大丈夫だよ、海未ちゃん足そんなに太くないよ」

海「人のこと言えるのですか」

そう言われた穂乃果ちゃんが足をさわり始めた

こ「二人とも大丈夫だと思うけどなあ」

煌「こう言うこと言うのはヤバイかもしれないけどさあ僕もそう思うよ、それと二人とも足をモジモジしたり触ったりするのはやめてほしいなあ」つて一応男子も居るんだから」

穂「あっ！／／／」

穂乃果ちゃんは何故か顔を紅くし

海未ちゃんは

海「は、ハレンチです！／／／」

と、言いながら何故かビンタをしてきた。

煌「いった！」

海未ちゃんのビンタは、結構痛かった。

そんな僕を心配してくれたのはことりちゃんだけだった。

こ「大丈夫？煌君」

煌「あれ？なんだかことりちゃんが天使に見えてきた」

こ「え！／／／そんな天使なんて／／／」

その後ことりちゃんはなんかえへへ／／／煌君に天使って言われちゃったなど言っていたような気がしたが気にしない。

煌「それよりも考えないといけないことがあるよ」

穂「そうだよね、サインでしょ、町を歩くときの変装でしょ」



海「そんなの要りません」

煌「それよりもグループ名は？」

穂海「「あっー！」」

グループ名はいいのが中々思い付かなかったから投票しきにした  
ちなみに出たのが「ほのかうみことり」「陸海空」

穂「よーし次は歌の踊りの練習だ」

まず来たのは中庭次は体育館そして、空き教室どれも使えなかった  
そして行き着いたのが屋上だった

穂「ここしかないか」

煌「日陰もないし、雨が降ったら使えないけどせいたくはいつてら  
れないから」

こ「でもここなら音の心配はしなくて良さそうだよ」

穂「じゃあ練習だ」

そう言つて三人は横にならんだ

僕はあることに気づいた

煌「そう言えばまだ、曲ないじゃん」

こ穂海「「あっー！」」

♪♪♪

その特別の場所では

花「アイドル」

このスクールアイドルを見ている女子生徒はテスト生としてやつ  
て来る前に煌斗が助けた少女小泉花陽だ

凜「かくよちん」

花「わっ！凜ちゃん！」

この花陽をかよちんと呼ぶのは花陽の幼なじみの星空凜だ

凜「どうしたの？」

花「えっう、ううんな、何でもないよ」

凜「そうなんだくさあかえるにや」

と言うことがあったのだ

♪♪♪

穂むら前

結局あのあと解散になって夜に穂むらに集合になった

僕は生徒会、海未ちゃんは弓道部があつて一緒にいくことになった

煌「やっぱり、ここかあ」

海「やっぱりとは？」

煌「僕よく来てたんだよここに」

海「そうだったんですかそれならあつてたかもしれないですね」

煌「かもね。さあ着いたから入ろう？」

穂実「あらいらつしやい！海未ちゃん、煌斗君！」

なかにはいると穂実さんはお団子を食べていた

煌「それ商品ですよね？」

穂実「食べる？」

新しい団子をくれようとした

海「大丈夫です。ダイエットしないといけないので」

穂実「煌斗君は？」

煌「僕も大丈夫です。我慢している人の前で食べるなんて酷いこと  
しませんから」

穂実「そうなの、穂乃果とことりちゃんは穂乃果の部屋にいるわよ」

海「そうなんですか、教えてくださいださってありがとうございます」

穂乃果ちゃんの部屋に向かうと

団子を食べてた二人がいた

こ穂「二人ともお疲れ様」

穂「お団子食べる」

こ「今お茶いれるね」

こ「おちゃん嬉しいけどそうじゃない

煌「ねえ二人とも」

その後海未ちゃんが

海「ダイエットはどうしたのですか」

こ穂「ああっー」

海「はあー努力しようと言う気はないのですね」

煌「それよりも曲の方はどうなったの？」

穂「それなら一年生にすつごく歌の上手いこがいるの、ピアノも上

手できつと作曲もできるんじゃないかなって」

煌「それって西木野さんの事？」

穂「うん！それで明日聞いてみようと思って」

煌「それなら僕もついてくね」

穂「うんわかったよ」

こ「それでもし作曲してもらえるなら作詞はなんとかなるよねって話してたんだ」

煌「なんかなるって誰か出来るの？」

そう聞くと、ことちゃんと穂乃果ちゃんが机に乗り出した

穂「海未ちゃんさあ、中学の時ポエムとか書いてたことあったよね」

煌（へえ、ポエム何か意外だな）

こ「それを読ませてもらったことあったよね」

海未ちゃんが出ていこうとしようしていたから先に塞いでおいた

海「煌斗つそこを退いてください」

煌「ええーやだよ」

結局逃げるのを止めた

海「お断りします！」

穂「ええー何でなんで？」

海「正直中学の時だっと思いついたくないくらい恥ずかしかったんですよ」

煌「なるほど、黒歴史ってやつだね」ニコニコ

海「何故嬉しそうにしているのですか！」

煌「何でもないよ」

こ「おねがあーい海未ちゃんしかいないの」

煌「そう言えばことちゃんや穂乃果ちゃんじゃあ駄目なの？」

こ「私は衣装作らないとだし、穂乃果ちゃんは」

『おまんじゅううぐいすだん』もうあきた』

こ「無理そうじゃない」

そう言われている本人はあはは、と苦笑いをしていた

海「そ、そうです、煌斗はできないんですか?!」

煌「僕!?!僕もさすがにこの短期間じゃあ無理だよ」

穂「えっ!じゃあ時間があったら出来るの?」

煌「うんできると思うよ?まあ僕も手伝うからやらない?」

海「でっでも」

ことちゃんの方をを見ると胸に手を当て瞳をうるうるさせていた僕は今から起こることを察し、静かに顔を背け耳を押さえる。

こ「海未ちゃんおねがぁーい」

それはことちゃんのおねがぁのあまあまなこえと涙目で言われると誰でも聞いてしまう

海「しよっしよっしょうがないですね、でも練習メニューは考えさせてもらいます」

海未ちゃん曰く楽しく踊るには体力が必要らしい、まあ僕もやってるからわかるけどね

♪♪♪

次の日

朝から神田明神で練習をしていた

煌「ことちゃん穂乃果ちゃんラストだよ」

階段ダツシユッをして二人とも辛そうだった

煌「はい二人とも」

そう言ってスポーツドリンクを渡した

こ「ありがとー」

煌「じゃあちよつと休憩だね」

休憩をしているときに希先輩が話かけてきた

希「君たち」

煌「希先輩?」

こ「どうしたんですかその格好?」

希「ここでお手伝いさせてもらうてるんや神社はいろんな気が集まるスピリチュアルな場所やからね」

穂「そうなんですか」

希「それより、階段を使わせてもらっててるんやからお参り位して

き？」

そういわれて三人はお参りをしに行つた

パチパチ

穂「初ライブがうまくいきますように」

こ海「うまくいきますように」

それを見ていた希先輩はなにかを言っていた

聞き返しても答えてくれなかったので僕は知らない方が良いのだ  
ろう

## 私たちの曲

前回のテス神

スクールアイドル結成から一週間たったある日生徒会に講堂の許可を取りに行った穂乃果ちゃんたち、だが絵里先輩に拒否されそうになった。そこを希先輩が助け船をだしなんとか拒否をもらえた。それから、作詞担当が海未ちゃんに決まったりした前回の話、さて、一年生のクラスから始まる今回の話どうなる5話！

三人称

煌斗たちは作曲の依頼をしに真姫を探して一年生のクラスに来ていた。

幸い？一年生のクラスは一クラスしかないから簡単にわかった。

煌「失礼しまーす」

一年生「……」

一年生はいきなり二年生が来て、困惑の表情で煌斗たちを見ていた。

煌斗たちは教卓の前まで行き、代表して穂乃果が話した。

穂「皆さんこんにちは、スクールアイドルの高坂穂乃果です！」

だが、認知していなかった。結成してわづか一週間のグループだ、認知している方がおかしいだろう

一年生『……えっ？』

そのため困惑の表情で見る生徒は減らなかった。

だが、穂乃果は認知されていると思っていたらしく

穂「あれ？全く浸透してない？」

と、言っていた。

煌海「当たり前前！（です！）」

煌斗と海未が穂乃果ちゃんにツツコミを入れる。ことりも口には出さないが、やっぱりという表情で見っていた。ある程度予想していたのだろう。

そんなツツコミを入れながら、煌斗はあることに気が付いた。

穂乃果は気付いて無いようだから言ってみた。

煌「それと、ここには居ないようだよ」

そう、真姫が居なかったのだ。

穂「え？あつ！ほんとだ」

やはり気が付いてなかったようだ。

こ「そうなの？じゃあどうする？」

そう言つて、相談してきた。するとタイミングよくドアが開き、人がやつて来た。

それは煌斗たちが探していた人物、すなわち真姫なのだ。

穂「あ！」

それに素早く気づいた穂乃果は真姫の手をとり声をかけた。

穂「西木野さん、ちよつといい？」

真「私？」

屋上

煌斗 side

僕たちは、真姫ちゃんをつれて屋上に来ていた。

真「で、何ですか？」

真姫ちゃんは早く用件を言つてという表情で言つてきた。

煌「じゃあ単刀直入に言うね、真姫ちゃん僕たちに作曲してほしいんだ」

僕は単刀直入に言つた。学校についてみんな曲を聞いた。

真「え。」

その言葉に困つたような迷っているような表情をしていた。

だが真姫ちゃんの答えは

真「お断りします」

拒否だった。

だけど、穂乃果ちゃんは諦めず

穂「お願い、わたしは西木野さんに作曲してもらいたいのに、熱意を持つて頼んだ。だがそんなの関係ないよ、

真「お断りします」

一言で拒否されてしまう

そう言われた穂乃果は、一つ考え付いたことを真姫へと言つた。

穂「あ！もしかして歌うだけで作曲とかはできないの？」

悪気はないのだろうがその言葉は真姫ちゃんを挑発するのには十分だった。<sup>も？</sup>

真姫「出来ないわけないでしょう！ただやりたくないんです。そんなもの。」

しかし、真姫ちゃんはなんとか持ちこたえた。

何としても真姫ちゃんに作詩をしてもらいたい穂乃果ちゃんは、曲を作ってほしい理由を真姫ちゃんに伝えるが

穂「学校に生徒を集めるためだよ。その歌で生徒が集まれば。」

真「興味ないです」

ことちやんと海未ちゃんはその会話をだまって見ていることしか出来なかった。

しかし僕は、あることを考えながら見ていた。

やがて話がなくなったかのようすでいこうとしたが何かを思い出したように振り向いた。

真「そう言えば煌斗先輩何で最近来なくなっただんですか？」

煌「？ああごめんね、最近生徒会と練習が忙しくって、多分今日は行けるよ」

僕がそう伝えると

真「そうだったんですか、それじゃあ失礼します」

そう言って出ていった。

穂「お断りしますって海未ちゃんみたい」

穂乃果ちゃんはすぐさま愚痴を漏らした。

それを聞いて、海未ちゃんは現実を見せようと

海「当たり前です。あれが普通の反応です」

と、少し厳しい言葉をかける

穂「せっかく海未ちゃんが作ってくれた歌詞があるのに」

そう言いながら穂乃果ちゃんは海未ちゃんの作った歌詞を取り出した。

あと一応僕も手伝ったんだけどな。

まあそれはおいといたらダメだけど置いていて



その事に気づいた海未ちゃんは  
海「ちよつとそれは！」

と言いながらとろうとしている。

穂「ええーいいじゃんどうせライブでみんなに聞いてもらうんだから」

海「そうですね」

そんな海未ちゃんと穂乃果ちゃんの言い争いをことちゃんは止めた

こ「まあまあそれくらいにして」

そう言う和海未ちゃんと穂乃果ちゃんは

海穂「わかりました（わかったよ）」

そう言つて争いをやめた。

え？すごつ！ことちゃんすごすぎない！

そう心の中でことちゃんを誉めてると

こ「それよりも、煌君？いつの間に名前呼び会うぐらいに中がよくなったの？」

え？怖いんだけどだって顔は笑っているけど目が笑ってないんだよ、怖すぎない！

二人に助けを求めようとすると

穂「あ、それ穂乃果も気になったんだ」

穂乃果ちゃんも加わった。

あつこれ積んだかも

こ「ねえ？どうしてなの」

これいじようはこわかったので話した。

煌「そ、それはね、生徒会があるときたまに早く仕事が終わるんだけどその時に音楽室で真姫のピアノを聞いたり、一緒似引いたりしてたんだよ。嘘じゃないよほんとだよ」

そう、話すと

こ「へえ〜煌君私達のことを置いといて、他の娘と遊んでたんだ」

あつこれ地雷をふみぬいたかも・僕終わった

そう思っていたときにドアが開いた。そこにやって来たのは絵里

先輩だった。

煌「絵里先輩？」

絵「貴方たち、ちよつといいかしら。」

絵里先輩がそう聞いてきたので

煌「良いですよ」

僕はそう答えた。

絵「今までスクールアイドルがなかったこの学校で、やってみましたがどやっぱりダメでしたとなったたら、みんなどう思うかしら。だからあなた達がやってることは逆効果になりうるのよ」

確かに絵里先輩の言っていることは一理ある。だが間違っていることがひとつある。

煌「絵里先輩。絵里先輩の言っていることは一理あります」

こ穗海「「え？」」

煌「でも間違っていることがひとつある。それは、それはリスクを恐れていることです。確かにスクールアイドルはリスクがあるかもしれない。しかし他の学校よりも見所が少ないこの学校は確かに良いところがあります。それは、来てみないと分かりません。しかも来てくれる人が少ないんです。そうなったら新しい良いところを作るしかないです。」

その言葉を聞いて絵里先輩は言い返そうとする。

絵「でっ、でもっ！」

だが僕は続きを待たずに言葉を続ける。

煌「その為には、部活動で目立つか、地域の活動に貢献する。そのどちらかです。部活動は確実性ありますが時間が、掛かります地域の活動はそもそも中学生に目立ちにくい。」

スクールアイドルは、人気がでないといけません。成功すると短い期間で知名度を稼ぐことが出来ます。

しかし失敗したらそこまで続けできた時間が無駄になると言うことです。

しかし、そうなった時のためにもそうならないためにも仕事をするのが僕たち生徒会なんじゃないんですか？絵里先輩。それと、リスク

を恐れていたら何も新しいことにチャレンジ出来ませんよ」

絵「でも、私もこの学校はなくなって欲しくない本当にそう思ってるから、簡単に考えてほしくないの。それと煌斗君今日生徒会があるから来てね、それじゃあ」

そう言つて絵里先輩は出ていった。それよりも今日生徒会あったの!?!真姫ちゃんとの約束守れるかな?それと、こんなことがあったのに気まずっ!

♪♪♪

授業中

穂乃果ちゃんは何か真剣に考えていた。やっぱり絵里先輩に言われたことかな?

その後もずっと考えていた。

♪♪♪

放課後

僕たちは中庭に来ていた。

穂「私、ちよつと簡単に考え過ぎだったかも」

それはマイナス思考のある意味穂乃果ちゃんらしくない言葉だった。

その言葉に海未ちゃんは

海「やつと気づいたのですか」

そう言つて海未ちゃんは、穂乃果ちゃんの考えの甘さに少し呆れる。

穂「でもふざけてやろうつて言つたわけじゃないよ。海未ちゃんのメニュー全部こなしてるし、おかげで足は筋肉痛だけど」

そうなのだ穂乃花果ちゃんは本気なのだ。その本気を僕は近くで見ているからよくわかつている。だから僕は手伝いをしたいと思つたのだ。

煌「確かに頑張っているとは思うよ、でも絵里先輩の言っていることはちゃんと受け止めないといけないよ」

僕の言葉を聞いて

穂「そうだよね、もう1ヶ月もないんだよね」

穂乃果ちゃんは期限について言い

こ「ライブをやるにしても歌う曲位は考えないと」  
ことちゃんは曲について言った。

煌「曲については僕にまかせてほしんだ」

海「何か策があるんですか？」

煌「うん、多分大丈夫」

そう言うと、穂乃果ちゃんたちは僕に任せてくれた。

♪♪♪

あの話し合いのあと僕たちは荷物をとりに教室へ戻り、穂乃果ちゃんは途中で名前の募集の箱を見に行った。

僕たちは話ながら待っていると、穂乃果ちゃんが来た。

穂「入ってたよ〜一枚！」

入って来て直ぐに穂乃果ちゃんはそう言った。

煌「本当！」

みんなは穂乃果ちゃんの近くに行った

それを確認してから紙を開いた。そこには「μ、s」と書いてあった。

確かμ、sって9人の女神じゃなかったっけ？今は3人これから9人になるのか？まさか、これを書いた人もそこまで考えてないよな、

穂「ユーズ？」

海「いえ、多分ミュージズと呼ぶのでしよう」

海未ちゃんのその言葉を聞いて僕は心の中でこう思った。

次に穂乃果ちゃんが「ああ石鱈？」という。

穂「ああ石鱈？」

ほらね。ここは僕がちゃんとした情報を教えないとな。

煌「違うよ。このμ、sはギリシヤ神話の9人の女神のことを差すんだと思うよ」

穂「へえ〜煌斗君物知りだね〜」

それを聞いて穂乃果ちゃんが誉めてきた。

煌「そうでもないよ。それと、僕は言いたいと思うよこの名前」

話が変わりそうだったので話を戻した。

こ「うん、ことりもそう思う」

その言葉を聞いて穂乃果ちゃんが言った。

穂「うん！今日から私達はμ'sだ！」

♪♪♪

僕は生徒会室に行く前に一年生のクラスに来ていた。それは真姫ちゃんに遅れることを伝えるためだ。だが教室に行くと真姫ちゃんは居なかった。

煌「ああ遅かったか」

困っていると穂乃果ちゃんのような感じの一年生が話しかけてきた。

一年生「どうしたんですか？」

煌「ああそうだ、真姫ちゃんつてもう行った？」

僕はその一年生に聞いてみた。

一年生「西木野さんですか？西木野さんならもう行きましたよ」

一年生はそう教えてくれた。

煌「やっぱりそうなんだ。ありがとうね、教えてくれて。じゃあ」

そう言って行こうとすると、後ろから声に止められた。

？「ああの！南本さんですよね」

煌「え？そうだけど」

僕はビツクリした。それは僕は名前を言ってなかったからだ。でも見覚えがあった。

？「あの？覚えてないですか？この前助けていただいたんですけど」

この前助けた？ああ！思い出した小泉さんか

煌「もしかして小泉さん？」

花「はい、そうです。ずっとお礼をしたくて」

煌「いいよ、お礼何てしなくても、それにこの前も行ったかみだけどお礼をしてほしくて助けた訳じゃないから」

そう話していると、さっきの一年生が小泉さんに話しかけた。

一年生「かよちんどうしたの？」

かよちん？ああ花陽の読み方を変えてかよ、ちゃんのやをとってちんそれでかよちんかな？

花「凜ちゃんこの間話していた助けてくれた人だよ」

凜「そうなの？先輩！この間かよちんを助けてくれてありがとうございます  
ございます」

煌「大丈夫だよ。それと、急いでいるから行くね？それじゃあまた、小泉さんにえっと」

困った。もう一人のこの名前聞いてなかった。

煌「ねえ？名前を聞いていい？」

だから僕は名前を聞いてみた。

一年生「凜ですか？凜の名前は星空凜です」

煌「それじゃあまた、小泉さんに星空さん」

凜花「はい、また」

花「あの、アイドル頑張ってください」

煌「うん分かったよ」

そして、僕は急いで生徒会室に行った

♪♪♪

生徒会室

煌「すみません、遅れました」

遅れて来たのでさすがに絵里先輩と希先輩が来ていた。

希「お、やっと来たんや。待ってたで」

希先輩は待ってくれていたようだ。つと言っても、ちゃんと仕事はしていた。

煌「すみません、ちよつとやらないといけないことがあつて、それで何をすればいいですか？」

僕は遅れた理由を言いながら、仕事を聞いた。

絵「今日はこれをやって」

そう言つて、絵里先輩は書類を渡してきた。

煌「はい、分かりました」

ある程度進んで休憩していた時に希先輩が言ってきた。

希「なあ、うち思ったんやけど、何でそんなにエリチと煌斗君しや

べらへんの？」

希先輩はそう聞いてきた。

絵「何いってるの？希、話してるわよ」

そう、話してはいる。ただそのすべては事務的な会話だけだった。だけど、希先輩はそうゆうことをいってはいないだろう

希「違う違うそうやなくて」

雑談をしてないってことだろうなあ。聞いてみるか。

煌「事務的な会話じゃなくて、雑談をしてないってことですか？」  
分かっていたのがビックリしたのか、一瞬希先輩が固まったがすぐになおつた。

希「・・そうや、どおしたん？」

やはり気になったか。でもちよつとした言い合いのあとで気まずいからなあ。・・

絵「それは・・」

少しは絵里先輩も気まずいようだ。

絵里先輩が言いよんでいたのが気になったのか、希先輩は自分の推測と意見を言ってきた。

希「もしかして、ケンカでもしたん？もしそうやったらはやく仲直りした方がええよ」

僕は別に喧嘩ではないと思うがはやく仲直りした方がいいのは確実だろう。このままだとずっと気まずいし。

煌「喧嘩ほどではないですが、仲直りした方がいいのはそうですね」

僕は絵里先輩の方に近づいて謝った。

煌「絵里先輩、さっきはすみませんでした」

僕はそう言いながらお辞儀した。

絵「大丈夫よ。私も悪かったし、このまま気まずいのも嫌だしね」  
絵里先輩がそういつてくれたので、僕は手を出した。あつ！襲うとかじゃなくて、本当に手を伸ばしたただけだから。

絵「？どおしたの」

絵里先輩がわかっていないようなので、伝えた。

煌「仲直りの握手ですよ。ほら」

そう言いながら僕は絵里先輩の手をつかんだ。

絵「え？ええそうね／＼／」

急につかんだのではじめは理解していなかったようすだったが途中から理解していた。

でもなんて絵里先輩顔を紅くなってるんだらう？

希「これで仲直りやね。それと悪いんやけど、そろそろバイトの時間やからうちもう行くね？」

希先輩が出ていった。あつそろそろ休憩が終わる。

絵「そろそろ休憩も終わりね」

その後仕事をはやく終わらせた。

絵「ねえ、煌斗君ってどっちの味方なの？」

絵里先輩が急に聞いてきた。どっちのって？

煌「どっちのってどういう意味ですか？」

絵「私かあの子達よ」

あの子達って穂乃果ちゃんたちのことだろう。そんなの決まってる。

煌「それなら、絵里先輩の味方ですよ」

絵里先輩はビツクリした顔をしていた。まあそうだろう、これだと穂乃果ちゃんたちの味方じゃないといってるようなものだ。だがそうじゃない。

絵「え！あの子達じゃないの？」

穂乃果ちゃんたちは味方じゃない

煌「はい、そうです。僕は絵里先輩の味方ですよ。」

だって穂乃果ちゃんたちは

絵「ならあの子達は？」

煌「だって穂乃果ちゃんたちは仲間ですから」

そう、穂乃果ちゃんたちは仲間なのだ。

煌「だからというわけではないんですが、何かあったら頼ってくださいね？解決出来るとは言えませんが、一緒に背負うぐらいなら出来ますから」



♪♪♪

生徒会室を出たあと僕は音楽室に来ていた。中を見てみると、まだ真姫ちゃんがいた。

煌「ごめんね、真姫ちゃん」

入って行くと、真姫ちゃんは不機嫌そうに見てきた。

真「今日来るって言ったじゃないですか」

どうやら真姫ちゃんは待っていてくれたようだ。

煌「真姫ちゃん僕が来るの待っていてくれたんだ」

僕はそう聞いたけど真姫ちゃんは素直に答えてくれなかった。

真「そ、そんなんじゃないです／＼」

全く素直になればいいのに

真「それよりも何で遅くなったんですか？」

真姫ちゃんは話題を変えたいようだ。

煌「それは、生徒会あるの忘れてて」

僕は嘘を言わず正直に答えると

真姫ちゃんのはあとため息を吐きながら呆れたような顔をしていった。

煌「そうそう今日は伝えたいことがあったんだ」

それを聞いて真姫ちゃんは興味を示してくれた。

真「何ですか？」

それは作曲のことだ。

煌「それはね、穂乃果ちゃんたちに作曲してほしいんだ」

その時にまた、真姫ちゃんは迷っているような顔をした。

真「お断りします。どうしてそんなに私に頼むんですか？」

煌「それはね、好きだからだよ」

真「ヴえ！／＼」

ん？なんか真姫ちゃんビククリしてる。どうしたのかな？ああ！

絶対勘違いさせてる。

煌「ごめん！そうじゃなくて、真姫ちゃんの音に感動したって意味なんだ」

それを聞いて真姫ちゃんは安心したような感じだった。それはいいんだけどなんだかなあ。

煌「はいこれ、歌詞良かったら読んで、それいつも朝と放課後、神明明神で練習してるから良かったら来てね。それじゃあ」

僕は言いたいことを言っつてすぐ出ていった。

♪♪

神明明神

僕はついたあとすぐに練習に参加した。

今は休憩中だ。

こ「それにしても煌君遅かったね」

やつぱりその話になったか、今日あんなことになってから怖いんだよ

こ「どうしてかな」

ことちゃんに詰め寄られている時に悲鳴が聞こえた。

穂「どうしたんだろ」

こ「さあ」

え？何でそんなに冷静なの？

煌「ちよつと見てくるから待ってて」

したに見に行くと、胸を揉まれてる真姫ちゃんと胸を揉んでる希先輩がいた。

希「まだ発展途上といったところやな」

希先輩は分析を始めた。

真「は？」

真姫ちゃんは意味がわからないといった表情をしていた

希「でもまだ望みは捨てなくて大丈夫や 大きくなる可能性はある」

でも希先輩は分析を続ける。

へえ、そうなんだ。つてそうじゃなくて

煌「何してるんですか、希先輩？」

その声で僕がいたのに気づいたようで

希「お！煌斗君やん。さっきぶりやなあ」

真「え？ 煌斗先輩！」

真姫ちゃんは僕に気づいて、胸を揉まれたことか、その事を僕に見られたことで顔を紅くした

煌「真姫ちゃん来てくれたんだね」

真「えつと、それは。」

真姫ちゃんは恥ずかしかったのか曖昧な返事をした。

そのことを希先輩もわかっていたようで

希「恥ずかしいんやったらこっさりっていう手もあると思うんや。

それに、一人が大変やったら煌斗君にでも助けてもらえばいいやん」

アドバイスをした。

最初は急に真面目になられてびっくりしてしまう真姫ちゃんだったが、

真「え？ 何を……」

聞いてみたらそれは何かを見透かしたような答えに

希「わかるやろ」

そう言って希先輩は神社のほうへと戻っていった。

希先輩の言葉で決心がついたのか

真「あの煌斗先輩、私作曲します。だから手伝ってくださいませんか」

あの真姫ちゃんが素直に頼んできた。しかも、今とさっきのことで顔を紅くして上目遣いで。

絶対こんなの断れないよ！ことちゃんのお願いといい勝負だよ！

まあ最初から断るつもりもないけど。

煌「うん、いいよ。でもどこでする？」

そう、場所がないのだ。

真「それなら、私の家に来ませんか？」

すぐに解決した。

煌「ならもう一人つれてきていい？ 編曲もしたいから」

真「まあいいですよ」

その後普通に練習をした



一週間後

先週の週末に曲が完成した。

輝「お兄ちゃん、これお兄ちゃんのもの？なんかμ sって書いてあるけど」

そう言ったのは、僕の妹の輝夜勉強が出来て家事も料理以外なら出来るそして、兄ながら容姿もかわいいと思う。

煌「あっ！ありがとう」

けど欠点がある。料理が出来ないのに比にならない位に。それは、自分で言うのもなんだが、僕のことを好きすぎるのだ。すなわち超ブラコンなんだ。

輝「どおいたしました」

現にそう言いながら抱きついてきている。

煌「そろそろ学校いかないといけないからバイバイ」

不満そうながら離してくれた。そうして僕はCDをもって学校に行った。

♪♪♪

学校についてみんなで曲を聞いた。とても良くできてた。

こうして僕たちの初めての曲『START・DASH』が完成した。

## ファーストライブ前日

前回のテス神3つの出来事

- 1つ、煌斗が真姫と仲良くなっていることが発覚！
  - 2つ、グループ名が決定！
  - 3つ、曲が完成！
- 1つ目そこまで重要じゃないような

煌斗 side

曲が出来、やる気がこれまで以上に出てきて、本番は明日というところまで来ていた。

それとやつと僕のメインの仕事、ダンスが出来るようになり、やっているのだが

煌「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト」

穂「ことりちゃん、左腕」

こ「あっうん」

海「穂乃果っ」

穂「タッチ！」

海「いい感じですよ！」

穂「うん！」

と、いった感じでお互いがお互いを指摘しあっているから、僕の仕事はあの猿のオモチャみたいのに、てを叩いてカウントをとるだけになっちゃった。いや、別にいいんだよ、でも僕の仕事がなくなるからね。やることがないって言うかなんと言うか

穂「やつと朝練終わった」

朝練が終わって穂乃果ちゃんは冷たい飲み物を首に当て、日陰に座った。

海「まだ放課後の練習がありますよ？」

こ「でも随分出来るようになったよね？」

煌「僕もそう思うよ」

ライブまではあと1日。1ヶ月という短い期間の中3人はダンスなんてしたことのない状態だったし、ことちゃんと穂乃果ちゃんに關しては運動すらあまりしていなかったんだから。しかも、つい最近までは曲もグループ名も無かったんだ。そう考えればかなり成長していると思う。

海「それにしても・2人がここまでまじめにやるとは思いませんでした。穂乃果は寝坊してくるとばかり思っていましたし」

穂「大丈夫！その分授業中ぐっすり寝てるから！」

そう言いながら穂乃果ちゃんは仰向けに寝転がる。

煌「何も大丈夫じゃない気がするんだけど？気のせい」

穂「あっ！」

僕の疑問もそつちのけで穂乃果ちゃんは何かに気が付いたようだ。

穂「おーい西木野さーん。真姫ちゃーん」

どうやら真姫ちゃんがいたようだ。てかよく気づいたな穂乃果ちゃん

真「ヴえ！」

真姫ちゃんは驚きながらも、階段を上り、穂乃果ちゃんに詰め寄る。

真「大声で呼ばないで！」

穂「どうして？」

真「恥ずかしいからよ！」

確かに大声で呼ばれるの恥ずかしいよね。

穂「そうだ！あの曲…」

穂乃果ちゃんはポケットからミュージックプレイヤーを取り出し、真姫ちゃんに見せる。

穂「3人で歌ってみたから聞いてみて！」

真「はあっ!?!何で!?!」

穂「だって…真姫ちゃんが作ってくれた曲でしょ？」

真「だから…私じゃないって何度も言ってるでしょ？」

海「まだ言っているのですか？」

煌「それにCDに声入っていたからばれてるよ？」

真「それは、煌斗先輩だって」

そこまでいったときに言葉を遮ってことちゃんが話してきた。

こ「え！煌君も作ったの？」

煌「う、うんそうだけど」

真「え！何で先輩はばれてないんですか？」

煌「だって声変えて歌ってたし」

そう僕は声を変えて歌っていたから、ばれていなかった。まあ、今のではそれだけ。

穂「そんなことより、いつ、どこで作ったの！」

煌「それは、CDで曲を聞いた前の週の週末に真姫ちゃんの家でそこまでいって僕は気づいた、またことちゃんが怖い笑顔をしていった。

屋上の時のようなことにならないように僕は話題を変えた。

煌「それよりも、真姫ちゃんに聞いてもらうんじゃないの？」

穂「そうだった！」

その後は、真姫ちゃんに聞いてもらって、アドバイスをもらい学校に向かった。

♪♪♪

穂「ふわあああ〜」

海「眠る気満々ですね」

朝練のあと、僕たち4人は普通に登校している。それにしても穂乃果ちゃんじゃないにしても、眠い。

そんな感じで登校していると後ろから声をかけられた。

生徒「ねえ！あの子たちじゃない!？」

煌「ん？」

リボンの色からして先輩だろう。

生徒「あなたたちについてもしかして、スクールアイドルやってるっていう」

それはスクールアイドルかの確認だったようだ。

こ「あ、はい！μsってグループです！」

やはり今まで学校にスクールアイドルなんてなかったこともあって、すぐに噂は校内に広がっているようだ。

生徒「μ☒s・ああ！せっけ」

そこまでのいいかけたときすかさず海未ちゃんが間違いを指摘した。  
海「違います」

このネタはもはやお約束だ。

生徒「そうそう、うちの妹がネットであなたたちのこと見かけたつて！」

穂「本当ですか!？」

生徒「明日ライブやるんでしょ？」

そう、いよいよ明日だ

こ「はい！明日の放課後に！」

生徒「どんな風にやるの!？ちよつと踊ってみてくれない!？」

興味がわいたようで少し踊つてといつてきた。

穂「え!？ここですか!？」

しかし、いきなり踊れと言われても、戸惑うだろう。

生徒「ちよつとだけでいいから！」

そんな話をしているときに僕は気づいた。

煌「ねえ二人とも、海未ちゃんどつかいったよ」

海未ちゃんがどこかにいったのだ。

♪♪♪

海未ちゃんを探して、たどり着いたのは、屋上だった。そこで海未ちゃんは体育座りをしていた。どうでもいいけど、ん？どうでもいいのかな？あの座りかただとスカートの短さによって、パンツ見えるんだよね。極力見ないようにしたいけど（見ないとはいってない）、嫌でも見えてしまうよね（嫌とは言つてない寧ろ目の保養になる）

こ「煌君？海未ちゃんのことを見て変なことを考えてなかった？」

煌「な、なんのことかな？」

僕は誤魔化した。追及してこなかったところを考えると大丈夫なのだろう。またあの怖い笑顔になってしまふところだったよ。それにしても、え！こちゃんいつの間読心術を覚えたの！

海「やっぱ無理です。」

こちゃんに驚いていた時に海未ちゃんが眩いた。



穂「ええ〜？どうしたの〜？海未ちゃんなら出来るよお〜！」

海「出来ます」

煌穂こ「「え？」」

無理だと言ったり、出来ると言ったり、僕と穂乃果ちゃんのこと  
ちゃんはよく分からず、綺麗に揃って聞き返す。

海「歌もダンスもこれだけ練習してきましたし、でも、人前で歌う  
のを想像すると。」

煌「そういうことか。」

こ「緊張しちゃう？」

ことちゃんの言葉に黙って頷く海未ちゃん。こればかりは仕方な  
いか。

穂「う〜ん… そうだ！」

ずっと何か考え事をしていた穂乃果ちゃんが何かを思い付いたみ  
たいだ。

煌「穂乃果ちゃん？何か思いついた？」

穂「うん！そういう時はお客さんを野菜だと思えつてお母さんが  
言ってた！」

海「野菜・私に1人で歌えと!？」

こ「そこ？」

煌「一体何を想像したんだか。」

お客さんを野菜だと思う…想像するとめちやくちやシユールだ  
ね。

煌「はあ… 困ったなあ〜」

穂「でも… 海未ちゃんが辛いんだったら、何か考えない  
と…」

煌「そうだね…」

これは必ず乗り越えなければならぬ壁だと思っし… てかつ  
乗り越えられないと後々大変なことになるな。

海「ひ、人前じゃなければ大丈夫だと思うんです！人前じゃなけれ  
ば！」

また、何か考えていた穂乃果ちゃんは海未ちゃんの腕をつかんで立

ち上がらせる。

穂「色々考えるより…慣れちゃった方が早いよ！」

煌「穂乃果ちゃんの言う通りだね」

穂「じゃあ行こう！」

煌「ちよつと待つてもうすぐ授業始まるから」

え？何、みんな気づいてなかったの！

♪♪♪

放課後僕たちは校門前でチラシ配りをしている。海未ちゃんの苦手克服のためにチラシ配りをする事になった。

元々、アキバでやろうとしていたらしいのだが、今回のチラシはライブのお知らせも入っていたからこれない人に配つてもと言うことと、海未ちゃんには、難しいと言うことでここになった。

穂「じゃあ始めるよ！μsファーストライブやりまーす！よろしくお願いしまーす！」

煌「ありがとうございます！」

こ「明日の放課後、講堂でライブやりまーす！ぜひ来てくださーい！」

僕と穂乃果ちゃんのことちゃんは声を出し、チラシを受け取ってもらえているが…

海「あつ…」

海未ちゃんは緊張で声も出せないでいた。それでも頑張つて声を出す。

海「お、お願いします！」

生徒「… 知らない」

背の小さな黒髪ツインテールの人にチラシを渡そうとするが、断られたようだ。

穂「駄目だよ、そんなんじゃない」

海「穂乃果はお店の手伝いで慣れてるかも知れませんが、私は…」

穂「ことりちゃんだってちゃんとやってるよ？」

煌「ことりちゃんは案外人見知りしないんだな…」

いつものように笑って、難なくチラシを受け取ってもらえている。

穂「海未ちゃんも！それ配り終えるまで辞めちゃだめだからね！」  
海「ええ!?無理です！」

それを聞いた穂乃果はニヤリと笑い、

穂「海未ちゃん… 私が階段5往復出来ないって言った時、何て言っただけ？」

と切り返した。

海「うう… 分かりました！やりましょう！」

結果穂乃果ちゃんは海未ちゃんにやる気と勇気を与えていった。

煌「僕もやるか」

花「あのっ！」

チラシ配りを再開しようとするすると後ろから呼びかける声が聞こえてきた。

煌「あれ、小泉さん？」

花「あ、あの！」

小泉さんは僕のことを真っ直ぐ見つめ

花「ライブ… 見に行きます！」

とても嬉しいことを言ってくれた。

穂「本当!？」

こ「来てくれるの!？」

海「では… 1枚と2枚と言わず、これを全部！」

煌「ずるは駄目だよ！」

小泉さんにチラシの束を全て渡そうとする海未ちゃんに注意をする。

海「分かっています…」

穂「そうだ、私は高坂穂乃果だよ。あなたは？」

そう言えば穂乃果ちゃんたちと、小泉さんは会ったことがなかったのか。

花「小泉花陽です」

こ「私は南ことり。よろしくね」

その後、ちよつとトラブルと言うかハプニングがあつたが、海未ちゃんも含め僕たちは無事にチラシを全て配り終えることが出来た。

♪♪♪

こ「お待たせ〜」

煌「ごめんね、待った?」

チラシ配りの後、僕たちは穂乃果ちゃんの家が集まった。

僕とこちゃん少し遅れてついた。

穂「全然大丈夫だよ!それより、これ見て!」

穂乃果ちゃんが見せてみたものを見ると、ランキングのページだった。

お!ランキングが上がってるじゃん

穂「ねえことりちゃん!それって衣装?」

こ「うん!さっきお店で最後の仕上げをしてもらって……」

そうしてこちゃんが紙袋から衣装を取り出す。

僕とこちゃんが遅れた理由はこの衣装を取りに行っていたからだ。

こ「じゃーん!」

穂「わあく!可愛い!」

出てきたのは店に並んでいても何も遜色のないものだった。学生がこれを作ったと言ってもきつと誰も信じないだろう。それまで高レベルなものだった。

こちゃんすごいなあ、僕も手伝ったけどここまでは無理だからなあ。

穂「本物のアイドルみたい!」

こ「本当!」

穂「すごい!すごいよ!ことりちゃん!」

穂乃果ちゃんは大絶賛だ。だが……

海「ことり……?」

こ「なに?」

海未ちゃんは指をスツと上げ

海「そのスカート丈は?」

スカートを指差した。

煌「…あ」

そう言えば… 海未ちゃんにスカート丈を長くしろって脅かされてたんだ。お願い

ガツとことちゃんの肩を掴み、迫力のある顔をする海未ちゃん。

海未ちゃん・アイドルがその顔は駄目だよ。

海「言つたはずです… スカートの最低膝下までなければ穿かないと！」

穂「だ、だってしょうがないよ、アイドルだもん！」

海「アイドルだからと言つてスカートは短くという決まりはないはずです！」

煌「確かにそうだけど…」

穂「でも… 今から直すのは流石に…」

海「そういう手に出るのは卑怯です！」

そこまで言うとな海未ちゃんは荷物を持って扉を開く。

海「ならば私は1人だけ制服で歌います！」

こ「ええ!？」

穂「そんなあ〜！」

煌「制服もそんなに変わらないけどいいの？」

海「制服もいいんです！」

何で制服はいいんだろう？そこまで制服と変わらないし、もしかしたら衣装よりも短いのに。

海「そもそも3人が悪いんですよ！私に黙って結託するなんて！」

穂「… だって、絶対成功させたいんだもん」

煌「穂乃果ちゃん… そうだよな」

穂「歌を作つて、ステップを覚えて、衣装も揃えて、ここまでずつと頑張ってきたんだもん。ここにいる4人でやってきて… 頑張つてきてよかつたつて… そう思いたいのに！」

すると穂乃果は突然窓へ向かい!!窓を開ける。

穂「思いたいのに!!!」

そして外へ大声で叫ぶ。町に響いて消えていく穂乃果ちゃんの声。海「何をやっているのですか！」

煌「近所迷惑だよ!？」

こ「私も同じかな」

ことちゃんも穂乃果ちゃんの叫びにはノータッチのようだ。

こ「私も4人でライブを成功させたい!」

海「ことり……」

ことちゃんの思いを聞いた海未ちゃんは僕と穂乃果ちゃんを見て、ため息をつく。

海「いつもいつも……ずるいです」

そして

海「分かりました」

海未ちゃんも肯定してくれた。思いはみんな一緒だったんだな……

すると、突然

穂「海未ちゃん……大好き〜!」

海「わあっ!？」

穂乃果ちゃんは海未ちゃんに飛びつくようにして抱き着いた。

こ「あっ!ずる〜い!ことりも♪」

そこにことちゃんも加わり3人で抱き合っていた。

海「もう……ことりまで……」

穂こ「「えへへ〜♪」」

海未ちゃんも満更でもない表情だ。

煌「ねえみんな、もう暗いからあんまりそとにいさせたくないけど、

神田明神に明日のこと祈りにいかないかな?」

穂「おおくいいね、じゃあさっそく行こう!」

♪♪♪

穂「ライブが成功しますように!いや、大成功しますように!」

海「緊張しませんように……」

こ「みんなが楽しんでくれますように」

煌「……」

穂「よろしくお願いしまーす!」

それぞれの願いを祈る。

海「煌斗は何も言ってますませんでしたけど…」

こ「一体何を願ったの？煌君」

煌「…もちろんライブの成功だって！」

穂「ええ？本当に？」

煌「当たり前だよ？」

まあ、それもあるんだけど… 1番に願ったのは…

『3人が笑顔でライブを終えることが出来ますように』…だ。

元々観客が来るとは僕は思っていない、悲しんでほしくないから言わないけどね。

このあとちゃんと全員送っていきました。

## 女神と+αだけのファーストライブ

前回のテス神3つの出来事

一つ、海未ちゃんの苦手克服

二つ、衣装が完成

三つ、煌斗は人がこないと思っている？

煌斗 side

絵「これで新入生歓迎会を終わります。各部活とも体験入部を行っているので興味があつたらどんどん覗いてみてください」

ついにやって来た。今日はライブ当日、別に僕が踊るわけではないけど、緊張している!!?

僕は生徒会の仕事で遅れていくが、皆はもうチラシ配りを始めているだろう。速くいかなくちや。

♪♪♪

穂「よろしくお願いしまーす」

煌「午後四時から講堂でライブをしまーす」

こ「よろしくお願いしまーす」

校門でチラシを配っているのだが、他の部活の方へ流れていき、中々もらってもらえなかった。

穂「中々もらってもらえないね」

こ「そうだね。」

もらってもらえないという事実が二人を弱気にさせていた。

煌「二人とも、あれを見てみな」

そう言いながら僕はある方向を指差した。

そこにいるのは、人見知りしていた昨日とはうってかわって積極的にチラシ配りをしている海未ちゃんの姿だ。

二人はその姿に影響されやる気を出した。

穂「よーし、頑張ろう！」

こ「うん！」



それからもう少し配って講堂に向かった。

♪♪♪

穂「え！手伝いつてくれるの」

ミ「ほら、リハーサルとかしたいでしょ」

講堂について少しすると一条さんたちが来た。リハーサルなどの手伝いをしてくれるようだ。

煌「ありがとうね、初めてさわるものを僕だけではきつかったから」

ヒ「もし、初めてじゃなかったら一人でできたの？」

一条さんが恐る恐る聞いて聞いてきた。

煌「分からないけど、いけるよたぶん」

そう答えると、みんな「ことちゃん以外みんな驚いたかおをしてい

た。  
何でみんな驚いてんだろう？」

フ「それより、私たちも学校なくなるの嫌だし」

ヒ「穂乃果たちにはうまくいつてほしいって思っているから」

応援してくれている人がいるって嬉しいかも

~~~~~

その後は別れて各々準備していった。

講堂

煌「いい？つけるよ」

穂「はーい」。(。・。・。)

校門

ミ「お願いしまーす」

またまた講堂

フ「準備オツケイ！」

ヒ「はーい」

~~~~~

穂「入ってきてもいいよ」

煌「わかったよ」

僕たちは控え室にいる。僕は扉の前に居たけど着替え終わったよ  
うなので入った。

開ける時何か聞こえた気がしたけど大丈夫だよね？

穂「わあ、可愛いどう？どう？似合ってる？」

なかにはいると穂乃果ちゃんが似合ってるかをきいてきた。

煌「うん、凄く似合ってるよ」

こ「うん、可愛いよ穂乃果ちゃん」

煌「うんうんいつも可愛いけどいつも以上に可愛いかも」

穂「き、煌斗君／＼／」

こ「ネエキラクン？コトリトオハナシデモシナイ？」

あつ（察し）またやつちやつたんですね？わかります。

煌「そ、それよりも海未ちゃんは？」

こ「え？海未ちゃん」

良かった〜正気に戻ったみたいだ。て言うか何であんな感じにな  
っているのかほんとにわからないんだけど？

穂「海未ちゃん、何してるの？ここには私たちしかいないんだから  
はやく出てきなよ」

海「わかつてますが、少し待ってください」

少し待っていると海未ちゃんが出てきた

海「どうですか？」

海未ちゃんも似合って、待って往生際が悪すぎない？そしてダサ  
いよ。

海未ちゃんは衣装の下にジャージのズボンをはいていた。

穂「何この往生際の悪さ、さっきの海未ちゃんはどこ行つたの！」

ほら穂乃果ちゃんも思っていたし、声には出してないけどことちや  
んも顔が。二人ともその顔アイドルがしちやダメだよ。

海「鏡をみてそしたら急に」

海未ちゃんの苦手克服出来たと思っただけだな、やっぱりそん  
なすぐには無理か、でもどうにかしないと。

海「イヤー」

え？何？え？どういうこと？今起こっていたことをありのまま話そう。穂乃果ちゃんや海未ちゃんのズボンを下げていた。何をいつている理解しがたいかもしれない。僕もそうだし、て言うか本当どういうこと？

こ「海未ちゃん可愛いよ」

穂「海未ちゃん凄く似合ってるよ」

僕はこの言葉を聞いて何となく理解した。ついでにいい方法を思いついた。

煌「ねえ、三人とも」

穂「ん？どうしたの煌斗君」

煌「三人で横に並んでみて？」

海「こうですか？」

三人は言われた通りに並んでくれた。

煌「そうそう、何か安心しない？」

海「確かにそうですね。安心します」

煌「安心したようで良かったよ。じゃあ僕はやることがあるからもういくね？」

穂「あれ？煌斗君どこ行くの？」

煌「いつてなかったつけ、照明とかするんだよ」

こ「そうなんだ、頑張ってるね」

煌「うん、それじゃあ後で」

いったような気がするんだけどな。まあいつか、それよりも急ごう。

♪♪♪

どうして・いや、分かっていたはずだ。スクールアイドルのファーストライブに人が全然来ないことは。でも一人も来ないなんてことは考えてなかった、考えたくなかった。どうすれば良かった？今からどうすればいい？

『ブー』

ブザーがなり幕が開いた。

始まってしまった。

穂「え。」

海「そんな。」

こ「嘘。」

穂乃果ちやんたちは目の前の状況に表情が期待から絶望に変わった。いつも元気な穂乃果ちゃんできえも、元気がひとつも見えなくなっている。

フ「ごめんね、頑張ったんだけど。」

違う、そうじゃない。手伝ってくれた三人が悪いんじゃない。僕が悪いんだ、僕も客寄せを手伝ってれば、もつと前から他にも何かをしていれば。

穂「そりゃあそうだ！世の中そんなに甘くない！」

海こ「穂乃果（穂乃果ちゃん）。」

誰がどう見ても、今の穂乃果の言葉は強がりには聞こえなかった。とても、とても、明るく振る舞おうとしている無理矢理な声

だがそんな穂乃果も、そして後ろの二人も涙目になっていてなく寸前ぐらいになっていた。

何が悲しんでほしくないだ何が三人が笑顔で終われますようにだ、三人とも泣きそうじゃないか。僕が先に言っていたら、三人は心の準備ができたかもしれない。そして、もう少しは悲しまなくても良かったかもしれない。ただ僕は自分の言葉で三人を悲しませたくなかっただけなのだ。嫌われたくなかっただけなのだ。三人の為に偽って。ただの自己満だ。だが、三人は何も悪くない。ただ学校が好きでなくなつてほしくなかっただけ、そんな三人の努力が無駄になるのは嫌だ。これも自己満かもしれない、でも、努力が実って欲しかった。

だから

煌「皆、歌ってほしい！」

穂「きら、と、君？」

煌「僕は皆の努力を近くでみてきた」

そう僕は近くでみてきた。だが、近くで見ただけなのだ。

煌「学校のために頑張っている三人の努力を見てきた、そんな三人の努力が無駄になってほしくない！でも、ここで歌わなきゃ努力が無駄になってしまう。それは嫌なんだ、そんなの自己満かもしれない、でもっ」

そこまで言うと、僕の言葉を遮って穂乃果ちゃんが喋った。

穂「でも、お客さんがいないんだよ、みてくれている人がいなきゃ」

煌「僕がいる！」

穂「えっ」

煌「僕が不満なら、一条さんたちもいる！」

バツン!!

すると、突然小泉さんが入ってきた。

花「はあはあはあ」

走ってきてくれたんだらう物凄く息切れをしている。

穂「花陽ちゃん」

花「あれ？ライブは？あれ？」

お客さんもちやんといる。

煌「ほら、お客さんならちゃんという、僕みたいな客紛いな手伝いでもない、本当に純粹に皆のライブを楽しみにして来てくれる子がいるんだから。そんなこの子のことを裏切っちゃダメだよ」

その瞬間、穂乃果ちゃんの目には輝きが戻った。

穂「やろう！歌おう、全力で！」

海「穂乃果」

穂「だって、そのために今日まで頑張ってきたんだから！」

こ「穂乃果ちゃん・海未ちゃん」

海「ええ」

花陽 side

そして、三人が配置につきステージが暗転する中、急に、

煌「小泉さ〜ん」

花「ふえっ・南本、先輩」

煌斗がすぐ傍まで駆けてきていた。

煌「そんなに驚かれるとそれなりに傷付くんですけど。」

花「す、すいません。」

煌「まあいいや。それよりさ」

花「は、はい。」

この薄暗い空間で、何を言われるのか、そう不安になっていた私に先輩は、

煌「ありがとね、来てくれて。ライブ最後まで楽しんでいてね」

花「え？」

私がちやんとした反応をする前に、先輩は前の方へ戻って行った。何故お礼を言われたのか分からない私はただ困惑するしかなかった。

ライブに来てくれたお礼なのか。

誰もいなかった所にタイミングよく来てくれたからなのか。

約束通りに来たからなのか。

それは花陽には分からない。もしかしたら全部なのかもしれないし。全部違うのかもしれない。

だが今は、先輩が言ったように、このライブを見て楽しもうと、私は思った。

三人称

そしてついに、ライブが始まる。

ライブが始まり決して多くない人数が講堂にやってくる。

花陽を追いかけ、講堂にやって来た凜は花陽の横にいくが、花陽の視線は真っ直ぐ前に向いていた、すると自然に凜の視線も前に向いた。凜の眼にはステージで踊っている三人しか映っていなかった。凜は完全に三人に魅了されていた。

煌斗side

僕は完全に三人に魅了されていた。

踊りはまだずれている場所があるし、音程も外れている場所がある、だがそれに負けない魅力があった。

そして、ライブは終わりを迎えた。

肩で息をしているも、三人の顔には笑顔があった。

そして、曲が終わり、僕は拍手をする。もちろん小泉さんも拍手をしている。いつの間にか小泉さんの隣にいる星空さん。入り口には真姫ちゃん。そして隠れるように椅子から顔を覗かせている黒髪のツインテール小学生のような中学生のような人。放送用の部屋には絵里先輩までいた。これなら、希先輩もどこかにいるかもしれない。

急に足音が響き、上の部屋から降りてきた絵里先輩が壇上に近づく。

穂「生徒会長…」

絵「どうするつもり？」

穂乃果ちゃんと絵里先輩の視線がぶつかる。強い眼差しを向けられても穂乃果ちゃんは怯まず告げた。

穂「続けます！」

海「穂乃果…」

こ「穂乃果ちゃん…」

絵「何故？これ以上続けても意味があるようには思えないけど」

周りを見渡ししながら、この現状を嫌でも理解させるように促しながら、絵里先輩は言った。

しかし

穂「やりたいからです！」

穂乃果ちゃんは即答で答えた。

穂「今、私もっともつと歌いたい、踊りたいって思っています。きつと海未ちゃんもことりちゃんも…こんな気持ち初めてなんです！やってよかつたって本気で思えたんです！」

今はこの気持ちを信じたい…。このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない。応援なんて全然もらえないかもしれない。でも…一生懸命頑張つて、私たちがとにかく頑張つて届けたい！今、私たちがここにいてこの思いを！

いつか…いつか私たち必ず…ここを満員にしてみせます！」

満員か、これは大きく出たね、でも不思議と穂乃果ちゃんたちならできそうな気がするよ。そのためにもこれからは本気でサポートを

しなくちや。

そしてアナウンスが流れ見に来ていた人が次々に出ていった。  
そして僕はステージに近づいて

煌「三人とも話したいことがあるから先に着替えて待っていて」

穂「話したいこと？まあわかったよ、待ってるね」

それだけを聞いて僕は講堂を出た。

♪♪♪

講堂を出るとそこには希先輩がいた。

あ、やつぱりいたんだね。

希「完敗からのスタートか」

煌「へえ、それいいですね、希先輩」

希「え！煌斗君おったん！」

またびつくりされたよ、もしかして僕って影薄いのかな。

煌「いきましたよ、それよりもやつぱり希先輩いたんですね」

希「やつぱりって、気付いとったん？」

煌「まああの言い方は絵里先輩が行きやすくするためにかと思いましたが」

あの言い方とは、生徒会の仕事で片付けをされていて、帰るときに絵里先輩にライブが気になるかと聞き、自分はいかないといっていた。  
以上

希「そうなんや、煌斗君って結構鋭いんやね」

煌「そんなことないですよ。あ、もうそろそろいかないと」

希「そうなん、じゃあまたな」

煌「はい、また今度」

希先輩と別れて控え室に向かった。

希先輩ってもしかして未来見えるのかな？あのタロットカードと  
かで

♪♪♪

コンコン

穂「入っていいよ」

なかにはいると皆はもう着替え終わっていた。着るより脱ぐ方が



速いのかな？

煌「ごめんね、待った？」

穂「そんなに待ってないけど、女の子を待たせたらダメだよ！」

煌「次から気を付けるよ」

穂乃果ちゃんに怒られる何て思いもしなかった

こ「それで話したいことって何？」

早速本題にはいつてきた。まあ待たせたんだから速くしたいんだろう。ライブ後だし。

煌「話したいことは四つあって

一つはライブの話、二つ目はそこまで重要じゃない話、三つ目はこのあとの話、四つ目は練習の話どれからする？」

穂「じゃあ穂乃果から決めるね？まずはじめはそこまで重要じゃない話から」

煌「わかったよ。そこまで重要じゃない話は海未ちゃんのこと、呼び捨てで読んでいいかな？って話」

海「何で突然？」

まあそう思うよね、でも理由は何か海未ちゃんはちゃんじゃない気がしたんだよね。

煌「何となくだよつまり感覚、それで、いい？」

海「感覚ですか、まあ別に良いですが」

あ、いいんだね。

煌「じゃあこれからもよろしくね海未」

海「はい、よろしくお願いします」

煌「じゃあ次は海未だね、何がいい？」

海「え、私ですか？じゃあライブの話にします」

ライブの話か。正直一番暗い話なんだよね、て言うか他全然暗くない。

煌「ライブの話はね、実は僕、お客さんは全然来ないとわかってたんだ」

こ穂海「「え！」」

まあびつくりするよね、だって一応マネージャーなんだし。

こ「それってどういうこと?」

海「私達を信頼してないことですか?」

やっぱりそうとらえちゃうよね。まああながち間違ってるないけど。

煌「そうじゃないと思いたい」

海「思いたってどういうことですか?」

煌「それは、僕たちはスクールアイドルだよ?て言うことはスポンサー等がついてないと言うことで、曲作りから衣装まで全て自分たちでやらなくちゃならない、そうだよ?」

海「実際、私達も自分達でやりましたし」

こ「それがどうしたの?」

煌「告知も自分達でやらなくちゃならない。そして、今回はファーストライブだと言うことは初めてのライブ、まだ一回もやってないと言うこと」

穂「そういうことだよ。それがどうしたの?」

海「もう、回りくどいこと言ってるので速く言ってください」

こ「ここまでの説明が長く、速く結論を言って欲しかったらしい。」

煌「そして、今日は部活動体験の日だ。今年の一年生は少なく皆は自分の部活に入ってほしい。だから在学生はあまりこない、そして一年生は速く部活を決めて参加したいのと、いくらスクールアイドルが人気でも、知名度がなくちゃ来ない、と言うことは?」

こ「ここまで言うと三人は答えが出たようだ。」

こ「お客さんが来ないってことだね」

海「じゃあそれを何で伝えてくれなかったのですか?」

煌「ここからが本題だ。何で伝えなかったと言うと、僕の言葉で三人に傷ついてほしくなかったからって言うと言こえはいいけど」

海「違うのですか?」

煌「いや、実際そうなんだけど、心のどこかで、言うのを嫌われるんじゃないかって思ったりして」

あれ?それってどっちにしても信頼してないことにならない?

煌「でも、今日気付いたんだ、それは自己満だったんだって、いつておけば、心の準備が出来て余り悲しまなかったかもしれない、それ

よりも、もつと僕が働いていれば、お客さんが来たかもしれないってだから、ごめん！」

そう言っただけで僕は頭を下げた。本当は土下座したいんだけどね。え、何でしないかって？そこは察してよ。それと僕はMじゃないから。

ここまで余り喋らなかつた穂乃果ちゃんが口を開いた。

穂「なんだ、そんなことか」

煌「なんだって結構大事な話だと思うよ」

この話をなんだって言える穂乃果ちゃんすごいくない？やばくない？

穂「そうなんだけど、でも煌斗君は私達のことを思っただけで言わなかつたんだよね？」

煌「一応そうだね」

穂「なら問題ないよ！」

凄いな穂乃果ちゃんこんな感じで今までも来たんだろうな。

煌「じゃあ最後にお願ひ、いい？」

穂「何？」

煌「それじゃあ、僕、南本煌斗を改めて、sのマネージャーにしてくださいませんか？」

すると、穂乃果ちゃんは二人の方を見てうなずき三人揃って言ってきた。

こ穂海「「もちろん」」

認めてくれて良かった、これからはもうこんなことがないように頑張ろう。

穂「じゃあこの話はここで終わって、次はことりちゃん」

こ「じゃあ次は練習の話」

煌「それは、練習メニューを少し変えさせてもらおうって話」

海「何ですか、今のじゃあ不満があるんですか？」

煌「そんなことはないよ、でももつとレベルアップするためには少し改善しないと」

海「そういうことですか、わかりました、煌斗に任せます」

分かってくれたようで良かった。次の休みにあいつの場所にも

いくか。

煌「じゃあ最後はこのあとの話だね、それは、僕の家で打ち上げと  
言うか反省会と言うか、とにかく僕が料理をするから家に来ないかっ  
て話」

その瞬間穂乃果ちゃんがはしやいだ、そしてことちゃんも喜んでい  
た。

海「でも、家のひとに迷惑では？」

ただし海未だけは違った。一番の常識人だしね。

煌「その辺は大丈夫、両親とも遅いから、家に居るのは妹だけだか  
ら」

海「そう言うことならわかりました」

と言うことで僕の家で打ち上げをすることになった

## 1. 5章 休息と小さな事件 まさかの展開？

前回のテス神三つの出来事

一つ、ファーストライブは人が来なかった

二つ、煌斗は呼び方を海未ちゃんから海未に変えた

三つ、煌斗改めてμsのマネージャーになった

煌斗side

僕は、家に行く前に、輝夜に電話をかけていた。

輝「もしもし？どうしたのお兄ちゃん？」

煌「今日友達が家に来て、ご飯食べに来るんだけど、なに食べたい？」

輝「え、私が決めていいの！それじゃあ、お兄ちゃんの料理何でも美味しいけど、やっぱり一番美味しいのは、オムライスだから、オムライス」

作る側として美味しいって言われるのは嬉しいな

煌「オムライスね、わかったよ」

輝「じゃあきるね？」

煌「うん、じゃあ後で」

♪♪♪

家についた。

煌「家ここだよ」

穂「へえ、そうなんだ、ね！はいつていい？」

煌「鍵は開いているけど、僕が先にはいるよ」

それには訳がある

穂「ええー何で？」

海「穂乃果っ！ここは煌斗の家なんですから、煌斗が先に入るの  
当たり前でしょう」

そう言うことじゃないんだけど、まあ入ればわかる。

煌「ただいま」

輝「お兄ちゃん」

僕が玄関を開けるなり輝夜が飛んできた。ちなみに僕は大丈夫だよ、いつもだから慣れちゃうよね。まあ最初はきつかったけど。え、贅沢な悩み？全然そんなことはないよ、ハーレムとかも妄想だから良くて実際は気まずいんだから。僕？僕はまあ知り合いいたし？て言うかまず、そう言うことを考えるひとに、いないよね、知り合い、いないから考えるんでしょ？

海「煌斗っ何してるんですか！こ、こんなところで／＼／＼」

煌「こんなとこって言われたって開けたらきたし？」

海「あ、開けたら来たって／＼／＼」

今気付いたけど海未顔紅くない？これだけでも駄目なの？結構やばくない？将来、旦那とかできたらどうするんだろう？

輝「ねえ、お兄ちゃん？友達って女の子だったの？」

煌「あれ？いってなかったっけ？」

輝「友達としか言ってないよ、普通友達って男の子だと思っじゃない！」

そんなもんなのかなあ

煌「そうなの？でも男子でも、家につれてくるのは雄大位だし、雄大なら雄大って言うよ、しかも忙しくて最近話してないからこれないし、しかも今通ってるの音乃木坂だから男子いないし」

輝「で、でもっ！」

煌「まあまあ輝夜、落ち着いて速くしないとご飯遅くなるよ」

こ穂「輝夜？」

二人が輝夜と言う名前に反応した。

煌「二人ともどうしたの？」

こ穂「ああ！輝夜ちゃん」

え、何？こ穂ちゃんはわかるけど、何で穂乃果ちゃんも？って言うか凄く綺麗にシンクロしたよ二人流石幼なじみ。

輝「え？え？」

しかも輝夜は混乱してるし

こ穂「私のことわからない？」

輝「ああ！こ穂乃果さんに、穂乃果さん！」

海「あの、煌斗、私ついていけないのですが」

煌「安心して、僕もだから」

海「何も安心できないじゃないですか!」

そうだよ。うん、わかった。

何で輝夜と穂乃果ちゃんが知り合いなんだろう? まあそれよりも  
まず

煌「取り敢えず、玄関だからなかに入ろう?」

こ穂海輝「「あ、」」

あ、って気付いてなかったの?

煌「で、穂乃果ちゃんは輝夜と知り合いなの?」

穂「うん、妹の知り合いで家にもよく来てるんだ」

煌「輝夜、迷惑かけてない?」

穂「迷惑何て全然だよ、むしろいいこだよ!」

そうだよ、輝夜普段は普通に常識人だもん。何故か僕が絡むとあ  
れだけど

煌「じゃあそろそろご飯作るから適当にくつろいでいて」

それから約一時間

煌「完成したよ! 運ぶの手伝って」

こ「わかったよ」

ことちゃんは持てない分を持ってくれた。

煌「ありがとうね」

こ「ううん、全然大丈夫だよ」

机に並べて

穂「じゃあ煌斗君何か一言」

え、何か一言って言われても。まあ、頑張るか

煌「じゃあ、今日のライブは客観的に見ては失敗立ったけど、僕的  
には大成功だったからこれからこれからも頑張ろう。乾杯」

『乾杯』

それから、皆ご飯を食べ始めた。

煌「どうかな？」

作ったら食べたときの感想が欲しいのだ

穂「ん〜美味しい〜」

海「はい、美味しいです」

こ「美味しいよ、でもどうやったらこんなに美味しいの作れるんだろう？」

煌「小さい頃からやってたら自然とね」

海「それはすごいですね、そしたら輝夜も？」

煌「輝夜のは、うん、いろんな意味で凄いよ」

輝夜に料理させたらダメっ絶対っ！って言うことはないんだけど、不思議な味がするんだよね。

輝「お兄ちゃんひどいよ！確かに私はあれだけど、でも小さい頃からお兄ちゃんが美味しい料理作ってくれるんだもん、全然料理しないのも普通だよ！」

あれ〜？おかしくない確かに輝夜が小さい頃から料理作ってたよ？でもさあ料理すればいいじゃん。何でしないんだろう？

二、三十分後

『いちそうさまでした』

煌「じゃあ洗い物とか片付けをするから、またくつろいでいていいよ」

こ「あ、私も手伝うよ」

煌「そんなに量が多い訳ではないから一人でも大丈夫だよ」

こ「え、でも」

煌「それに、ごちゃん達はお客さんだし」

こ「で、でも・うん、わかったよ、お願いするね」

煌「それじゃあ片付けてくるね」

それにしても、ごちゃん以外は手伝おうとしてくれないよね？別に手伝ってくれなくてもいいけど、海未は言っつきそうなのよね。

その後僕は片付けをして、ライブについてなど色々話した。



もう8時半を過ぎていた。

煌「あ、もうこんな時間なんだね」

穂「え、本当だ!」

こ「お話が楽しくて時間を忘れちゃってたね」

皆は時間を忘れてたんだね。まあ僕も忘れてたけど。でもそろそろ帰らないとね

海「そろそろ、帰らないといけませんね」

こ「そうだね」

穂「穂乃果もまだまだ話していたかったけど、帰らないと怒られちゃうから」

煌「じゃあ、僕が送ってくよ、こんな暗い中で三人だけだったら、危ないかもしれないし」

海「そうですね、お願いしてもいいですか?」

煌「僕から言っただから大丈夫だよ」

穂「それじゃあ、帰ろう」

帰り道

何か、いつとかないといけないこと合ったような。あ、僕は話すことを思いだし三人に声をかけた

煌「三人とも、言ってなかったけど明日と明後日は練習を休みにしようと思うんだ。

ライブがあつて練習続きだったから少しは休まない」と

穂「じゃあさ、明日どこかに遊びにいかない?」

海「穂乃果、話を聞いていたのですか?休まないといけないといつてたではないですか」

穂「ね、いいよね、煌斗君」

煌「まあ、仕方ない、いいよ。でも、明後日は休んでね」

穂「明日楽しみだなあ」

こ「そうだね」

♪♪♪

今、僕の前で輝夜とことちゃんが話し合いをしている。何の話し合いかと言うとことちゃんの寝る場所だ。

ほとんどの人が意味がわからないだろう、これには訳がある。それは、

♪♪♪

僕は穂乃果ちゃん海未と送っていき、最後にことちゃんの家についてた。

こ「煌君、送ってくれてありがとう」

煌「大丈夫だよ。送らなくて何かあったら後悔するし」

こ「そうなんだね、でも、何か嬉しいな」

煌「嬉しい？」

どういう意味なんだろう？

こ「だって、私達のことを大切に思ってるってことだよね？」

煌「それは、当たり前だよ。それにことちゃんはやつとまた会えたんだからね」

三人が大切なのは当たり前だ、三人がいなかったら、僕は今もボツチではないけど、絵里先輩と希先輩以外は話す相手がいなかっただろうしね。

その時、ことちゃんの携帯から音があった。

こ「あ、ごめんね。お母さんからだ、なんだろう。え！」

煌「どうしたの、ことちゃん？」

煌「ことちゃん？」

携帯を見たあとことちゃんがフリーズした、まさか、新手のスタンド使い！

こ「煌君、ことり、明後日まで煌君の家に泊まることになっちゃった」

煌「は？」

いや、どういうこと？え！泊まるの？ことちゃんが？僕の家には？

煌「ど、どうして、そうなったの？」

こ「お母さんが煌君のお母さんとお父さんと一緒にちよつと、遠く

にいつて家を開けるから、その間ことりのことを煌君の家に止まらせるってことになったらしくて、もしかして、煌君、ことりが泊まるの嫌だった？」

ずつと、固まって話していかなかったので、ことちゃんが嫌だったんじゃないかど、聞いてきた。

煌「そんなことは全然ないよ、寧ろいつでももって感じだよ。でも、いきなりでちよつとびっくりしてさ」

こ「そ、そうなんだね、じゃあ、来たいときに、また行っていい？  
／／／／／

ことちゃんが顔を紅くして言った。

煌「用事がなければ、大丈夫だよ。じゃあ取り敢えず、ことちゃんが着替えとか、とつてきたら、いこうか」

こ「そうだね、じゃあちよつと待つててね」

それにしても、何でことちゃん顔紅くしていたんだろ？熱があるのかな？それと、ことちゃんどこで寝るのかな？まあ僕がソファで寝れば問題ないだろう。

こ「煌君、お待たせ」

煌「そんなに、待つてないよ。じゃあいこうか」

こ「うん」

♪♪♪

と言うわけで今に至る。

煌「ねえ、僕がソファで寝て、ことちゃんが僕のベッドで寝ればいいんじゃない？」

こ輝「それはダメ！」

こ「それだと、煌君が風邪引いちゃうよ？」

輝「それに、女子が男子のベッドで寝るのはねえ」

そうだよね、あ！じゃあ

煌「輝夜と、ことちゃんが一緒にベッドで寝るのは？」

輝「私のベッドそんなにでかくないよ」

そうなんだよね、でも・じゃあ

煌「じゃあ、ことちゃんが輝夜のベッド、輝夜が僕のベッド、僕が

ソファアで寝るのは？」

こ輝「それは違う」

輝「私的には、大丈夫だけど、お兄ちゃんが風邪引いちゃうよ」  
だよね、輝夜が自分のベッドあるのに、寝ないし、僕がソファアじゃダメらしいしそれと、輝夜は何が大丈夫なんだろうか？

こ「私と煌君が同じベッドじゃ駄目なの？」

煌「なにいつてるのですが、ことりさん？」

輝「そうだよ、ことりさんより、私の方がいいでしょ」

びつくりしすぎて、つい敬語になっちゃったよ。それと輝夜も何をいつての

こ「私は別に気にしないよ？煌君と一緒にでも」

輝「それはダメなんじゃないですか？だから、ことりさんは私のベッドで、私とお兄ちゃんがお兄ちゃんのベッドで寝るんです」

あれ？なんか知らない間に僕が二人のどっちかと一緒に寝ることになってるような？

そんなことん考えている間にも、ことちゃんと輝夜が言い合いになりかけていた。

煌「なら、二人でじゃんけんをして、勝った方が僕と寝るってこと  
でいい？」

どちらと寝るようになっても相手が寝たら出て、ソファアで寝れば  
いいから。

輝「まあそれなら」

こ「大丈夫だよ」

二人も了承したつてことで

煌「それじゃあ行くよ？」

輝こ『じゃんけんポン』

ことちゃんが出したのは、チョキ、輝夜が出したのは、パー。と言  
うことで勝ったのはことちゃん。

煌「じゃあ、勝ったのはことちゃんつてことでもう寝るよ」

こ輝「はーい（・はーい）」

二人で反応ちよつと違ったような気がしたけど気のせいかな？

まあどうでもいいか。

♪♪♪

寝る前に僕はあるひとに電話をしていた。

? 「もしもし、こんな時間にどうしたの?」

煌「ごめんね、ちよつとお願いがあつて」

♪♪♪

通話が終わり部屋に戻ると、ことちゃんがまだ起きていた。

煌「ことちゃん、まだ起きてたの?」

こ「何か中々寝られなくて」

煌「そうなんだ、でも明日早いと思うから寝ないとね」

こ「そうだね、それよりも煌君入らないの?」

そう言つてことちゃんはベッドの布団を上げた。

煌「やっぱり入らないとダメ?」

こ「うん!」

煌「でも」

すると、ことちゃんが起き上がり、胸元を握つた。

あ、これ来るな

こ「おねがーい」

煌「うっ」

入ろうかな。はっ! ダメダメさつきは早く寝ないといけなかったからああ言つたけどさすがに寝るのは

それとことちゃん効かなかつたことにびっくりしてるんだけど、やっぱりわかつてるよね、自分の可愛さ。

まあ、ことちゃん寝た後出ればいいか。

約一時間後

あんなこと言つた自分が憎い。今隣でことちゃんが可愛い寝息をたててる。じゃあ出ればいいじゃんって思うじゃん? でもさあ、後ろからおもいつきり抱きついてるんだよね。はあ、明日大丈夫かな?

## 嫌な再開

前回のテス神3つの出来事

- 一つ、ライブの打ち上げをし皆で遊びに行くことになった。
- 二つ、ことりが煌斗の家に泊まることになった。
- 三つ、煌斗が誰かに電話を掛けていた

結局、あのあと少ししかねられなかった何とか抜けようとしたが、ことちゃんが色々規制がかかりそうな声を出したりして僕は諦めた。だが諦めたからといって寝れるはずもなく朝まで来てしまった。そして、朝になったからといって寝れるはずもなく、料理等色々したくをしなくちゃいけない。取り敢えずことちゃんに起きてもらってベッドから出させてもらおう。

煌「ことちゃん、起きてことちゃん？」

こ「うーん？あとちよつと〜」

煌「まだ寝てていいから、ちよつと起きて」

こ「うーん、あれ？何で私煌君に抱きついてるの？／／／」

どうやら、抱きついていたのは無意識だったようだ。まあ故意でやっても嫌ではないけどびっくりするよね。て言うかまず、高校生男女が一つのしかもシングルベットで寝てるの問題だよね？

煌「取り敢えず、腕離してもらえる？」

こ「う、うん／／／」

ことちゃんに腕を離してもらってベッドを出た。

煌「あ、僕は朝食とか準備してくるけどことちゃんはまだ寝てていいからね」

こ「私も手伝うよ」

煌「大丈夫だよ。ことちゃんはお客さんなんだし」

こ「でも」

中々ことちゃんが引かなかったから少しからかうようにいつてみた。

煌「それにことちゃんまだちよつとだけ寝たかったんでしょ？」

こ「もしかして、何か私いつてた？／＼／＼／＼」

ことちゃん何かに対して恥ずかしがっていた。寝言が聞かれたと思ってるのかな？

煌「何か言つてたような気がするけど僕も眠かったからわからないかな」

こ「ならよかった」

聞かれたら恥ずかしいことでもいつてたのかな？まあ取り敢えず

煌「朝食作りにいくね」

こ「うん、わかったよ」

~~~~~

輝「私、今日友達の家遊びに行くけど、お兄ちゃん達もどこかにいくの？」

朝食を作り、ことちゃんと輝夜と一緒に食べていた時に輝夜が突然聞いてきた。

煌「どうした突然」

輝「なんとなく」

なんとなくなんだ。それはそれとして、今日遊びに行くけどどこにいくんだらう？

ま、その辺は穂乃果ちゃんが考えてきてくれるだろう。(丸投げ)多分、考えてないだらうけど

こ「私と煌君、穂乃果と海未ちゃんと今日は遊びに行くよ。でも、どこにいくんだらうね？煌君」

煌「僕も知らないよ、でも穂乃果ちゃんが考えてきてくれるんじゃない」

こ「そうかなあ」

ことちゃんは不安がつているが大丈夫だろう。もう時間だし準備していくか

~~~~~

待ち合わせ場所の駅にことちゃん二人で向かった。まだ、約束の時間の10分前だったから穂乃果ちゃんは来てないと思っていたけど、二人とも来ていて僕たちが最後だったようだ。

穂「あ！おーい」

海「ちよつと、穂乃果っ！急に叫ばないでください！」

穂「それを言うなら海未ちゃんだって叫んでるよ」

煌「まあまあ二人とも叫んでるよ注目されてるから」

穂海「あっ／＼／＼」

注目されてる事に気付き二人とも顔を紅くしていた。

煌「それで、どこに行くの？」

穂「え、どこ行くの？」

海「決めてないのですか!？」

こ「まあまあ、海未ちゃん取り敢えずいく場所考えよ？」

海「そうですね、でもどこ行きますか？」

こ「カラオケとかはどう？」

煌「それとも、ゲーセンとか？」

穂「どっちも行こう！だってこんなに時間があるんだよ」

こ「そうだね、穂乃果ちゃん」

煌「じゃあ、行こうか」

~~~~~

僕たちはカラオケに来ていた

穂「じゃあ誰から歌う？」

こ「じゃあ、私から」

ことちゃんからいくらしい、そして、気になることちゃんの得点は

88点だった

穂「おおくことりちゃん凄い！」

こ「そうかなあ」

海「ええ、凄いですよ、ことり。ね、煌斗」

煌「ああ、僕もそう思うよ」



こ「本当ありがとう！」

その後、穂乃果ちゃん、海未、僕と言う順番で歌っていき、デュオを歌ったりしていった。

因みに穂乃果ちゃんは89点、海未90点、僕は98点だった。

何でそんな得点とれたんだらう？まあいいか

~~~~~

穂「おおくもうちよつと」

こ「とれた！」

煌「はい、これが、こちゃんでごつちが穂乃果ちゃん、そしてこれが海未」

海「本当にいただいてもよいのですか？」

煌「皆のためにとったんだから」

海「そう言うことなら」

あつ因みに状況をいつておくと、カラオケを出した後、僕が提案したゲーセンに来ていた。

そこで、オレンジ、アツシユグレー、青のぬいぐるみがあった。

それを欲しそうにみていたため、とろうとすると、なんと3つ同時にとれたのだ

煌「次はどうする？」

穂「あ！あれやってみない!？」

穂乃果ちゃんが指差した方向にあったゲームはアポカリプスモードエクストラと言うダンスゲームだった。

煌「二人までできるらしいけど、誰からやる？」

こ「じゃあ、海未ちゃんと煌君やってみてよ！」

海「わ、私がですか!？」

こ「海未ちゃん。」

あ、これは来るぞ、絶対来るぞ、そして、墜ちるぞ絶対墜ちるぞ

こ「おねがぁい」

海「う、しょ、しょうがないですね。」

ほら堕ちた、多分今僕は悪い顔しているな

穂「煌斗君、悪い顔をしてるよどうしたの？」

やっぱり

煌「何でもないよ、取り敢えずやろう？」

海「そうですね」

僕たちの後にことちゃんと穂乃果ちゃんがやった。みんなの結果は

ことちゃんがB、穂乃果ちゃんがA、海未がA A、僕はS Sだった  
まあ教える立場としては皆よりも上じゃないとな

~~~~~

時間がたち、ゲーセンを出るときに事件が起こった。

煌「何か飲み物買ってくるけど何が良い？」

穂「私は何でも良いよ」

こ「私も」

海「私についていきますよ、一人じゃ持ちづらいでしょう？」

煌「そうだね、ありがとう」

穂「じゃあ先に外にでて待ってるね」

煌「わかったよ」

みんなの飲み物を買い、出た時にあることに気づいた。

煌「あれ？二人は」

海「いないですね、どうしたんでしょう？」

待つてると言った二人がいなく困惑していた僕たちの前を通った  
二人組が話していた話し声が聞こえたそれだけなら問題はないが、話  
していた内容があれだったそれは、女子高生と思われる二人組がナン  
パされており、路地裏につれてかれたという話らしい。

煌「海未、聞こえた？」

海「ええ」

煌「行くよ」

海「待つてください、場所がわかるのですか!？」

煌「多分あそこだと思いついてきてそれと110番する準備しておいて」

海「わ、分かりました」

目的地までしばらく走った

?「や、やめてください!」

声が聞こえ、近づくとそこには案の定二人の男性とことちゃんと穂乃果ちゃんがいた。

煌「ビンゴ、海未、連絡して」

海「分かりました、煌斗はどうするんですか?」

煌「僕はちよつと行ってくる。絶対ここで待っててね。じゃあ」

海「あ、ちよつと」

後ろで声が聞こえだが僕は急いだ

煌「ねえ、ちよつと良いかな?」

?「あ、なんだよ」

男性が振り向いた、僕はその男性に見覚えがあった、その男性は小泉さんたちの時に出会ったうちの二人だった

こ「煌君っ!」

煌「大丈夫だよ、すぐ終わるから」

男性A「なんだと、なめやがって、この前のかりも一緒にかいしてやる」

煌「良いよかかってきな」

そう言うとき男性は走りだし殴って来た、よけたがあえて避けなかった。

穂「煌斗君っ!」

煌「今殴ったね?ならこれからすることは全部正当防衛だよね?」

ここからはほぼ一方的だった、避けて足を引っ掻けたり、相手同士討ちしたり

煌「二人とも大丈夫?」

こ穂『煌君っ! (煌斗君っ!)』

煌「うわっ!」

二人の安否を確認すると、突然二人が抱きついてきた。

まあ、無理はない、普通の女子高生が知らない男性に路地裏に連れていかれたのだ、逆に平然としている方が異常だと思う。

こ「こ、怖かったよ」

煌「もう大丈夫だよ」

それからしばらくすると海未がお巡りさんを連れてきてくれた。

海「煌斗呼んできましたよ・よ・えー！」

そんなに信用なかったのかお巡りさんを連れてきた海未は驚いていた

お巡りさん「また、君だったのか、この前、見つけたりしても自分でいかに連絡してつていったはずなんだけどな」

「また」とはどういうことか気になつてる人もいるだろう。実は、こんなことは前回や、今回だけではなく何回もあるのだ、その度にお巡りさんが来てくれるんだが今回見たいに終わった後で来て、注意をしていくということがある。

煌「すみません、分かつてはいたんですが待つてる間に何かあると思うと思わず」

お巡りさん「そう言うことも分かるけどね。まあ今回は見逃してあげるよ、そうなるつてことはよほど大切な友達なんだね」

煌「そうですね、そうなんだと思います」

こ穂海『煌君（煌斗君（煌斗））／／／』

~~~~~

暗くなつてたので（暗くなつてなくてもだけど）皆を家まで送つていった。

煌「明日はUTXか何時だっけ？」

煌『夜遅くにごめんね、それで明日って何時に行けば良いかな？』

？『全然大丈夫だ

よ、私もまだ起きてたから』

？『それで、明日

だっけ？明日は、10時にUTXだよ』

煌『わかった、10時にUTXだね。また明日、お休み』

? 『また明日、お休

み』

~~~~~

穂乃果side

この気持ちは何かな？男の人から助けってもらってから煌斗君のことを考えると胸が暖かくなったり痛くなったり今まで感じたことがなかったこの気持ち。

煌斗君はテスト生として音乃木坂学院に来た男の子、席が近くで話したのがきつかけだった。

実は音乃木坂は廃校になりそうでそれを阻止するためにスクールアイドルを始めたの

煌斗君は生徒会が忙しそうだったけど歌と踊りの練習をしてくれたり、ファーストライブでお客さんが来なくて落ち込んでいた私達に声を掛けてくれたりもした。

まだこの気持ちはわからないけどこれからも一緒にいるから分かって行けたら良いな

~~~~~

ことりside

ことりには、好きな人がいます。それは煌君こと南本 煌斗君です。煌君は私が小さい頃、お母さんが煌君のお母さんに会いに行く時についていきそこで煌君と出会ったんです。あの頃のことりはとても内気で、知らない人と話すのが苦手でも男の人と話すなんてできませんでした。でも不思議と煌君とは話せました。

昨日は突然、煌君の家に泊まることになり、とてもドキドキしまし

た。しかも泊まるだけでなく煌君と一緒に寝ることになって嬉しかったです。

そして、今日は煌君と穂乃果ちゃん、海未ちゃんことりの四人で遊びにいきました。

カラオケに行つて皆でいっぱい歌ったり、ゲームセンターに行つて煌君が、皆にぬいぐるみをとつてくれたりダンスゲームをしたりしました。

その帰りに、穂乃果ちゃんと二人で煌君と海未ちゃんを待っている、男の人が「一緒に遊ばない？」と話しかけてきました。遊べないと断っていると突然腕を捕まれてつれていかれました、抵抗しましたが男の人の力には敵わなくもうだめだと思いました。でも来てくれたんです煌君が。

煌君は男の人からすぐに助けられました。

その時に気づいたので。やっぱりことりは煌君のことを好きなんだと。

多分、穂乃果ちゃんも気づいてないですが煌君のことを好きなんだと思います。

ライバルは強いけどことり頑張っちゃいます！

## 思わぬ出会い（前編）

前回のテス神3つの出来事

- 1つ、ゲームセンターでナンパしていた二人に出会った
- 2つ、ことりが煌斗への気持ちを再確認した
- 3つ、穂乃果のなかに新たな気持ちが芽生えた

煌斗side

僕は秋葉原に来ていた。何故かというところの前の電話に関係ある、電話は新しい練習メニユーを考えるためにある人に頼んだそのある人とは、僕の幼馴染みの夜月玲夢（よづきれむ）だ。玲夢はあのA—RISのマネージャーをしており、練習メニユー等も彼女が考えているらしく、今回は相談するために来ていた、一人スペシャルゲストを呼んどいたって行ったけどだれなんだろう。そして、予定は正午からなので時間がまだあるが何故来ているかというところ、僕はスクールアイドルの事をまだ詳しくないだから、スクールアイドル専門店なる所に来ていた。入口を見ただけでいかにスクールアイドルが人気かが分かる。まあ専門店あることが人気を表してるような物だけだ。

入口にいてもしょうがないから入るか

煌「へえく色々あるんだな」

中を色々見回っていると目立つ所に気になる物があった、それは『伝説のアイドル伝説』という名前でこれ本体が伝説になり略して伝説の伝説の伝説で伝伝伝というらしい

これはスクールアイドルではないかもしれないが凄いで取り敢えず買ってこようと思う。

そう思っていた時ある人を見つけた。

煌「ねえ、小泉さん？」

花「へ？み、南本さん何でここに!？」

煌「何でって言われても……小泉さんは何で？」

花「わ、私はA—RISの新曲のCDを買いに」

煌「A—RISってNo.1スクールアイドルだっけ？」

花「知らないんですか!? A—R I Sはですね〜〜だから凄いんです。あ／／すみません」

A—R I Sについて質問したところ、突然豹変して色々教えてくれた、そして我に帰った風に（実際に我に帰ったのかもしれない）顔を紅くし謝ってきた。

煌「別に謝らなくて良いのに……それに、僕はスクールアイドルの事をそこまで知らないから教えてくれるのは嬉しいな。もしかしてファン？」

花「それはもちろん! ……うう〜またやっちゃった／／／／」

煌「僕はいいと思うよ、好きなものに真っ直ぐなのは」

花「そ、そうですか? そう言えばライブ良かったです」

煌「それに関しては僕も感謝してるよ」

花「え? 何ですか?」

煌「あの時観客がいなくて心が折れかけていてね小泉さんが来てくれてなければダメだったかもね」

あの時は多分折れていたと思う、僕の言葉だけでは無理だったそのおかげで無力さを理解したんだけど

花「そうだったんですか」

煌「だからありがとう」

花「あ、私はここで」

煌「そうだね、じゃあまた、もしかしたら明日会うかもね」

花「そうですね、アイドル頑張ってくださいそれじゃあ」

そう言って小泉さんは行った別に僕はアイドルじゃないんだよね  
そう言えばA—R I Sの新曲って言ってたっけ? 買ってみるか

煌「お、あれかな?」

CDを見つけししかも最後の一つだったためラッキーと思い取ろうとしたその時だれかのが当たった

煌? 「あ、ごめんなさい、あー!」

煌「被ってしまいましたね、それとこれ」

? 「そうですね、あとCDは一枚持ってるので大丈夫ですよ」  
一枚持つてる? もしかして保存用というやつなのか? 凄いな



煌「え、あ、でも買おうとしてたんですよね？なら」

？「でも私も色々な人に聞いてほしいからどうぞ」

聞いて欲しい？と言うことだろうか？応援する仲間が増えて欲しいと言うことかな？

煌「わかりました、ありがとうございます」

？「その代わりって言ったらあれだけどこのあと少しお話ししない？」

煌「そういうことなら、でも、正午から予定があるので」

？「その事なら大丈夫よ」

煌「？取り敢えず買ってきますね」

煌「取り敢えずどこに行きます？」

？「その前に自己紹介しない？ほらお互いのことよく知らないでしょ」

煌「僕は南本煌斗、音乃木坂学院の二年生で、sって言うスクールアイドルのマネージャーをやっています」

ツ「次は私ね、私は綺羅ツバサUTX学園の三年生、三年生だからって敬語はいらないわ。それと、sのことは知ってるわよ」

え!?!綺羅ツバサって

煌「あ、A—R—うぐつ」

A—R—ISと叫びそうになったときに口を塞がれた

ツ「待って、叫んだらばれてしまうわ」

煌「すみません、それで、sを知ってるって言うのは？」

ツ「まあまあ話すつてことなんだからそこでねそれと敬語はいらな  
いって言ったでしょう」

煌「でも、わかり、わかったよ、それでどこに行くの？ここにいてもあれでしょ？」

ツ「あら、意外とすぐになれるのね、それと行く場所はあそこです」

いかしら」

そう言っ指指した方を見るとメイド喫茶があつた

煌「大丈夫だよ」

ツ「なら良かった、じゃあ行きましょ」

ツバサさんは伝説のメイドに会つてみたい的なことをいつていた  
伝説のメイドつてなんだろう

ツ「早速入りましょう」

メ「おかえりなさいませ、お嬢様、ご主人様……！」

聞いたことがあるような特徴的な声が聞こえてみるとそこには

煌「え？ことちゃん!？」

ツ「知り合い?」

こ「何でもございません、こちらへどうぞ」

~~~~~

昼時だったから適当に食べ物頼んだ。

それにしてもことちゃんが居たことはビックリした、しかも去り際に口パクで、後で聞かせてといつていつた。また、光の帯びていない目で見られると思うとゾツとする、まあ、そこはハイライトさんが仕事していることだけを願うとするか

ツ「これ美味しいわよ、食べてみる?」

煌「え?良いの」

ツ「ええ、はい、あーん」

煌「あーん・本当だ美味しいね。こつちも食べる」

ツ「いただきぐわ」

煌「はい、あーん」

ツ「あーん・美味しいわ」

心なしか周りの視線が凄いような気がするが気のせいだろう、もしかしたらツバサさんがばれた可能性があるけど、ツバサさんはNo.1スクールアイドルのリーダーのはずだ、それも今に始まったことじゃなく、前から。偏見かもしれないが変装には慣れているだろう。

ツ「それで、何でμsを知ってるか?よね」

煌「うん、ライブはしたけどそれは校外の人がいなかったし、動画は撮っていなかったから」

ツ「へえ、本当に知らないんだね、ネットに出てるわよ」

煌「そうなの？誰が・あ、」

ここで気づいた時間が正午に近づいてることに

ツ「どうしたの」

煌「ちよつとだけ待ってて、電話してくるから」

ツ「わかったわ」

僕は一度出て玲夢に電話を掛けた

---

ことりside

突然煌君がA―RISの綺羅ツバサさんと入ってきたと気づいたときは一瞬仕事を忘れてしまった。

何故、一緒にいるのか等色々聞きたいことがある、が仕事なのだだから伝わっているかわからないが口パクで「後で聞かせて」と言った

そのあと、仕事をしながら時々煌君達のことを見ていたらとても楽しそうな雰囲気だった、

すると突然煌君が出ていったそれから少ししてツバサさんがよんできた

こ「どうかしましたか？お嬢様」

ツ「あなた、煌斗君がマネージャーしているスクールアイドルなのよね？」

え!?何で知ってるの！待って、落ち着いて煌君だ、そうだよんさつきまで一緒にいたんだもん

こ「煌君から聞いたんですか、綺羅ツバサさん」

ツ「あら、きづいてたのね、煌斗君は私が名前言うまで気づかなかつたのよ」

こ「まあ、煌君ですから」

ツ「そう言えばライブ良かったわよ」  
こ「え!?!」

店長「ミナリン、どうしたの」  
こ「な、なんでもありません」

ライブを見たということにビックリして思わず大きな声が出ちやいました

ツ「その反応からしてやっぱり知らないのね、ネットに上がっていったわよ」

こ「ね、ネット!?!」

ツ「でも、まだ足りない」

足りない?何が?あまりここに居たら

こ「失礼します」

こ「とりがさるときに煌君が戻って来たけどまた他の人をつれていった

---

煌斗 s i d e

電話をして少し待っていた

玲「ごめん、待った?」

煌「大丈夫だよ、こつちが読んだんだし。そう言えばさスペシャルゲストってツバサさん?」

玲「あれ、言ってたっけ?」

煌「違うよ、たまたま会ってね」

玲「へえ、そうなんだそれで、どこに行くの?」

煌「まあついてきて」

~~~~~

メイド喫茶に入り、元々座っていた場所に戻った

玲「それにしても、煌斗がスクールアイドルのマナージャーしているなんてね」

煌「そうかな？頑張っている娘の事を手伝ってあげたいって思っただけなんだけどなあ」

玲「煌斗らしいね」

ツ「煌斗君って優しいのね」

煌「そうなのかな？」

玲「それで、今日はどうしたの？」

煌「練習メニユーを考えるんだけど初めてだから勝手がわからなくてね」

玲「そう言うことなら、でも良いの？ツバサ」

ツ「別にいいんじゃないの？メニユーは玲夢が考えてくれてるんだし」

玲「そう言うことらしいからどこがわからないの？」

それから、玲夢に作り方等々教えてもらい、ツバサさんはやる側としての考えを教えてもらい、練習メニユーが完成した。

煌「今日はありがとうね」

玲「大丈夫だよ」

ツ「またいつか会いましょ、あ、そう言えば連絡先交換してくれない？」

煌「はい、これでOKそれじゃあバイバイ」

そう言っ二人とは別れた、最後玲夢が練習サボったとかツバサさんが逃げたりあった

いや、ツバサさん練習サボっちゃダメでしょ

## 思わぬ出会い（後編）

前回のテス神3つの出来事

- 1つ、煌斗が綺羅ツバサに出会ったに会った
- 2つ、煌斗の幼馴染みの玲夢と練習メニユーを作った
- 3つ、ことりがメイド喫茶でメイドをしていた

煌斗side

ことちゃんがもう少しで仕事が終わるらしく待っていた

こ「待たせてごめんね煌君」

煌「大丈夫だよ、それで聞きたいことって」

そう言ったとたん、ことちゃんがあの怖い笑顔になった

こ「そうだよ、なんで綺羅ツバサさんといいたの？あーんしたりして、周りから見ると恋人だよ？付き合ってるの？しかもそのあとまた他の女ひとと来たでしょ」

煌「こ、ことちゃん？何か怖いよ。それとツバサさんはたまたま会ってね、玲夢は練習メニユーを考えるために呼んだんだよ。まあ玲夢は元々ツバサさんと呼ぶつもりだったらしいけど」

こ「そ、そうなの？ならその玲夢って人は？」

ことちゃんは怖い笑顔が消え何故か焦りが出ていた

煌「玲夢は僕の幼馴染みだけど」

こ「《smail／》幼馴染み私だけじゃないの《smail／／》」

店長「ミナリンちよつといい？」

こ「は、はい、何ですか」

突然、ことちゃんが店長に呼ばれ席を離れた  
ところでさつき何て言つたんだらう

~~~~~

煌「ことちゃん何で呼ばれたの？」

こ「それが、午後に来るはずのひとが、これなくなつて」

煌「それで、ことちゃんが？」

こ「う、うんごめんね」

煌「何で謝るのさ、僕に何かできる？」

そう言つた瞬間店長さんが飛んできた

店長さんはずっと見ていたのか？ 凄くタイミング良すぎるんだけ

ど

店長「良いこと聞いたわ、あなた手伝つてくれるのよね」

煌「え？ まあ、はい」

店長「じゃあついてきて」

そう言われ、つれてこられたのは

煌「ここは、更衣室？」

店長「これを着てみて」

煌「は、はい、わかりました」

こんな感じでもいいのかな？ 多分大丈夫だろう

煌「着替え終わりましたけど」

出ると、そこには店長さんとことちゃんが居た

こ「わあく凄く似合つてるよ煌君」

店長「これは想像以上だわ」

煌「そ、そうですか？ それで、僕は何をすれば？」

店長「それは勿論接客よ」

煌「接客ですね、接客・って接客！」

店長「何を驚いているの？」

店長さんはわからないという感じにいるいや、おかしいでしょここ  
メイド喫茶でしょ？ 偏見かもしれないがお客さんは男性がおおいと

おもう、それで男に会いたいと思うか？僕なら思わない、そして女性  
がいてもメイドに会いに来ている。

煌「ここはメイド喫茶ですよ？メイド以外が奉仕してもいいんで  
すか？」

店長「別に良いでしょ店長である私が言っているんだし」

あ、OKなんですネなんとなくそんな感じしてしてました

こ「うん、合うと思うよ煌君」

確かに店長だからいいのか？そして合うとはどういう意味なんだ  
？、ことちゃん。

そして一つだけわかったことがあるそれは店長さんは結構自由人  
と言うことだ周りの人が苦勞しそうだが、離れていかないのは店長  
さんの人柄なのだろう

店長「それと、これは執事であるときの君の名前ね。名札だから付  
けておいて。ほらご主人様達が待ってるぞ」

そう言われ出された、僕は名札を付け向かった。ちなみに名前は何  
故かシンだった

そして女性が入ってきた

煌「おかえりなさいませ、お嬢様」

~~~~~

煌「ああ〜疲れた」

奉仕もとい手伝いを終えて、休憩室に居た

普段多くの人でやっている分僕はやったことは疲れた

こ「あはは、大丈夫煌君？」

煌「結構疲れた、凄いね、ことちゃん今までもやって来たんでしょ  
？」

こ「ううん、そんなことないよ。いつもはもつと人がいるし」

煌「それでも凄いと思うんだけどな、そう言えばいつからやってた  
の？」

こ「それは、この前のライブで、衣装作っただでしょ？その材料を買  
いにアキバに来たの、その時にやってみないかって誘われて最初は



断つてただけどメイドが可愛くて、それと生地代が必要でしょ」

煌「へえ、結構最近なんだね。衣装が可愛くてつて所がことちゃんらしいけど、生地代なら出せるのに」

こ「そんなの悪いよ、衣装作りは私が好きでやってるのに」

等々ことちゃんと色んな話をしていると店長さんがやって来た

店長「二人ともお疲れ様、これは私からの差し入れ」

そう言い、店長さんは飲み物を渡してくれた

煌「え、そんな悪いですよ」

店長「子供がそんな遠慮しなくていいのよ」

煌「そう言うことなら、ありがとうございます」

店長「それで、君に頼みがあるのだけど」

煌「何ですか」

店長「店で働かない？」

煌こ「「ええー」」

店長さんの発言に静かに僕と店長さんの話を聞いていたことちゃんも声をあげ驚いた

こ「どどどどどどどういうことですか」

煌「落ち着いてことちゃん、店長さんそれはなんでですか？」

店長「実はね、今日のお客さんの中にあなたの事を聞いていたり誉めてたりしている人が多かったのよ」

こ「へえ、そうなんだ凄いや煌君」

煌「そう？ありがとことちゃん。それで店長さんその話受けますよ」

店長「そうか、ありがとまた後日ここに来てくれ、じゃあもう少ししたら帰った方がいいよ暗くなってるから」

外を見てみると確かに暗くなっていた、時間が経つのが早いなと思つた

こ「煌君、これから、一緒に頑張ろうね。」

それと今日のお礼ことりに何かできることある？」

煌「見返り求めてやってたわけじゃないよ？」

こ「そんなことは分かつてるよ、でもこういう時はもらった方が良

いの」

煌「わ、わかったよ、うーん……… なら伝説のメイドって呼ばれてる人のサインって貰えるかな」

するとことちゃんが顔を紅くした

煌「え！大丈夫？どうしたの？」

こ「じ、実はね、その伝説のメイドって言われてるのことりなんだ」

煌「そうなんだ、じゃあことちゃんのサイン貰えるかな」

こ「これで良いのかな？」

煌「ありがとう、ことちゃん。そろそろ帰ったほうが良いかもね、送っていくよ」

こ「ありがとう煌君」

~~~~~

こ「ここまで送ってくれてありがとう煌君」

煌「また明日学校でね、お休み」

こ「あ、ちよつと待って」

煌「ん？どうしたの？」

こ「働いていることはシーしててね」

煌「わかつたよ、僕とことちゃんの秘密だね」

こ「秘密・うん秘密だね、また明日、お休み」

ことちゃんが家に入るのを確認してから帰った、今日は色々なことがあった、練習メニューを作るために、玲夢と話す予定がA―R I Sのツバサさんとあったり、メイド喫茶でことちゃんにあったりバイト先が決まったり、あ、そう言えば貰ったことちゃんのサインどうしよう？部屋にでも飾っておくか

## 2章新メンバー加入 出会いを先取り

前回までのテスト神

二年生になったある日煌斗は理事長室に呼ばれたそこで音乃木坂学院が廃校になることを知った、それで煌斗はテスト生として行く事になった。

そこで出会った穂乃果達と廃校を阻止するためにμ'sという名のスクールアイドルを始めたそして行ったファーストライブは観客は6人という敗北からのスタートだった

煌斗 side

煌「ヤバイヤバイヤバイまじでヤバイ」

今とても焦っていた昨日のあと持ち帰っていた生徒会の仕事をし  
ていると寝るのが遅くなっていて寝坊してしまった

煌「ハアハアハアみ、皆ハアハアご、ごめん遅れた」

海「遅いですよ、煌斗っ！」

煌「ごめん寝坊してしまっって」

こ「煌君が？」

穂「珍しいね」

海「それよりも、煌斗が新しい練習メニューを考えて来るっていつ  
てましたよね」

煌「そ、そうだこれだよ」

穂「あんまりきつくはないんだね」

こ「そうだねえ」

海「ですが量が多くなってるものや新しく入っているもの無くなっ  
ているものがありますね」

煌「そうだよ、見てて増やした方がいいと思う所や、足りないと思  
う所を足してみただけどう？」

ファーストライブを見ていると三人とも一曲で息があがっていた廃校を阻止するためにはA―R―I―Sを超えるといかなくてもそれなりに人気にならないといけない、その為にはライブしなければいけないし、そのライブも一曲だけじゃなく何曲もしなければいけないそのためのメニューを玲夢と考えていた

穂「うん、いいと思うよ」

こ「私も」

海「私もそう思います、よく考えられていますね」

煌「そうかな、ありがとう」

でも考えてくれたの玲夢だからなあ

煌「そろそろ始めないと」

こ「そうだね、行こう」

穂海「うん（はい）」

穂乃果ちゃん達は階段ダツシユに向かった。

飲み物やタオルなどを準備をしていると希先輩が近づいてきた

希「皆、頑張つとるなあ」

煌「あ、希先輩おはようございます」

希「おはようさん」

煌「そう言えば希先輩ライブの映像をあげた人知りませんか？」

希「映像？何の事や？」

希先輩でもないのか、見ていた観客は小泉さん達だけだったし、撮っている様子はなかったから希先輩かと思っていたが違ったのか

希「どうかしたん？」

煌「いや、なんでもありませんよ」

希「そうなん？まあうちもういかんとしかられてしまうからいくな、それと煌斗君今日のお昼休みにお弁当持って生徒会室に来てな」

煌「は、はい分かりました」

希「じゃあまたお昼な」

煌「はい、また後で」

希先輩が行き練習を見ていた

煌「あと一周だよ」

穂「ハアハアわ、わかった」

こ「う、うん」

ことちゃん、穂乃果ちゃんは最初に比べると体力がついてきたかな？海未ははじめから体力があったけどもつついてきたな

煌「お疲れ、これスポーツドリンクとタオル」

海「ありがとうございます」

煌「またタイムがはやくなったね」

海「そうですか？練習の成果が出てるんですね」

海未と話していると穂乃果ちゃんのことちゃんが階段ダッシュを終わらせていた

煌「二人ともお疲れ、これスポーツドリンクとタオル」

こ「あ、ありがとう」

穂「つ、疲れた」

煌「二人ともタイムがはやくなってるし体力もついてきてると思うよ」

穂「え！本当！」

煌「うん、今なら2曲位なら続けて出きると思うよ」

穂「まだ2曲かあ」

こ「まあまあ穂乃果ちゃんまだまだこれからだよ」

海「そうですよ、これから頑張れば良いんですよ穂乃果」

穂「うん！そうだよね！」

煌「そろそろ、学校いく準備をしないと」

海「そうですね」

着替えは希先輩が神社の更衣室を貸してくれた

海「穂乃果寝たらダメですよ」

穂「ええ」

ええ〜って普通ダメだよ

こ「穂乃果ちゃんって朝練は寝坊をしないよね」

穂「だから、眠たいんだよね」

煌「意味ないじゃん」

~~~~~

昼休みになつたいつものは皆と食べているが今日は生徒会室に向かわないといけない

こ「煌君一緒に食べよう?」

煌「ごめんね、生徒会室に行かないと」

こ「え、そうなんだ」

すると、ことちゃんが見るからに落ち込んでいた

煌「多分、明日は一緒に食べれると思うよ」

こ「本当?」

すると、ことちゃんは明るくなっていた

煌「ごめんいくね」

煌「失礼します」

絵「あら、煌斗君どうしたの?」

中に入ると希先輩はおらず、絵里先輩しか居なかった

煌「希先輩は?」

絵「希?希は来てないわよ」

希先輩はまだ来てないのか取り敢えず待っているか

煌「絵里先輩これ確認してもらえますか?」

今確認してもらっているのは昨日終わらせたものだ

絵「問題ないわ」

煌「何か手伝う事つてありますか?」

絵「今は特に無いわ、ありがとう」

煌「そうですか、絵里先輩も無理せず休憩等を挟んで下さいね」

絵「分かつてるわよ」

本当かなあ絵里先輩は多分倒れるまでつて事はないかもしれないけど無理はすると思うからな

希「お、煌斗君もうきとつたん待たせてごめんな」

煌「いえ、大丈夫ですよ」

希「じゃあ煌斗君いこうか?」

煌「分かりました、じゃあ絵里先輩さようなら」

希「エリチまたあとでな」

絵「ええ」

そう言えば朝に来いと言われて来たけどどこに行くかは希先輩に聞いてなかったな

煌「希先輩何処に向かっているんですか」

希「内緒や、ちゃんとしてきてな」

煌「？まあ分かりました」

希「ここや」

希先輩に着いていきつれてこられた場所は

煌「ここはアイドル研究部？」

へえ、そんな部活があつたんだ、ん？なら入った方が僕達的にいいんじゃない？今はいいか

希「入るで、にこつちおる？」

に「何よ希」

希「にこつちが一人寂しくお昼を食べてると思うてきたんよ」

に「余計なお世話よ」

煌「失礼します」

中に入ると中学生や、小学生にも見えるが確実に三年生の人がいる。何故わかつたかというトリボンが緑色だったからだけどこの人どこかで見たことがあるような？どこだっけ？

に「いつもいつも希は……ってあんただれよ」

煌「え、僕ですか？僕は希先輩つれてこられた生徒会所属の二年生です」

に「へえ生徒会のじゃなくてあんたの名前を聞いているのよ」

煌「あ、南本煌斗ですよろしくお願ひしますにこつち？先輩」

に「にこつちって呼ぶな！」

希「そう言ったてなあ煌斗君にこっちの名前を知らないんやで」

煌「そうですよにこっち先輩」

に「だからにこっちって呼ぶな……にこよ」

希先輩は呼んでいるのににこっちって呼ばれるのが嫌なのかフルネームは教えずに名前だけを教えてくれた

希「うちは行くから二人で仲良くな」

煌に「「え？（は？）」」

え、今なんていった？うちは行くから？二人で？……え！まじで!?いきなり出会って数分の先輩二人つきり!?

に「何言ってるのよ希!」

煌「そうですよ希先輩」

希「大丈夫や、ほなな」

希先輩は行ってしまった

煌「大丈夫ってハア何を根拠に」

こ「あんたも大変ね」

煌「分かってくれますか?」

く数分経過く

最初こそ話が続いていたが段々話が続かなくなった

煌「にこ先輩ってアイドルって言うかスクールアイドルが好きなんですか?」

何故そう思ったかというと周りを見てみるとアイドルグッズが沢山あった、そのなかにミナリンスキー（ことちゃん）のサインもあったからだ

に「そうよ、別にスクールアイドルだけって訳じゃないけど、あんたも、sのマネージャーしてるんでしょ」

煌「知っているんですか?」

に「あの子達に伝えておいてアイドルを汚しているって」

煌「そうですか、そう言えばあのサインって」

に「あんたも知ってるの?そうよ伝説のメイドって言われてるミナリンスキーのサインよまあ私もネットで買ったから本人にあったことは無いけど」



やっぱりことちゃん伝説のメイドって言われてたんだ、でもネットで買ったってことちゃんがばれなくてホッとしたような売られていて悲しいような

煌「そうなんですかってにこ先輩時間ですよ」

に「え！本当じゃない」

煌「あ、にこ先輩」

に「何よ」

煌「煌斗って呼んでください明日も来ますんでじゃあ」

に「え？は？こ、こなくていいわよ」

最後にこ先輩が何か言っていたが気にしない。それにしてもやっぱりああ思う人も居るんだな。もっと頑張らなきゃな

あ、思い出したライブに来てくれた小学生のような中学生のような人だ

「誰が中学生よ！」

今脳内になにこ先輩の声が聞こえたようなまあ気のせいだろう

さあ午後の授業をしてから練習を頑張ろう

この後、女神達との物語が進む事を僕はまだ知らなかった

## 新たな情報と少しの弱音

前回のテスト神

二年生になったある日煌斗は理事長室に呼ばれたそこで音乃木坂学院が廃校になることを知った、それで煌斗はテスト生として行く事になった。

そんな煌斗は朝練の途中で希に昼に生徒会室に来てと言われ向かった。

すると、行く先も告げられないまま希に連れられた先はアイドル研究部なる場所だった。

そこで出会ったにこと煌斗は仲良くなった…？

煌斗がにこと出会う少し前

花陽side

### 1年生教室

花「どうしよう…」

花陽は教科書やノートの下に置いていた、sのメンバー募集の紙を見てなやんでいた。

先生「小泉さん読んでください」

花「はい、えつと…Hegaveme some advice」

先生「もつと大きな声で」

花「う…はいI was deeply moved by the」

先生「はいそこまで続き佐藤読んで」

やっぱり私じゃ無理だよ

花陽は自分に自身を持ってずにいた。

~~~~~

〜アルパカ小屋前〜

こ「可愛い♪」

穂「ことりちゃん最近よくここ来るよね」

ことり「ちゃんは最近暇さえあればアルパカに会いに来ている

こ「だって可愛いんだもん」

海「そうですか?」

煌「可愛いとは思うけど目的忘れてない?」

海「そうですよ、あと二人探さないといけないのですよ」

さつきは暇さえあればと言ったが今は特に暇だったと言うわけで

はないあと二人見つけないと部活として認められない

こ「あとちよつと」

すつかり夢中だな。でもたしかにこのふさふさの毛には抱きついてみたいかも

穂「可愛い：かな?」

その一言で茶色のアルパカが少し怒ったようになって驚いた。

するとことちゃんが振り返ると

こ「可愛いよ〜ひゃっ」

と言ったがその瞬間白アルパカに舐められてしまい、驚いて後ろに倒れそうになった

煌「ことりちゃん大丈夫!?!」

こ「あ、ありがとう煌君」

海「どうすれば：はっ?!?ここは弓で：」

穂「ダメだよ!」

穂乃果ちゃんが珍しくツッコミしている。馬鹿にしてるって?そんなことないない。

すると見覚えがあるの女の子がやってきた。

ん?あれ：この子たしか

花「よしよし、大丈夫だからね〜」

やってきた女の子が撫でてからアルパカの様子が落ち着いた。飼育委員かなんかだろうな：

穂「おおくアルパカ使い!」

煌「えっ、アルパカ使い?飼育委員じゃないの?」

花「はい、私飼育委員なので：」

煌「だよね、小泉さん」

穂「ライブに駆けつけてきてくれた小泉花陽ちゃん！」

穂「ねえあなた！スクールアイドルやってみない？」

煌「いやいきなりすぎだから！」

こ「煌君の言う通り穂乃果ちゃんいきなりすぎ…」

ことちゃんの声が届いていないのか穂乃果ちゃんは勧誘を続ける

穂「君は輝いてる！大丈夫！悪いようにはしないよ」

何だろう？これってもはや……

海「悪徳勧誘になってますね…」

煌「だよね」

花「あの……西木野さんが……」

真姫ちゃんか……真姫ちゃんはなあ

穂「ごめん、もう一回いい？」

僕は聞こえたがどうやら穂乃果ちゃんは聞こえなかったらしい

や、どうやら後ろの二人にも聞こえなかったらしい

花「西木野さんがいいと思います…西木野…真姫ちゃん」

穂「だよねだよね！あの子すつごく歌上手だもんね！」

海「そんなに上手いなら声をかければ…」

まあ普通はそう思うよね。でも…

煌「もう声かけたんだけどね、絶対嫌だつてさ」

花「そうでしたか…ごめんなさい余計なことを言つて」

煌「そんなことはないよ、ありがとうね小泉さん」

それから少し話していると…

凜「かくよちーん！早くしないと授業始まるよ」

花「今行くよ、それじゃあ失礼します」

星空さんが小泉さん呼びに来て一緒に授業に向かった。

僕達も授業のため教室に向かった。

～放課後～

僕は生徒会室向かっていた、何故向かっているかというと実は朝に

出し忘れたものがあつた。しかも提出日が今日なのだ

煌「失礼します、あれ？」

生徒会室は開いてたのだが中には絵里先輩も希先輩も居なかつた、それどころか誰も居なかつた。

中に大切な資料等も保管されているから開けっぱなしはよくないと思うけどなそれにしても何処にいったんだ？理事長室かな？行つてみるか

↳理事長室前々

コンコン

煌「二年の南本煌斗です」

理「どうぞ」

煌「失礼します」

理「久しぶりね煌斗君」

煌「久しぶりですね、理事長」

理「そんなにかしこまらなくても良いのよ？それで今日はどうしたの？」

煌「あの絵里先輩に用事があつたのですが生徒会室に居なかつたのでここに来ているのかな？と思ひまして」

理「そうなの、綾瀬さんは今日は来てないわね」

今日は？と言うことはいつもは来ているのかな？まあ今は置いていて他を探るか

煌「そうでしたか、教えていただきありがとうございます。それでは失礼します」

そう言い理事長室を出ようとするとドアがノックされた

絵「三年の綾瀬です」

希「同じく東條です」

理「入って」

ちようど良いところに来たな、理事長に用事があるようだから（無かつたらこないと思うけど）それが終わってから渡すか

絵希「失礼します」

希「煌斗君もきとったんやな（小声）」

煌「はい、絵里先輩に用事があつたので生徒会室にいくと居なかつたので（小声）」

希「そうやったんや（小声）」

小声で希先輩と話していると絵里先輩が理事長に近づいた

理「……」

絵「生徒は全く集まりませんでした。スクールアイドルの活動は音ノ木坂学院にとってマイナスだと思います」

やっぱり絵里先輩はそう思っているのか

理「学校の事情で、生徒の活動を制限するのは」

絵「でしたら！学院存続のために、生徒会も独自の活動させて下さい！」

理「それは駄目よ」

絵「何故です！」

絵里先輩は気づいてないけど多分あれだからだろうな

理「それに、全然人気が無いわけではないようですよ」スツ

そういうと理事長はパソコンを向ける

絵「！」

希「この前のライブの……誰かが撮ってたんやな」ジツ

そう言い希先輩は絵里先輩を見た

あの動画をあげたのは絵里先輩だったのか？

絵「っ失礼しました」

煌「あ、待って、し、失礼しました」

希「失礼しました」

~~~~~

煌「絵里先輩急に行かないで下さいよ」

絵「ねえ、煌斗君」

煌「何ですか？」

絵「何で、私じゃダメなの？何で君たちなら良いの？ねえどうしてなの？」

煌「え、えっと」

絵「ごめんなさい、この事は忘れてちようだい」

煌「分かりました」

絵「それで私に用事があるんでしょ？」

煌「は、はい、あのこれをさつき渡し忘れていて」

絵「ちゃんと受け取ったわ」

煌「それでは失礼します」

「そう言っ僕は逃げるようにあの場から離れてしまった  
あの時僕は何を言えば良かったのかな？」

## 悩める女神

前回のテスト神

二年生になったある日煌斗は理事長室に呼ばれたそこで音乃木坂学院が廃校になることを知った、それで煌斗はテスト生として行く事になった。

花陽はスクールアイドルをやるのを自分の引っ込み思案な性格などで自分には無理だと諦めていた、そして昼休みにアルパカ小屋で穂乃果に悪徳勧誘のような勧誘を受けた。

煌斗は放課後に理事長室で絵里が廃校の対抗手段を出しては却下され手いることと、動画をあげたのは絵里だということを知る、その後絵里は煌斗に少しだけ弱音を吐いただが、そのときに何も言えず煌斗は悩んでいた

花陽 side

〜1年生教室〜

凜「かーよちん！決まった？部活？今日まで決めるって昨日言ってたよ？」

花「えっ・・・そ、そうだった・・・明日決めようかな・・・」

放課後に凜ちゃんから部活動を何にするのかを聞かれたが決めてなく先伸ばしにしようとした

凜「そろそろ決めないと、皆部活始めてるよ〜」

花「う、うん・・・え、えっと・・・凜ちゃんはどこ入るの？」

もしかしたら、凜ちゃんと一緒なら出来るかも・・・

凜「凜は陸上部かな〜♪」

花「陸上・・・かあ・・・」

凜ちゃんは中学生の時から陸上をしていて足も速かったから、でも陸上部じゃあ私は無理だよ

凜「あっ！もしかして・・・」



凜「スクールアイドルに入ろうと思つてたり〜?」

花「ええ!そんなこと・・・ない・・・」スリスリ

凜「ふーん。やつぱりそうだったんだね。」

花「そ、そんなこと」

凜「駄目だよかよちん、嘘つく時必ず指合わせるからすぐ分かつちやうよく」

え!そんな、私も気づいてなかったのに・・・

凜「一緒に行つてあげるから、先輩達の所に行こつ!」グイ

凜が花陽の腕を引っ張る

花「ええ!ち、違うの!わ、私じゃ・・・アイドルなんて・・・」

凜「かよちんそんなに可愛いんだよ?人気でるよく」グイ

再び引っ張る

花「で、でも待つて!待つて!」

それを足で踏ん張る

凜「?」

花「あのね、わがまま言つてもいい?」

凜「しようがないな。何?」

花「もしね・・・私が・・・ア、アイドルやるつて言つたら・・・

一緒にやつてくれる?」

凜「凜が?」

花「うん・・・」

凜「無理無理無理!凜はアイドルなんて似合わないよ!女の子ぽくないし、髪だつてこんなに短いし」

花「そんなこと・・・」

凜ちゃんは昔あつたあることを気にして自分は女の子ぽくないつて思つているんです。そんなことないのに・・・

凜「凜にアイドルなんて、絶対無理だよ・・・」

花「凜ちゃん・・・」

数分後

〜廊下〜

花「どうしよう・・・」

そう言つて教室を出る

花「・・・西木野さん？」

そこには、プリントを見ている真姫がいた花陽は教室に戻り、覗くようにして真姫を見る

真「・・・」タツタツタ

プリントを持ち、真姫がいなくなる

花「今の・・・」タツタツタ

真姫がいた場所に向かう

花「ん？これ・・・」

花陽が拾つたのは、真姫の生徒手帳だった。

煌「小泉さん？」

花「え？み、南本さん!？」

煌斗side

僕はどう答えれば良かったのかな？絵里先輩は僕の事を頼つてくれたのに気を使わせて・・・ハア取り敢えず練習行かないとな、あ、あれつて

煌「小泉さん？」

花「え？み、南本さん!？」

煌「そ、そうだけど」

やつぱり僕つて影が薄いのかな？ここに来てから何回も近くにいることを気づかれてなかったし

煌「ここで何してたの？」

「あ、こ、これが落ちていて」

煌「これは真姫ちゃんの」

小泉さんが持っていたのは真姫ちゃんの生徒手帳だった

花「はい、そうなんで・・・え？西木野さんの事を知っているんですか」

煌「ちよつと用事があつて家に行ったことがあつてね」

花「そうなんですか、あの、もしよかったらこれを届けてくれませんか？」

小泉さんが僕に届けて欲しいといつてきた。それでも良いけど

煌「小泉さんが渡しに行かない？」

花「わ、私ですか？」

煌「そう、拾ったのは小泉さんだし、届けて欲しいなって、ね？」

花「そう言うことなら、分かりました」

煌「なら行こうか」

~~~~~

小泉さんと真姫ちゃんの家の前についた。

実はさつき言った理由の他に真姫ちゃんの交友関係を広げて欲しいというものがあつた

それにしても本当に広いな、ほら小泉さんも

花「ほ．．．ほえええ．．．」

煌「まあ初見ではびっくりするよね、あ、インターホン押すね？」

ピンポーン

? 『はい?』

花「あ!あの、真姫さんと同じクラスの．．．小泉．．．です．．．」

煌「南本です」

? 「あ、煌斗君、開いているから入って良いわよ」

煌「はい、分かりました」

インターホンの通話が切れた音がした

花「あの、今のって」

煌「ん? 愛菜さんの事? あの人は真姫ちゃんのお母さんだよ」

花「そ、そうなんですか」

曲を作るために真姫ちゃんの家に来たときに何故か気に入られた

煌「開いているって言っていたから入ろう」

中に入ると愛菜さんがいて、リビングに案内された

愛「ちよつと待ってて、病院の方に顔出してる場所だから」

花「病院?」

愛「ああ、家は病院を経営していて、あの子が継ぐ事になってるの」  
花「そう．．．なんですか．．．」

小泉さんが何か難しい顔をしていた

煌「小泉さんどうしたの？」

花「……へ？」

煌「難しい顔してたよ」

花「何でも、ないです」

愛「それにしても良かったわ！高校に入ってから煌斗君以外一人遊  
びに来ないから、ちよつと心配してて」

愛菜さんがそう話していると扉が開く音がした。

多分真姫ちゃんが帰ってきたんだろう

真「ただいまー、誰か来てるの？」

愛「ふふっ」

真姫ちゃんが部屋見て驚いた顔をしていた

花「こ、こんにちは……」

愛「お茶入れて来るわね♪」

煌「あ、ありがとうございます」

そういうと、愛菜さんはその部屋から離れる

真「どうして、煌斗先輩に小泉さん・あなたが」

花「ごめんなさい、急に……」

何で謝るのさ

煌「何で謝るのさ」

あ、つい出てしまった

真「何の用？」

そう言いながら真姫ちゃんが椅子に座る

煌「落とし物を届けに来たんだ」

真「落とし物？」

花「これ、落ちてたから……」

小泉さんが真姫ちゃんに落とし物の手帳を渡す

花「西木野さんの……だよね？」

真「な、何であなたが？」

花「ごめんなさい……」

また謝ってるよ小泉さん

真「何で謝るのよ・・・あ、ありがとう・・・」  
珍しい素直な真姫ちゃん

真「ちよつと煌斗先輩失礼なこと考えてませんか？」ジト

煌「全然、うん、全然」ダラダラ

何で読めるの？怖いよ

すると小泉さんが話を切り出した

花「μ、sのポスター見てたよね？」

小泉さんの言葉に真姫ちゃんが凄く反応した

真「私が!?!知らないわ!人違いじゃないの？」

煌「でも手帳はポスターの下に落ちてたよ？」

真「ち、違うの!違s」ゴン

勢い良く立ち上がり足を机にぶつける

真「っ!痛っ・・・わあっ!」ガタガタン

バランスを崩し、椅子ごと派手に倒れる

何か見え・・・

花「先輩?」ニコ

煌「見えない見えない」

小泉さんからことちゃんのようなあの笑顔の気を感じた

煌「もう、急に立つから、大丈夫？」

真「へ、平気よ!全く、変なこと言うから!」

花「ふふっ」クスクス

するとこの様子を見ていた小泉さんが笑いだした

真「笑わない!」

〜数分後〜

真「私がスクールアイドルに？」

真「うん、私、放課後いつも音楽室の近くに行ってたの・・・西木

野さんの歌が聞きたくて・・・」

へえいたんだあの時、それとも最近行けてなかった時に来たのか

な？

「私の?」キョトン

「うん。ずっと聞いていたくらい好きで・・・だから・・・私ね、大

学は医学部って決まってるの」そうなんだ・・・」

小泉さんが話をしている途中で真姫ちゃんが止めた

真「ふう・・・だから、私の音楽はもう終わってるってわけ」

そう言った真姫ちゃんの顔は悲しそうな顔をしていた。だからなのか分からないが思わず声が出た。

煌「本当はしたいんじゃないの音楽？」

真「え？そんなわけないでしょ何言ってるのよ」

煌「だったらどうしてそんな悲しそうな顔をしているの？」

真「っ！ナニソレイミワカンナイ」

真姫ちゃんは興味ない風に髪をいじっていたが分かりやすい

煌「医学部に入るための勉強が大変なのは理解している」

真「分かるんでしょなら」

煌「でも人生で一度っきりの高校生活だ、自分の好きなこととしても  
ばちは当たらないと思うよ」

煌「それに、真姫ちゃんなら両立出来ると思うしね」

真「何よそれ」

この僕の言葉に意味があったのか分からない。が、少なくとも真姫ちゃん顔には悲しさはなかった。

真「・・・それよりあなた、アイドル、やりたいんでしょ？」

花「え？」

真「この前のライブの時、夢中に見てたじゃない」

花「え？西木野さんもいたんだ」

真「あ！いや！私はたまたま通りかかっただけだけど、やりたいならやればいいじゃない。そしたら、少しは応援してあげるから・・・」

たまたま通りかかるような場所に講堂は無いのに素直じゃないな

花「・・・！ありがとう・・・！」ニコッ

く帰り道く

あの後まだ明るいが女の子を一人で帰すのはと思い送ることに  
なった

花「色々あるんだな・・・皆・・・」

煌「さっきの話、小泉さんもだからね」

花「え？どういうことですか？」

煌「アイドルとか好きなんでしょ？小泉さん、なりたくてもなれない人もいるし、やらなくて後悔するよりやって後悔した方が良いからね」

花「そう…ですよね…ん？」

すると小泉さんが何かを発見したそれは和菓子店だった

煌「お母さんとかにお土産買っていく？」

花「はい」

店の戸を開け出てきたのは

穂「いらっしやいませー！」

穂乃果ちゃんだった

### 三人の女神

前回のテスト神

二年生になったある日煌斗は理事長室に呼ばれたそこで音乃木坂学院が廃校になることを知った、それで煌斗はテスト生として行く事になった。

そんな煌斗は生徒会の後、花陽と出会い真姫が落とした生徒手帳を拾った

真姫に届けるために花陽と一緒に真姫の家へ向かってそこで、真姫の音楽の道は終わってるという言葉聞いた。

帰り道、和菓子屋によった。

煌斗side

花「ご、ごめんなさい……」

煌「僕もごめん……」

穂「ううん、こつちこそごめん。でも、海未ちゃんがポーズの練習してたなんてw」

海「ほ、穂乃果が店番でいなくなるからです!」

煌「いや、それは無理があるような」

海「煌斗?」ギロツ

うわっにらんできたよ怖っ!

花「あの……」

静かに僕らの会話を観ていた小泉さんが口を開いたときと同時に

こ「おじやましませーす!」

ことちゃんも入ってきた

こ花「「あっ」」

ことちゃんと小泉さんの目が合う

花「お、おじやましてませ……」

こ「え!もしかして本当にアイドルに!」

小泉さんがアイドルになったと勘違いしたようだ

穂「ううん、たまたま煌斗君と一緒にお店に来たから、ご馳走しよ  
うかと思って、穂むら名物『穂むらまんじゅう』、略して『ほむまん』



！美味しいよ」

穂乃果ちゃんその説明じやあまた…

こ「へえー煌君生徒会って言って小泉さんとデートしてたんだー」  
コワイエガオ

花「デ、デート!?／＼／」

何か小泉さんに飛び火してるし

煌「ことちゃんそんなんじゃないって、たまたま会って落とし物を届けに行っただけだって」

こ「まあいいや、あ、穂乃果ちゃん、パソコン持ってきたよ」

いいんだ、てかパソコン？

穂「ありがとう！」

穂「肝心な時に限って壊れちゃんだ」

穂乃果ちゃんがパソコンを置こうとすると同時に小泉さんが机の上のお菓子を片付ける

穂「あ、ごめん」

花「いえ・・・」

海「それで、ありましたか？動画は？」

ことちゃんがパソコンを開いて操作した

こ「まだ、確かめてないけど、多分ここに」タンタン

穂「あつたあ！」

海「本当ですか！」

煌「ん？この動画」

花「・・・」

こ「誰が撮ってくれたのかしら？」

海「凄い再生数ですね」

穂「こんなに見て貰えたんだ」キラキラ

煌「短時間にこんだけ・・・」

花「・・・」ソローリ

小泉さんが隅から覗いていた

穂「あ、ごめん花陽ちゃん。そこからだと見辛くない？」

花「・・・」ジツ

穂乃果ちゃんが話しかけたが動画に集中していて聞こえてなかった

煌「ねえ、小泉さん凄く集中してみているね？」

穂海「こ」「うん」「」

煌「小泉さん」

花「は、はい！」

穂「スクールアイドル、本気でやってみない？」

花「え！でも、私、向いてないですから・・・」

海「私だって、人前に立つのは苦手です。向いているとは思えませんが」

こ「あはは、私だって、歌を忘れる時もあるし、運動も苦手なんだ」

穂「私はすっごいおつちよこちよいだよ！」

自信もって言うことじゃないよしかも二人とジャンルが違う気がする・・・

こ穂海「」「・・・」「」

一人一人苦手なことを言ってから僕にも言えみたいな目でみてきた。

煌「え、えっと前も言ったと思うけど僕はマネージャーなのにスクールアイドルと言うかアイドルの知識が全然ないよ」

花「・・・でも・・・」

こ「プロのアイドルなら、私たちはすぐに失格。でも、スクールアイドルなら、やりたいって気持ちを持って、自分達の目標を持って、やってみる事はできる！」

こ「こちちゃんいいこと言うね」

「！」

海「それが、スクールアイドルだと思います」

穂「だから、やりたいって思ったらやってみようよ！」

海「もつとも、練習は厳しいですが」

煌「海未、それはマイナスだよ」

穂「海未ちゃん！」

海「あ！失礼・・・」

μ s 「「あははははー」」」

花「・・・」ニコツ

こちちゃん達を見て小泉さんも微笑んでいた

煌「ゆっくり考えて、答え聞かせて」

穂「私たちは、いつでも待ってるから」

く西木野家く

真姫はライブ映像を見ていた

真「・・・」ハアツ

く星空家く

凜は、スカートを履いた自分の姿を見ていた

凜「・・・」

く小泉家く

花「・・・」

花陽は自分が小さい頃の写真を見ていた

次の日、この日も朝練をしてから午前の授業を受けた。

授業が終わるところこちちゃん達が近づいてきた。

こ「煌君、今日は一緒に食えることができる？」

煌「あーごめん今日も行かないと、後放課後も少し遅れるかも」

穂「えー今日もダメなの」

海「仕方ありません、煌斗にも用事があるんですから」

煌「じゃあそういうことで、ごめん」

くアイドル研究部く

今日もアイドル研究部に来ていた。

に「あんたここに何しにきたの」

煌「にこっち先輩に会いに？」

に「な、何いってんのよ、ってかにこっち先輩って言うなっ！／＼

「  
煌「本当は仕事と昼御飯食べに何ですけど」  
に「何でよっ！」

煌「まあ先輩に会いに来たってのも入ってるんですけどね」  
に「な、何言ってるのよ／＼」

それから昼御飯を食べながら会話をしていた。

に「それにしても、あんたがやってたそれ何してたの？」

煌「これですか？これは生徒会のやつですよ」

に「へえーあんたも大変ね、生徒会とかマネージャーもして」

煌「そんなことも無くはありませんがやりたくてやっていることなので」

に「凄いわねあんた」

煌「そんなことないですよ、そろそろ時間何で行きますね、にこっち先輩も遅れないよう気をつけて」

後ろから「にこっち先輩って言うな！」と聞こえて来たような気がするが気のせいだろう。

放課後になり生徒会室にきつきやっていた物とかを出してから屋上に向かっていると面白い物が見れた、それはまあ後でのお楽しみと  
いうことにしよう。

く屋上く

煌「ごめん、遅れた」

穗「遅いよはじめ君！もう夕方だよ！」

海「そうです。練習とはいえ時間を守って下さい！」

こ「まあまあ二人とも・・・」

煌「僕が言うのもあれだけど時間が惜しいから練習始めよう」

穗こ海「「はい！」「」

練習中に発生練習のような声とダレカタスケターと言う声が聞こえてきた事をここに記録しておこう

くくくくくくくくくくくくくくくく

休憩をしていると、扉の方から音が聞こえた

扉が開けられ小泉さんが真姫ちゃんと星空さんに抱えられ？つれてこられていた。

小泉さんには悪いけどポーズがちよつとグレイに似ていると思った

く数分後く

こ「つまり、メンバーになるってこと？」

凜「はい！かよちゃんはずつとずつと前からアイドルやってみたいと思つてたんです！」

真「そんな事はどうでもよくて！この子は結構歌唱力があるんです！」

凜「どうでもいいってどう言うこと！」

真「言葉通りの意味よ」

真姫ちゃんと星空さんが言い合いをしていた。二人が小泉さんを入れさせてあげようとしているのがわかるのたまが、小泉さんの意思がそこにはない

煌「待つて二人とも一番大事なことを忘れてるよ」

真凜「「大事なこと？」」

凄く息びったりこの二人実は仲が良いとか？

煌「小泉さんはどうしたい？」

花「わ、私はまだ・・・なんていうか・・・」

まだ前へ踏み出せてない小泉さんだが

凜「もおっ！いつまで迷つてるの！絶対やった方がいいの！」

真「それには賛成。やってみたい気持ちがあるならやってみた方がいいわ」

花「で、でも」

真「さつきも言ったでしょ。声出すなんて簡単。あなたなら出来るわ！」

凜「凜は知ってるよ！かよちゃんがずつとずつとアイドルになりたいて思つてた事！」ジツ

花「凜ちゃん・・・西木野さん・・・」

凜「頑張つて！凜がずつと付いててあげるから」

真「私も少しは応援してあげるって言ったでしょ」

真姫ちゃんと星空さんの後押しで前へ踏み出した

花「えっと・・・私・・・小泉」

すると星空さんと真姫ちゃんが二人で小泉さんの背中を押す

花「っ・・・」

小泉さんは改めて決意した

花「私、小泉花陽と言います！一年生で、背も小さくて、声も小さくて、人見知りで、得意なものも何もないです。でも、アイドルの思いは誰にも負けないつもりです！だから、μ'sのメンバーにしてください！」

穂「こちらこそ」スツ

穂乃果ちゃんが手を差し出す

穂「よろしく！」ニコツ

花「・・・グスツ」スツ

小泉さんが穂乃果ちゃんが差し出した手を握る

その奥では

凜「かよちん、偉いよ」グスツ

真「何泣いてるのよ」

凜「だって・・・てっ、西木野さんも泣いてる？」

真「だ、誰が、泣いて何か無いわよ！」

と小泉さんを推していた二人が泣いて喜んだ。まあ真姫ちゃんは認めなかったけど。

こ「それで、二人は？」

小泉さんの加入を喜んでいた二人に変化球を飛ばした

凜真「えっ？」

こ「二人はどうするの？」

真凜「「えっ？どうするって、ええ!?!」」

突然の誘いに戸惑っている二人にさらに海未が畳み掛けた

海「まだまだメンバーは、募集中ですよ！」

真「え・・・でも私は・・・」

凜「凜も・・・」

星空さんは分からないが、真姫ちゃんは家のことで断ろうとしていたその時

花「凜ちゃん、西木野さんやろう！それに、やらないで後悔するよりやつて後悔した方が良いつて言つてたよ？南本先輩が」

真凜「……！」

そして、真姫ちゃんと星空さんは海未とことちゃんが差し出した手を握つた

こうして、μ、sに新たに三人の女神が加入した

翌日の朝

凜「はあく朝練つて毎日こんなに早く起きなきゃいけないの」

真「当然でしょ」

μ、sに加入して初の朝練偶然階段の下で出会つた凜と真姫は一緒に登つていた。

すると、下から大きな荷物をもつた煌斗が来た。

煌「おはよう二人とも」

凜「おはようございます先輩！」

真「おはようございます」

凜「ところで、先輩なにもつているんですか？」

挨拶を終えると星空さんが僕の持つている荷物が気になつたよう  
で聞いてきた

煌「これ？これはスポーツドリンクとかタオルとかまあ色々入つて  
るよ」

凜「へーそうなんですネ」

真「つて、あれ？あそこにいるのは……？」

凜「あ！かーよちーん！」

小泉さんが星空さんの声に気づき、振り向いた

花「おはよう！」

凜「あ、あれ!?眼鏡は!？」

花「コンタクトにしてみたの、変……かな……？」

何と小泉さんが眼鏡からコンタクトに変えていた。

凜「ううん！全然可愛いよ！すつごく！」

何だろう凄く可愛い・・・」

花「へ・・・か、かわ／＼／」

何故か小泉さんが顔を紅くした

煌「もしかして、声に出てた？」

花「は、はい／＼／」

真「へえ、いいじゃない、ねえ、眼鏡取ったついでに・・・名前で読んでよ」

凜花「「え？」」

突然のことに小泉さんと星空さんは理解できてなかった

真「私も、名前で呼ぶから・・・花陽、凜・・・！」

珍しいあの真姫ちゃんから

凜花「「ー」」

凜「真姫ちゃん！」

凜「真姫ちゃんくん！真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃんくん！」スリスリ

星空さんが真姫ちゃんと連呼して真姫ちゃんの顔をスリスリしていた。

何か星空さん猫みたいだな

真「うるさい！」

そしていつもの照れ隠し

その光景を見ていると小泉さんが近づいてきた。

花「あ、あのちよつと良いですか？」

煌「どうかした？」

花「あの私のこと名前で読んでください」

煌「！うん、わかったよろしくね花陽ちゃん」

しまったつい輝夜を撫でるみたいに頭を撫でてしまった。

花「っ！はい！煌斗先輩！／＼／」

花陽ちゃんの顔が紅くしている

その時、仲間はずれが嫌なのか星空さんもということの名前で呼ぶことになった。

花「・・・」ジー



煌「……どうかした？」  
花「……っ／＼」サツ  
あ……、僕、嫌われたかも……